

靈界物語 第三三卷 海洋萬里 申の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三三卷』愛善世界社

2000(平成12)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序歌 じよか

瑞祥 ずゑしやう

第一篇 誠心誠意 せいしんせいい

第一章 高論濁拙 かうろんたくせつ（九一六）

第二章 灰猫婆 はいねこばば（九一七）

第三章 言靈停止ことたまていし〔九一八〕

第四章 樂茶苦らくちやく〔九一九〕

第二篇 鶴龜躍動かくきやくどう

第五章 神壽言かむよこと〔九二〇〕

第六章 皮肉歌ひにくか〔九二一〕

第七章 心の色こころいろ〔九二二〕

第八章 春駒はるこま〔九二三〕

第九章 言靈結ことたまむすび〔九二四〕

第一〇章 神歌しんか〔九二五〕

第十一章 波靜なみしづか〔九二六〕

第一二章 袂別けつべつ〔九二七〕

第三篇 時節到來じせつ たうらい

第一三章 歸途きと（九二八）

第一四章 魂たまの洗濯せんたく（九二九）

第一五章 婆論議ばろんぎ（九三〇）

第一六章 暗夜やみよの歌うた（九三一）

第一七章 感謝かんしゃの淚なみだ（九三二）

第一八章 神風清かみかぜきよし（九三三）

第四篇 理智りちと愛情あいじやう

第一九章 報告祭ほうこくさい（九三四）

第二〇章 昔語むかしがたり（九三五）

第二一章 峰みねの雲くも（九三六）

第二章 高宮姫（九三七）

第三章 鐵鎚（九三八）

第四章 春秋（九三九）

第五章 琉の玉（九四〇）

第六章 若の浦（九四一）

付録 伊豆温泉旅行に就き訪問者人名詠込歌

付録 湯ヶ島所感

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

序歌

中津御代より體主靈從の

邪さの教蔓こりて

吾等が遠津御祖たち

世人もろとも村肝の

心は漸く人ながら

悪しき風習に移ろひて

異しき卑しき蕃神を

専らと齋き奉りつつ

高く尊き天地の

嚴の御魂や瑞御魂

御幸に依りて惟神

大道の中に生れ出で

食物衣服住む家等

爲しと爲すこと事毎に

大御恵を受け乍ら

神の大道を粗略に

思ひ居る人多く出で

神に仕ふる大道は

月日と共に廢れ行き

天津神等國津神

祭れる神社も衰へて

皇神たちは彌放り

放りて神の大稜威

隠ろひ玉ひ蕃神は

所を得つつ天地の

大御祖神生神を

押し籠めおきて空蟬の

世人を欺き美はしき

神の御國を掻き亂し

汚せしことの慷慨しと

思ふの餘り大本の皇大神の御教を

能く説き明かし世の人に普く嚴の御恵み

深き由緒を克く諭し尊き珍の御柱に

造り上げむと瑞月が神の御命を畏みて

大き正しき十年の九月の中の八日より

神のまにまに述べ立つる尊き神代の物語

編み初めしぞ嬉しけれあゝ惟神々々

御靈幸はへましましてこの大本に集ひ來る

信徒たちは言ふも更普く世人に神界の

奇しき消息の大略を悟らせ玉へと願ぎまつる

此の時この際信徒は各自靈の御柱を

築き固めつつ嚴御魂瑞の御魂の説き諭す

教を以ちて行く先も如何なる曲神あらはれて

異議曲論蔓り來るとも交らひ口會ふ事もなく

主一無適の信仰を 續けて經と緯糸の
 教を信なひ玉へかし この世の御先祖と現れませる
 國常立大神は 三千年のいと長き
 あひだ根底の國深く 隠るひまして現世を
 浦安國と平けく 知食さむと神議り
 議り玉ひし有難さ あゝ惟神々々
 御靈幸はへましまして 奇しき神代の物語
 心静めて信徒が 讀み上げ讀み上げ大神の
 心を悟りて一日も 早く尊き大神の
 柱となりて神業に 仕へて世界を泰平に
 進め開かせ玉へかし 心も空しき瑞月が
 眞心こめて天地の 神の御前に願ぎ奉る。

大正十一年九月十九日（舊七月廿八日）

今日は如何なる吉日ぞ

萬代祝ふ龜岡の

瑞祥閣の建てられし

名さへ目出度き萬壽苑

天津御空は蒼々と

澄切り渡る初秋の

空をかすめて緩々と

かけり來りし二羽の田鶴

折から「出口」の「瑞月」が不二の高峰に常永に

出口瑞月

鎮まりぬます木の花の

咲哉の姫の御經綸

變現出沒極みなき

三十三相の神業に

因て述ぶる物語

三十三卷述べ了へて

松村眞澄

淨寫菩薩の「松村」氏

心も「加藤」明けく

加藤明子

いよいよ樂しき休養日

「東尾」見れば吉祥の

東尾吉雄

瑞「雄」あらはす公孫樹

常磐の松に羽休め

綾部あやべの方かたを眺ながめ居ゐる 鶴つるの姿すがたぞ勇いさましき

尊たふとき神かみの開ひらきたる 教をしへの花はなの千載せんざいに

かがやく時ときも「北村きたむら」や いや「隆光たかひか」る 「伊佐男いさを」氏は 北村隆光

手てにとる如ごとく思おもはれぬ 天あまの岩戸いはとの奥深おくふかく

隠かくれ居ゐませし大神おほかみの 稜威みいづも出口でぐちの神かみの道みち 出口伊佐男

暗夜やみよを照てらす瑞月ずいげつが 歡よろこび勇いさみ打仰うちあふぎ

我わが大本おほもとの瑞兆ずゐてうを 皇大神すめおほかみのまつぶさに

示しめし玉たまひしものなりと 千代萬代ちよよろじよを壽いそぎて

小松こまつの茂しげる神かみの園その 心こころも涼すずしき鈴蟲すずむしや

五み六ろ七くの御代みよを松蟲まつむしや 經たてと緯よことの綾錦あやにしき

機織はたおりむし蟲この此所こかしこ 歌うたへる聲こゑはキリギリス

コホロギ蟲むしの聲こゑ清きよく 眞澄ますみの鏡かがみ明あきけく

照てり渡わたる如ごとく聞きえたり あゝ惟かむながら神かむながら々々

御靈みたま幸さちはへ坐ましまして 芽出度めでたき田鶴たづの舞まふ如ごとく

高峰たかねの空そらに皇神すめかみの
 大和心やまとこころの隈くまもなく
 神かみの御前みまへに謹つつしみて
 九月くぐわつ二十日はつかの瑞祥ずいしやうを
 肉筆にくひつならぬ萬年筆まんねんひつの永々ながながと
 神かみの御爲おんため世よの爲ために
 神苑しんゑん内の老松おいまつの
 枝えだをば垂たるる心地こちよさ
 後日ごじつの爲ために記しるしておく
 例ためしもあらぬ事ことなれば
 御靈みたま幸さちはへましませよ。
 畏かしこき教をしへを敷島しきしまの
 照てらさせ玉たまへ天地あめつちの
 大ひろき正ただしき十一年じふいちねん
 うれしみ畏かしこみ命毛いのちげの
 墨すみをふくませ一ひと苦勞くらう

大正十一年九月二十日

第一篇 誠心誠意

第一章 高論濁拙（九一六）

嚴いづの御靈みたまに由緒ゆかりある 伊豆いづの神國かみくに田方たかたの郡こほり

湯ゆが島しま温泉せん湯本館ゆもとくわん 軒のきを流ながるる狩野川かのがは

連日れんじつ連夜れんやの大おほ雨あめに 水みづ量かさまさり囂がう々と

伊い猛たけり狂くるふ水みづの音おと 又またもや降ふり來くる大おほ雨あめに

亞鉛トタン板ばんの屋や根ねを轟とどろかし 耳みみさわがしき雨あめ館やかた

皇すめ大神おほかみを齋まつりたる 奥おくの一ひと間まに瑞月ずいげつが

安全あんぜん椅子いすに横臥わうくわして 瑞みづの御靈みたまに由緒ゆかりある

三十三卷物語さんじふさんくわんものがたり 完全うまらに委曲つばらに述のべ立たつる

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましまして

待ちに待ちたる靈界の三十の三巻の物語れいかい みづ みまき ものがたり

皇大神の道の爲世人の爲に三五のすめおほかみ みち ため よびと ため あななひ

教の蘊奥を説き諭す此眞心を諾なひてのり おくが と さと このまごころ うべ

神の教は日に月に茂り榮えてどこ迄もかみ をしへ ひ つき しげ さか まで

道の柱となさしめよ朝日は照るとも曇るともみち はしら あさひ てる とくも

月は盈つとも虧くるとも假令大地は沈むともつき み か たとへ だいち しづ

神の言葉は何時までも天地の續く其限りかみ ことば いつ 天地の續く其限り

月日と共に變らまじ天地開けし初めよりつきひ とも かは あめつちひら はじ

天津神達八百萬 國津神達八百萬あまつかみたちやほよろづ くにつかみたちやほよろづ

中にも分けて國治立の神の命の御來歴なか わ くにはるたちのかみ みこと ごらいれき

其外殊に御功績の著しきを選び集めそのほかこと みいさを いちじる よ あつ

雲霧分けて瑞月が宇宙の外に立ち乍らくもきり わ ずめげつ うちう そと た なが

松雲太夫に筆とらせとく物語永久にしょううんだいふ ふで ものがたりとことは

五六七の御世の末までも
照らせ玉へ惟神

神の御前に願ぎまつる
神の御前に願ぎまつる。

蒼空一點の雲影もなく
天津日は東天に

高山の頂きを掠めて
昇らせ玉ひ

平和の輝きを
地上に投げ玉ひ

涼しき風は
天然の音楽を奏し

山野の樹木は
惟神的に競うて舞踏をなす

蝶は翩翩として
心地よげに飛びまはり

魚は洩漑として
清泉に躍る

實に名にし負ふ高砂島の
瑞祥を、目の前り

天地四方に現はしぬ
今日はしも神素盞鳴大神

天降り玉ひて
アルゼンチンの珍の神館に

出でさせ玉ひ
八人乙女の末の御子

末子の姫の花の春
一度に開く木の花の

苔の上におく露も　いとすがすがしげに見えにける。

三五教の神司　龍の腮の球の玉

其神徳を身に受けて　救ひの神と輝ける

國依別の神司を　珍の都の主とし

末子の姫に娶はして　千代に八千代に高砂の

ほまれを四方に傳へむと　心欣欣大神は

今さし昇る天津日に　向つて兩手を合せつつ

祈り玉ふぞ尊けれ。

愈結婚の式は今宵と差迫り、松若彦、捨子姫は數多の神司を初め、信徒を役

して、今夜の慶事の準備萬端に全力を注ぎ、何れも甲斐々々しく東奔西走して、

喜色満面にあらはれ、上下一致、手の舞ひ足の踏む所を知らず、吾を忘れて大活

動をなせる折柄、此慶事を少しも祝せざるのみか、體主靈從の限りを盡し來りし

國依別が、瑞の御靈の生娘、末子姫に娶ひて、清き御魂を混濁し、折角ここ迄造

り上げた高砂島の瑞祥を黑白も分ぬ暗の夜に覆へさむは目の前り、神の御爲世の爲に、飽く迄も之を拒み遮り破約せしめむと、夜叉の勢凄じく、彼方此方と驅巡り、目を釣り上げ、顔を赤らめ、口を尖らせて運ぶ歩みも荒々しく、今夜の準備に目のまはる程多忙をきはめ居たる松若彦が館を叩き、慌ただしく入り来るは例の高姫さまであつた。高姫は門口より尖つた聲で、
高姫「御免なさいませ……私は皆さまに憎まれ者の名を取つた身魂の悪い高姫で御座います。急々お目にかかつて申上げたい事が御座いますから、どうぞ松若彦様に少時で宜しいから、御目にかかりたう御座います。どうぞ御取次を願ひます」とエライ權幕で呼はつて居る。カールは此聲に表へ驅出で、
カール「これはこれは、貴き高姫さまで御座いましたか。よくマア御入來、何の用かは存じませぬが、今日は貴方も御聞及びの通り、瑞月祥日と申しまして、アルゼンチン開けて以來、又とない結構な御日柄で御座います。御存じの通り、一片の雲影もなき青空に、天津日の大神様は赫々として輝かせ玉ひ、夜は三五の明月、銀玉を空に懸けたる如き瑞祥の今日、イヤもう目出たうて目出たうて、鶴は

千年、龜は萬年、東方朔は九千年、三浦の王統家五千歳、三千年の御仕組の一厘の花も開きそめ、目出たいの目出たくないのつて、何を仰有つても、今日に限つてグサグサした言葉はテンと耳には這入りませぬ。御用があれば更めて明日承はりますから、どうぞ今日は早く御歸り遊ばし、貴方も御結婚の準備の御手傳に御殿へお上り下さいませ。さぞ末子姫様が御待ちかねで御座いませうぞえ」

高姫「コレコレ、カール殿、お前に話さうと思つて來たのぢやない。主人の松若彦に意見をしようと思つて來たのですよ。主人にも取次がず、僭越至極にも門前拂ひをくらはすとはチト脱線ぢやありますまいか。又此高姫に對し、早く御殿へ上り、御手傳ひをせよと仰有つたやうだが、そんな命令を下すお前に、ヘン、權利がありますかい。グツグツして居ると、日が暮れます。さうすりやサツパリ後の祭り、サアもうお前さまに係り合つて居つては、事が遅れる。エ、そこ退つしやれ」

カール「コレコレ高姫さま、貴方は強行的家宅侵入をするのですか、法律を心得てゐますかなア」

高姫「エ、小癩面をさげて、法律の糞のて、何を言ふのだ。法律は死物だ、生きた人間が之を使へば活きるが、お前のやうなデモ法律家が何を吐いたつて、三文の価値もありませぬぞや。それだから神様が法律を變へるぞよと仰有るのだよ」

カール「高姫さま餘り馬鹿にして下さるな。これでも赤門出のチャキチャキの法學士、而も優等で出たカールさまだよ。餘り馬鹿にして貰ひますまいかい。やがて博士の稱號が下らむとしてゐる所だ」

高姫「博士が聞いて呆れますぞえ、お前のは博士でなうて、バカセだ。昔は八カセとよんだが今は八クシと讀むのだよ。讀方も知らぬよな法學士が何になるか、法學士でなうて、方角知らずと云ふ馬鹿者だらう。薄志弱行の徒計りが集まつて居るから、今では八クシといふのだ。白紙主義と云うて、白紙の様な清い精神なればまだしもだが、眞黒々助の濁つた魂で、法學士も博士もあつたものかいな。法律を殺して皆墓へ埋めるのだから、八カセと昔は云つたのだ。此頃は松若彦さまの庭先に立つて、箒を以て庭掃かせになると云つて威張つて居るのだから。何程箒（法規）が立派でも、神様の自然の憲法には抵抗することは出来ませぬ」

まい。法律と云ふものは其源を神界の憲法に發して居るのだ。其元を掴んだ日本魂の生粹の高姫に對し、何程辨護士もどきに滔々と懸河の辨を揮つても駄目ですよ。舌端火を吐き、炎を吹いて高姫を煙にまき、追ひ歸さうと思つても、いつかないつかかな日の出神の……オツトドツコイ……日の出る様な勢でも、只一口ジウンと水を注したら、忽ち消滅して了ふ様な屁理屈を云ふものぢやありません。それだから、人間の作つた不完全な學問は駄目だと云ふのですよ。『學ありたて、智慧ありたとして、神界の仕組は人民では分るものではないぞよ』と此世の根本を御造り遊ばした大先祖の國治立命様が仰られて御座るぢやありませんか。其大神様の片腕となつて御手傳ひ申す身魂の云ふことを、揚げ面して聞くと云ふやうな不都合千萬の罰當りが、どこにありますか。エー工面倒臭い、家宅侵入だらうが、何だらうが、そんな事を構うてゐる暇がない、カールさますつこんでゐなさい』

斯く争ふ所へ、松若彦は慌ただしく、何事ならむと奥の間より走り來り、松若彦『ヤア貴方は高姫様、何御用か存じませぬが、なることならば明日、どう

ぞ御訪ね下さいませ。萬一御都合が悪ければ、私の方から明日更めて御伺ひ致します

考へで御座いますから……」

高姫「間髪を容れざる危急存亡の今日の場合、そんな暢氣な事を云つて居られま

せぬ。何でもかでも、お前が發頭人だから、ここで一つ生命に代へても往生させ

ねばならぬ大問題が差迫つて来て居ります。後の後悔は間に合ひませぬからなア」

松若彦「これはこれは何の御用かと思へば、大變な急用との御話、そんなら私も

結婚の準備に付いて、何かと繁忙をきはめ、只今言依別様の御館へ出仕する所で

御座いました、僅五分間だけ繰合せまして御話を承はりませう」

高姫「別に五分間もかかりませぬ。お前さまが高姫の云ふことを……ウンさうか、

御尤も……と首を縦に一つふりさへすれば、それで萬事解決がつくのだ」

松若彦は言依別、國依別、龍國別より昨夜の高姫の妨害運動を早くも聞かされ

てみたので、テツキリ、此事ならむと早合點し、

松若彦「高姫さま……如何にも御尤も、仰有る通りに致します……ウンウン……」

ガクリガクリと首を縦にふり、

松若彦「左様なら……」

と言つたきり、足早に裏口よりぬけ出し、言依別命の館を指して、雲を霞と逃げて行く。

高姫「コレ……松、ワ、若、ヒ、彦何をビコビコとしてゐるのだ。奥の間にかくれて居つても、埒はあきませぬぞえ。……ヤツパリ氣が咎めると見えて、蒟蒻のやうにビリビリふるつて、奥の間に隠れたのだな。蚤が蒲團の縫目に頭計り隠して、尻を出しとるやうな、アザとい事をしたつて駄目ですよ。今日は奥の手の、とつとこの日の出神様を現はして侵入しますぞ。今日は肉體の高姫では御座いませぬぞ。改めてカールさま、念押しておくから、後で刑法だの、民法だのと小言を云うて下さるなや」

と云ひながら奥の間さして足音高くかけ込んだ。見れば松若彦の影もない。

高姫「ハテ、どこへ隠れたか」

と言ひつつ、窓をガラリと開けて外面を眺むれば、松若彦は一生懸命、裏道を尻ひつからげて、どこかを指して走り行く姿が見えた。高姫は地團駄ふんで悔しが

り、

高姫「エ、卑怯未練な松若彦、彼奴を往生させねば此世はサツパリ泥海だ。千騎

一騎の神界の御用だ」

と云ひながら、裏口あけて松若彦が後をトントントンと追っかけて行く。

(大正一一・八・二四 舊七・二 松村眞澄録)

第二章 灰猫婆(九一七)

カールは高姫の無遠慮にも奥の間にかけてこみしを怒り乍ら、自分も奥の間に到つて見れば、豈計らむや、松若彦、高姫の姿が見えない。ふと開け放つた窓より外を覗き見れば、一丁許り距離を保つて、二人はマラソン競走の眞最中であつた。カール「何とマア、私の強い婆アだなア! 後追っかけて引つ掴まへ、散々に懲らしめてやりたいは山々だが、俺が今ここを飛出せば、サツパリ不在となつて了

ふ。あれ丈距離を保つて居る以上は、ヨモヤ追つ着きはせまい。其間に松若彦様はどつかへ隠れられるだらう。俺も臨時留守番を頼まれて来た以上は一刻の間も、此家を空にしておく譯には行くまい。ア、残念だ……」

と呟き乍ら、玄關口に歸つて来た。そこへ慌ただしく常彦、春彦の兩人、駆け来り、

常彦「ヤア是はカールさまですか。一寸御尋ね致しますが、ウチの高姫さまは御越しにはなりませんか」

カール「ハイ、お越しか怒りか知りませぬが、随分に妙な事が起りましたよ。今裏の廣道で、松の木と鷹とのマラソン競走が行はれて居ますワイ」

春彦「鷹は羽があつて空中を翔るでせうが、松が走るとはチツト合點が往かぬぢやありませんか」

カール「今日は餘りお目出たい日だから、山川草木皆踊り狂うて、喜んでゐます。私だつて常彦……オツトドツコイ、常の日は違ひ、春彦……又違うた……春の花咲くやうな陽氣な氣になつて、勇んで居ります。常は尻の重い私でも、今日は

何となしに氣もカール、足もカールになりました。アハ、ハ、ハ、ハ

常彦「それはさうと、私方の大將、高姫さまは如何になりましたか」

カール「どうも斯うもなりませぬワイ」

春彦「お出でになつたか、ならぬか、ハツキリ言つて下さいな」

カール「ハイ、お這入りになりました、すぐ裏口から御出になりました。大島が

入口、出口が元で、龍宮館が高天原と定まりましたぞよ。アツハ、ハ、ハ、ハ

常彦「まるでキツネ彦が狐にだまされたやうな心持になつて來た」

カール「松若彦の世になるぞよ、末廣き末子姫、國依別命と今夜は、愈々夫婦に

おなり遊ばすぞよ、靈と靈の因縁が寄合うて、此の身魂は此身魂、あの身魂はあ

の身魂、これとこれと夫婦、あれとあれと夫婦と、身魂の因縁性來を檢めて、結

婚な結婚な結婚式が今晚は始まり、高砂や此浦舟に帆をあげて、と云ふ所だア

ハ、ハ、ハ、イヤもう目出たいの、目出たうないのつて、開闢以來の御目出たさだ

……コレ常彦、春彦、御兩人、お前さま達は何と心得ますか」

常彦「本當に結構な事ですなア。併し乍ら結構だとは申されませぬワイ……ナア

春彦、一寸面倒いからなア」

カール「あなた方御兩人は、今度の結婚が御氣に容らないのですか」

常彦「イエイエどうしてどうして、大賛成です。併し乍ら夜前も、夜中時分に高

姫さまに叩き起され……お前の感想はどうだ……と尋ねられたので、國依別さま

もエライ人だと思つて居つたがヤツパリ偉い御方だと、うつかり蝶つた所、それ

はそれはエライ権幕で大變な不機嫌でした。それから高姫さまは夜の明ける迄一

目も寝ず、奥の間でブツブツと獨言を云つて言依別がどうの、松若彦がどうのと、

ハツキリは分らぬが、大變にこぼしてみました。私も夜明け前になつてからグツ

と寝て了ひ、目をあけて見れば、高姫さまのお姿が見えない、コリヤ大方、松若

彦様の御宅へ出て来て、又もや生れつきの持病を起し、鉋理屈をこねて困らせて

ゐるに違ひない、こんな目出たい事にケチつけてはたまらないから、何とか吾々

兩人が、高姫さまに出會つて、御意見を申したいとの一心から、手水もつかはず、

朝飯も食はず、周章狼狽、取る物も取りあはず此處まで驅けつけた次第で御座い

ますワイ」

春彦「本當に困つたお婆アですワイナ。私も永らく自轉倒島から此處までついて來ましたが、それはそれは随分でしたよ」

カール「アハ、、、ずいぶんジャジャ馬ですなア。併し乍らあの儘にして置いたら、此の目出たいお日柄を目出たくない様な事に潰して了ふか分りませぬから、コリヤ斯うしては居られますまい……常彦さま、お前はここの留守をして居て下さい。私は松若彦様の後を追つて行く、春彦は高姫さまの後を追つて行くと云ふ事にしてカール、春彦兩人が第二のマラソンをつづけませうかい」

常彦「何分宜しう頼みますよ……カールさま、春彦さま、サア早く往つて下さい。キット捨子姫様か、言依別様の御宅に間違ひないから……」

兩人は「合點だ」と尻ひつからげ、裏口より大股に大地をドンドンと威喝させ乍ら、一生懸命に驅出した。

二人は二三丁許り驅出した。そこには横幅三間許りの深い川が流れてゐる。さうして丸木橋が架つて居た。川は深い割には水は少く、ほとんど向脛の半分許り没する位な浅き流れであつた……フト見れば一本橋は脆くも落され、高姫は

川底に大の字となつて、フン伸びてゐる。これは松若彦が高姫の追ひ來るのを防がむ爲に、臨時に一本橋を落しておいたのである。高姫は頭を前にして、力一杯走つて來た其情力で、俄に立とまる事を得ず、止むを得ず、橋なき川と知り乍ら、落込んで了つたのであつた。二人は、

「ヤア、コリヤ大變だ」

と辛うじて川に下りたち、高姫の人事不省となつてゐる體を引かたげ高姫の臨時館へ送り届け、いろいろと介抱をし、祝詞を奏上し、鎮魂を施した。漸くにして高姫は息を吹き返し、あたりをキヨロキヨロ眺めてゐる。

カール「モシモシ高姫さま、お氣がつかまりましたか、大變なお危ないこつて御座いました。マアマア私や春彦、兩人が、後から従いてゐたものだから、あなたの貴重な命が御助かり遊ばし、こんな目出たい事は御座いませぬワイ」

高姫「ハイ、それは有難う御座います……と御禮を申したらお前さまのスツカリ壺にはまるだらうが、ヘンさうは往きませぬぞや。何だか後から人が突くやうに走つたと思つて居つたら、カール、お前は私の後を追つかけて來て、あの丸木橋

の下へ突込んだのだな。此高姫だとして橋のない川を渡らうとするやうな馬鹿ぢやありませぬワ。何だか餘り後から突きよつたものだから、とうとう其勢ひに落込んで了つたのだ。あんな深い川へはまつたのが分つたと云ふのは怪しいぢやないか、お前は松若彦の御贔屓を志て、私を突きはめたのだらう。オツホ、、、、悪を企んでも忽ち露はれませうがな」

春彦「高姫さま餘りぢやありませんか、現に私が證據人です。折角命を助けて貰ひ乍ら、何と云ふ無茶な事を仰有るのですか」

高姫「オツホ、、、、同じ穴の狐同志が同盟して、甘い事を仰有いますワい。何程あの川の様な深い企みをして、智慧の流が浅いことから、直に底が見えましてな、ホツホ、、、」

カール「何とマア小面憎い婆アだなア。俺も最早愛想が盡きて來た」

高姫「さうだらう さうだらう、小面憎い婆アで愛想がつきたものだから、突き落したのだな。カールは口から、吾と吾手に白状しましたねエ」

春彦「アア、モウ情ない……これ、カールさま、どうぞ私に免じて、御腹が立

つだらうが恠へて下さいや」

高姫「コレ春公、恠へてくれと云ふのは、ソリヤ見當違ひぢやありませんか。大

それた日の出神の生宮………とも云ふべき、此高姫をこんな目に合せておいて、

なぜ低頭平身、おわびをせないのか、チツト方角違ひぢやありませんか」

春彦「知りませぬワイ。お前の様な疑ひの深い悪垂れ婆アは、今日限り絶交だ、

カールさまに對して申譯がないから………人の命を助けてやつて、あやまらねばな

らぬ法がどこにあるものか、おまけに吾々が突き落したなどと、無理難題を云ふ

にも程がある」

高姫「謝罪らな、あやまらぬでよい。殺人未遂罪で告發するから其積りであなさ

いや」

カール「高姫さま、あなたは餘り俄にあんな所から轉倒なさつたものだから、精

神が逆上してるのでせう。マア氣を落ち着けて能く物の道理を考へて御覽なさい。

私は是から御暇いたします」

高姫「ヘン、口と云ふものは重寶なものですなア、甘い事云つて逃げようとして

も、逃がしませぬぞや。人殺し奴が！

春彦「エ、もう俺も堪忍袋の緒が切れた。たとへ天則違反になつても、カールさ

まに對して申譯がない、覺悟せい！」

と云ひ乍ら、其處にあつた木株の火鉢を取るより早く、高姫目がけてブチつけよ

うとする。此時カールはあわてて、

カール「ヤア春さま、まつたまつた」

と抱きとめる。春彦は、

春彦「オイ、カールさま、構うてくれな。おりやモウ死物狂ひだ」

と火鉢を兩手に、頭上高くふり上げた儘、目を怒らしてゐる。高姫は、

高姫「ヘン、春の野郎、何をするのだ。そんな事でビクつく様な高姫ぢやありま

せぬぞえ。悪い事をした言譯のテレ隠しに、そんな狂言を、二人が腹を合せてや

つた所で、計略の奥の奥まで、チヤンと見えすいた高姫、そんな威喝は駄目です

よ。オホ、

春彦益々怒り、

「モウ了見ならぬ」

と高姫の頭に投げつけようとする。カールは力一杯春彦の捧げた両手を握つてとめやうとする。火鉢はいつの間にかひつくり返り、三人の頭の上は灰だらけになり、眞黒けの黒猫になつて、目も見えぬ儘に金切聲を張り上げ掴み合つてゐる。此所へ言葉も静に、

「御免なさい」

と云ひ乍ら、門口の戸を開けて入り来る一人の立派な男ありき。是は言依別命なりける。

(大正一一・八・二四 舊七・二 松村眞澄録)

第三章 言靈停止(九一八)

言依別命は此灰まぶれ騒動を一目見て、顔をしかめ乍ら、

「モシ高姫さま、言依別で御座います。コリヤマあ如何なさいました。カールに春彦、お前さまも灰まぶれぢやないか」

カール「ハイ、さつぱり灰猫婆に灰を吹かれました、イヤもう此通り、「ハイ」北【ハイ】陣の爲體で御座います。「ハイ」もうさつぱり、さ【ハイ】が付きませぬワイ。どうぞ御【ハイ】慮下さいませぬ様に、「ハイ」願致します」

春彦「紅塵萬丈……でなくて、薩張【ハイ】塵萬丈な目にあひました。「ハイ」神樂の舞を一つ舞うて見ましたが、何分爺になる役が【ハイ】カラですものだから、薩張采【ハイ】をふり損つて、灰猫婆アさまに咬みつかれました」

言依別「何だか知らぬが、大變な喧譁をしたと見えますな。……高姫さま、コリヤ一體如何して斯んな事が突發したのですか、何か深い事情があるでせう。お差支なくば其理由を拜聴したいものですな」

高姫「あのマア言さまの白々しい事ワイの。甘く兩人に言ひ含ませ、此婆アをこんな目にあはしておいて、ヘン、そんな計略は最早駄目ですよ。良い加減にお前も改心をなさいませ。ドハイカラ奴が……」

言依別ことよりわけ「コレハ　コレハ、思おもひがけなき高姫たかひめ様のお言葉ことば……」

高姫たかひめ「思おもひがけないでせう、それだけ死しに際の悪わるい高姫たかひめとは、いかなお前まへでも思おもひ

がけなかつたでせう、ホツホ、憎にくまれ子こ世よに覇は張ばる……とか申まをしましてな、

折角せつかく國依別くによりわけが甘うまくドハイカラの言ことさまに取とり込み、今こん晩ばんは男をと蝶ふ女め蝶めの花はなの杯さかづき酌しやくかは

す段取だんどりまで、やうやう漕こぎつけた所ところ、諸行無常しよぎやうむじやうの世よの中なか、月つきに叢雲むらくも、花はなに嵐あらしの高たか

姫婆風ひめばかせが、情つれなくも吹ふきすすさみ、半開はんかいの荅つほみを散ちらさうとする。其防禦網そのぼうぎよあみを……否いな

網所あみどころか、妨害ぼうがいを根絶こんぜつせむと甘うまく企たくんだお前達まへたちのお手際てぎは、實じつに見み上げたもので御座ござ

いますワイ。オツホ、何程なにほど琉りうの玉たまや球きうの玉たまを手てに入いれたと云いつて、琉球相りうきうさう

にして居をつても、肝腎かんじんの身魂みたまが曇くもり切り、灰泥はいどろの様やうになつて居をつては、玉たまの效かう用よう

はサツパリ玉無たまなしですよ」

春彦はるひこ「コラ灰猫婆はひねこばばア！　貴様きさまは比喩方たとへかたのない悪垂婆あくたればばアだ。改心かいしんをしたり、慢心まんしんを

したり、モウ是これから先さきは何なにをするのだ。疑心暗鬼ぎしんあんきの張本人ちやうほんにん奴めが」

高姫たかひめ「改心かいしん慢心まんしんの後あとは感心かんしんだよ。お前達まへたちのどこ迄までも執念しふねん深い計略けいりやくには此高姫このたかひめも實じつ

に感心かんしん……否寒心いなかんしんせざるを得えませぬワイ。オツホ、」

と云つた限り、「ウーン」と反り返り、癩癩の様に口から泡を吹き、手足をピリピリと震はせて、其場にふん伸びて了つた。

春彦「餘り逆理屈ばかりを云ふものだから、神様の神罰が當つて、此通りふん伸びて了つたのだ。……なあカール、善と惡とを立別ける神は、此世に確に居られますねえ」

言依別「オイお前達、そんな事言つてゐる時ぢやない。早く灰を掃除して、顔を洗ひ、手を清め、高姫さまの御恢復を祈らなないぢやないか」

春彦「言依別様、こんな婆アは懲戒の爲に、斯うやつて冷たくなる所まで放つていてやつたら如何でせう。實に怪しからぬ奴ですから、又呼び生かしてやらうものなら、それこそ反對に團子理屈を捏ね、殺人未遂犯で告訴するの何のと、命助けて貰うた恩人に向つて、仇を返すのですから、幸ひ、自分が勝手に死んだのですから、こんな厄介者はモウ放つといたらどうでせうなア。カールに對しても、實に私としては助けてやつて呉れとは申されませぬワイ」

カール「そんな御氣遣ひは要りませぬ。サア早く御病氣全快の御祈念を致しませ

う
と門先を流れる小川に飛込み、身をきよめ、一生懸命に病氣恢復の祈願をこめ始めた。

言依別命は天の數歌を歌ひ上げ、反魂の神術を修して居る。春彦も止むを得ず、身を清め一生懸命に祈願をこめた。漸くにして高姫は息吹き返し、目をキヨ口つかせ乍ら、三人の姿をマンジリともせず打眺めてゐる。

言依別 高姫様、お氣がつかましたか、大變に心配を致しましたよ

高姫は耳は聞えるが、まだ言靈の應用を許されてゐなかつた。蠶の蛹か芋蟲のやうに面をふくらし、プリンと體を振つて、背中を向けて、……甘い事を言うて呉れな。そんな上手追従は喰ひませぬぞ……といふ意思を表示して居る。春彦は又もや高姫の前にまはり、
春彦 高姫さま、御氣分は如何ですか
と尋ねれば、又もプリンと背中を向ける。カールも亦前に寄つて、
カール 高姫さま、良い加減に疑を晴らし、御機嫌を直されては如何ですか、餘

り執拗過ぎるぢやありませんか[□]
と顔を覗けば、又もやプリンと背中を向ける。三人の挨拶を一人々々、弓張は
きでもする様に彼方へ向き此方へ向き、恰度、操り人形の様に同じ所に尻を卸し
た儘、右に左に回轉して居る。

言依別命は言靈の使用を神様より止められて居る事を悟り、又もや天の數歌を
歌つて、言語の自由に發し得る様と祈願をこめた。されど何故か容易に言靈を發
射することが出来なかつた。言依別はカールを従へ、目禮し乍ら、春彦に介抱を
命じ置き館を指して歸り行く。

(大正一一・八・二六 舊七・四 松村眞澄録)

第四章 樂茶苦(一九一九)

夜の明けぬ前から捨子姫は、末子姫の結婚の用意に取掛り、相當に繁忙を極め

て居た。そこへ松若彦は慌ただしく走り來り、案内を請うた。高公は玄關にて其用事の趣を聞き、直ちに捨子姫の居間に通した。

捨子姫「松若彦様、慌ただしきあなたの御様子、何か變事が出來したので御座いますか」

松若彦は息を喘ませ乍ら、

松若彦「今日は誠に以てお目出たう存じます。さて只今私の館へ高姫さまが御出でになり大變な權幕で御座いました。要するに今度の結婚をジャミにしようと熱心に車輪的運動をやつて居られます。私も言依別命様より昨夜大體を承はつて居りましたので、これは屹度其問題に違ないと思つてゐますと、果して私が只一口……ウン……と云つて、首を縦にふりさえすれば、萬事解決のつく話だと言はれましたので、コリヤ大變、今となつて水を注されては、素盞鳴大神様初め、末子姫様に對し、申譯がない。辨舌の巧な高姫さまに對して議論をして居つても、追つ付かない、取り合はぬが奥の手と、裏口から逃げて參りました。あと振り返り見れば、高姫さまは髪ふり亂し、夜叉の様な勢ひで、私のあとを追つかけて來ま

す。私は幸ひ、一本橋を落しておいて高姫さまの進路を遮り、漸く此處まで駆けつけました。何れ、後程お宅へお出でになるでせうから、それ迄にトツクリとあなたと御相談を遂げ、姫様にも斷乎たる決心を持つて頂きたいと存じまして、お邪魔を致しました次第で御座います」

捨子姫「あゝ左様で御座いましたか。それは大變御心配をおかけ申しました。姫様の方に於ては夜前より、言依別命様と私が、及ばず乍ら、いろいろと申上げ、今の處では挺でも棒でも動かぬ様な固い御決心で御座いますから、たとへ高姫さまが何と云はう共、最早ビクとも動きませぬ。安心して下さいませ」

松若彦「それを聞いて私も一寸安心致しました。併し乍ら、こんなゴテゴテした事が、肝腎の國依別さまの耳へでも這入らうものなら、淡泊な人だから……エ、もう斯んなゴテゴテした縁談なら眞平だ……と首を横にふられたが最後、吾々は大神様に對して申譯が御座いませぬから、それが第一心配で御座います」

捨子姫「國依別さまも、妾が夜前ソツと高公を伴れ訪問致し、いろいろと御意見を承はりましたが、高姫さまの混つ返しについて、少し許り、うるさがつて居ら

れました。併し乍ら、今度はどうしても、大神様の思召だから、否む譯には行かぬ……と仰有つて固い固い決心が見えました。これも一つ御安心下さいませ」

斯かる所へ、言依別命は只一人現はれ来り、高公に案内させ乍ら、ツカツカと奥に入り、

「ヤア松若彦さま、此處でしたか、よい所でお目にかかりました……捨子姫様、

御忙しい事で御座いませうなア」

松若彦「つい今の先、参つた所で御座います」

捨子姫「何と云つても、お目出たい事で御座います。あなたも此事に就て御奔走

遊ばし、さぞお心遣ひの程御察し申上げます」

言依別「時に松若彦さま……高姫さまの事ですが、俄に病気が起り、一旦は人事

不省に陥られました。吾々初め、カール、春彦兩人の祈願に依りて、漸く息を

吹き返されました。併し乍ら言靈が停止されて了ひ、何を言つても御答へなく、

目計りパチつかせ、體をプリンプリンと振つて計りられます。何れ今夜の御結

婚がお氣に入らないのでせうが、此事計りは如何あつても、高姫さまの御意見ば

かり用ゐる事は出来ませぬから、飽く迄も此盛典を完全に成功させたいと思つて、あなたの御宅へ御訪ねした所、常彦さまが留守をして居り、大方捨子姫様の御宅へ御出でになつたのだらうとの事、それ故お邪魔を致しました様な次第で御座います」

松若彦「何と云つても、最早動かすことは出来ませぬ。サア是から御殿へ上りまして、一切の準備に取り掛りませう」

言依別「左様ならば、捨子姫さま、松若彦様、取急ぎ参りませう」

と立出でむとする所へ、高姫は髪ふり亂し、玄關口に立塞がり、何時の間にか言靈の停止は解除されて、

高姫「言依別、松若彦、捨子姫殿、用が御座る。早く此門あけて下さい」

と唝鳴り立ててゐる。後よりカール、春彦の二人は慌ただしく走り來り、漸く玄關先で追ひ着き、胸を撫で卸してゐる。

言依別命外二人は、高姫の聲を聞き、又うるさい、やつて來よつたなア……と口には云はねど、互の顔を色に表はし乍ら、松若彦は表の戸を開き、

松若彦「高姫さま、今日は取込んで居りますので、どうぞ御歸り下さいませ。又

明日ゆつくりとお目にかかりませう」

高姫「又しても妾を邪魔者扱ひにして、門前拂ひを食はず積りですか。言に捨の

兩人も此に居られるでせう。何程忙しいか知りませぬが、今晚の【ことよりわけ】

て、きまりつけねば、此儘に捨子姫と云ふ譯にも参りませぬぞや。各自が氣をつ

けて、姫様の此結婚は末の末子姫まで考へて上げねば、あつたら娘をドブ壺へお

とすやうなことを致しましたら、それこそ瑞の御靈様へ、あなた方の言ひ譯が立

ちますまいぞや、此高姫も第一申譯が立ちませぬからなア。妾の言ふ事はどうで

御氣には容りますまいが、ここは一つ大雅量を出して老人の云ふ事も取上げて貰

ひませぬと、後に至つて臍を噛むとも及ばない、困つた事になりますぞや」

松若彦「そんな玄關口で、見つともない、どうぞ奥へ御通り下さい」

高姫「通れと云はなくても、通らなおりますか。妾の云ふ事が通らねば、通る所

まで通して見せます。桃李物云はずと云ふ事がある。此高姫が通りたら最後、物

言ひなしに私の意見を通して下さい。お前さま方は寄つてたかつて、とりどりの

をだはらひやうぢやうばか
小田原評定計りに日を暮して御座るが、何を云つても、雪と炭、月と鼈程身魂の
違ふ此縁談がどうして纏まりませう。チツト胸に手を當てて後先を考へて御覽な
さい。誠に神様を侮辱すると云うても、これ位甚だしい事は御座いますまい。誰
も彼も末子姫様の御機嫌をとる事計り考へて、御身の上の大事と云ふ事を一寸も
構はないから、已むを得ず、年の老つた高姫が又しても又しても出馬せねばなら
ぬ様な事が、出来て来るのだ」

カール「高姫さま、そらさうですワイ。お前さまは三五教の元老株だから、かう
いふ時にや飛んで出るのが當り前だらう。内閣組織の時でも、いつも元老が飛出
すぢやないか。併し乍ら立憲政體の今日、元老の飛出しは時代錯誤だとか何とか
云つて、随分國民が小言を云うてゐますよ。モウいい加減にお前さまも目をつぶ
つておとなしくしたら如何ですか。日進月歩の今日餘り古い事をふりまはされる
と、時代に順應すると云ふ神策が行はれなくなり、此ウツの國は今日の文明から
継子扱をされる様になつて了ひますよ」

高姫「お黙り召され……カール口か何ぞのやうにベラベラと、こんな所へ出しや

ばる幕ぢやありませぬぞえ。私は言依別様、其外の立派な方々に御意見に來たのだ。コンマ以下のお前さまが、此大問題に對して、何嘴を尖らすのだい」
カール「これだから、あの儘にしておいたが宜かつたのだ。言依別さまを途中まで御送りすると……おいカール、お前は高姫の言靈が利く様に、マ一度引返し、ウ……ア……と二聲言靈を唱へてやれ、そしたら自由自在に口が利けるやうになるから……と氣の良い言依別様が仰有つたものだから、此奴ア今物言はしたら、面倒だと思ひ乍ら、教主の命令背くに由なく、引返して物を言ふ様にしてやれば、すぐ此れだから困つて了ふ。どうぞマ一遍、とめる工夫はあるまいかな」
と首を振つてゐる。

高姫「ヘン、お構ひ遊ばすなや。高姫は生れついてから唾ぢや御座いませぬぞや。言靈は天地の神様から授かつて居ります。とめられるものなら、とめて御覽なさい。妾が物言はなかつたのは餘りむかつくから、言はぬは言ふにいや優ると、プリンプリンと身振りで妾の意志を表示してゐたのだよ。何も御前さまのウ……ア……なんてアタ阿呆らしい、そんな言靈で物が云へたなぞと、餘り、ヘン、見違ひを

して貰ひますまいかいなア。ア、ドレドレ、何時迄も門立ち藝者の様に玄關口に
立ちはだかつて、言靈の發射も氣が利きませぬワイ」
と云ひ乍ら、奥の間に主人顔して、ドンとすわり込み、
高姫「松若彦さま、今朝程は大きに御世話になりました。ヨウマアあんな深い川
へおとして下さいまして、誠に高姫も空中滑走の味を覚え、愉快なこつて御座い
ました、ホ、ホ、ホ、。人を呪はば穴二つですよ。お前さまもシツカリなさらぬと
何時ドブへはまるか分りませぬぞや……コレ捨子姫さま、お前に一つ言ひたい事
がある」

捨子姫「ハイ、何事か存じませぬが、承はりませう」

高姫「お前も大抵私が何しに來た位は、云はいでも御分りになつてゐるでせう。

今高姫が茶々入れに來るから、腹帶をしめねばならぬと、三人が三人云ひ合はし
て御座つたでせう。併し乍ら、よく考へて御覽なさい。あの國依別と云ふ男、若
い時から親子兄弟散り散りバラバラとなり、碌に教育も受けず、乞食の様にうる
つきまはり、少し大きくなると、女たらしの後家倒し、婆孀弱らせの家潰しをや

つて来た如何にも斯うにも仕方のない代物を、此頃球の玉とかの神力を受けたと云つて、御勿體ない素盞鳴尊様の大切な御娘子、末子姫様の婿にしよう等とは地異天變、天地轉倒の行方と申さねばなりません。是までお前さまは何時也未子姫様の近侍を勤めてゐた關係上、主人が大事と思ふ誠があれば、國依別の缺點を包まず隠さずさらけ出して、愛想をつかささせ、此縁談を破約なさるやうに仕向けるのが、お前の誠だ。本當に姫様を大事と思召すなら、早く御意見を遊ばして、やめさせて下さい。年が老つた高姫がワザワザここへ訪問したのも其爲ですから、どうぞ高姫のここへ来たことが無駄足にならぬ様に頼みますよ。なア捨子姫さま、お前は餘り身魂が良過ぎて、映り易いから、言依別さまや松若彦に甘く抱き込まれ、とうとう末子姫様の御心を動かしたのぢやありませんか。』

捨子姫「ハイ妾が第一、大贊成で御話を持ちかけたので御座います。さうすると言依別様や、松若彦様、龍國別様初め、肝腎の末子姫様が、それはそれは御愉快相な御顔でニコニコとお笑ひ遊ばし……捨子姫、何事もあなたに御任せするから、宜しう頼むよ……と恥かし相に仰有いました。それで妾が氣を利かし、相手方の

國くに依より別わけ様さまへも極き力よく運う動んいたし、ヤツとの事ことで纏まとまつた此この縁えん談だん、何なに程ほど高たか姫ひめ様さまが水みづを
お注さし遊あそばしても最も早はやビクとも動うごかす事ことは出で来きなくなつて居をります。御ご注ち意ゆう御い親しん
切つは有あり難がたうごムさいますが、今こん度どはモウ仕しか方たがないと御お諦あきらめ下くださいませ。肝かん腎じんの御ご本ほん
人ん様さま同どう志しが、ニコニコで居をられるなり、大おほ神かみ様さまは特とくに御お喜よろこびなり、どうして今日こんにち
になつて之これを顛てん覆ぶくさす事ことが出で来きませうか
高たか姫ひめ「エ、そこ迄までモウ固かたい決けつ心しんが出で来きて、若わかい方かた同どう志しが思おもひ合あうて御ご座ざるのを動うご
かさうと云いつたつて動うごきますまい。殘ざん念ねん乍なら、モウ高たか姫ひめも贊さん成せいいたしま……せう
かい、就ついては、貴あなた女なも御ご存ぞんじの通とほり、大おほ神かみ様さまの教をしへには一いち汁じふ一いつ菜さいとの定さだめで御ご座ざ
いますから、決けつして御ご馳ち走そうはしてはなりません。上うへから贅ぜい澤たくな鑑かがみを出だすと、
人じん民みんが皆みなそれに倣ならひ、世よの中なかが不ふ經けい濟ざいになつて來きましては、神かみ様さまに又またもや御ご心しん配ぱい
をかけなくてはなりません。松まつ若わか彦ひこ「何なに程ほど軍ぐん備び縮しゆく小せう、經けい費ひ節せつ約やくの流りう行かうする世よの中なかだとして、一いつ生しやう一いち代だいの結けつ婚こんに其その
様やうなケチな事ことが如どうして出で来きませうか、そんな時じ代だい遅おくれのイントランスな事ことを
言いふと、人ひとが馬ば鹿かにしますよ。それ相さう當たうの身み分ぶんに應おうじて御ご馳ち走そうもせねばなりません

まい。お酒もドツサリ皆さまに飲つて頂き、底抜騒ぎをやつて面白可笑しく御祝をする方がどれ丈素盞鳴大神様が御喜び遊ばすかも知れませぬ。又吾々も大變に御喜びですからな。アハ、ハ、ハ、ハ、

高姫「私の云ふ事が頑迷だと仰有るのですか、何程新しいのが流行る時節だと言つて、神様の教まで背いてすると云ふ事は、一つ考へものでせう」

言依別「高姫さまの御言葉も御尤もです。松若彦さまの御意見も強ち棄てる譯にも行きましますまい。そこは身分相應と云ふ事に致しまして、正中を取り、餘りケチつかず、餘り奢らずといふ程度に、今晚の結婚を無事に、幾久しく祝ひ納めるやうにしたら如何でせう」

高姫「そんなら私も我を折つて言依別様にお任せ致します。又空中滑走させられたり、言靈を停止させられたり、灰猫婆アにせられると困りますから、憎まれないやうにおとなしう改心しておきませう」

言依別「有難う」

松若彦「安心致しました」

捨子姫すてこひめ 「お目出めでたう御座ございます」

カール 「面白おもしろうなつて來きました」

春彦はるひこ 「今晚こんばんは御馳走ごちそうで、ドツサリと酔よはして貰もらひませう。何なにより彼かより上戸じやうこの春はる

彦ひこ、一番いちばんにお目出めでたいワ、有難ありがたいワ、アハ、ハ、ハ、ハ、

(大正一一・八・二六 舊七・四 松村眞澄録)

第二篇 鶴龜躍動かくきやくどう

第五章 神壽言かむよごと〔九二〇〕

末子姫すゑこひめ、國依別くによりわけの結婚問題けつこんもんだいも、高姫たかひめの不同意ふどうい的てき了解れうかいを得えて、漸やうやく執行とりおこなはるる事こと

となつた。珍うづの館やかたの大廣おほひろまへ前に於おいて祭壇さいだんを設まつけ、言依別命ことよりわけのみことは齋主さいしゅとなり、松若彦まつわかひこ、龍國別たつくにわけは其他そのたの神務しんむに奉仕ほうしし、茲ここに芽出度めでたく、神前結婚しんぜんけつこんの祭典さいてんは濟すんだ。愈直會いよいよほらひの宴えんに移うつり、十二分じふにぶんの歡喜くわんきを盡つくし、各歌おのおのたを唄うたひ、舞まひ、踊をどりなどして、今日けふの慶けい事を祝しゆくすることとなつた。

言依別命ことよりわけのみことは恭うやうやしく神しん殿でんに拜禮はいれいし、禮服れいふくを着つけたる儘まま、聲こゑ淑しとやかに歌うたひ始はじめたり。

仰おほげば高たかし久方ひさかたの天あめの八重雲やへくもかき分わけて

筑紫つくしの日向ひむかの立花たちばなの青木ヶ原あをきがはらに天降あもりまし

撞つきの御柱みはしらめぐ巡あり合あひ妹背いもせの契ちぎりを結むすびたる

神伊奘諾かむいざなぎ大御神おほみかみ神伊奘册かむいざなみ大神おほかみの

其古事そのふるごとに神かむならひ瑞みづの御靈みたまと現あれませる

神素盞鳴かむすさのをのおほかみ大神おんこの御子おんことあれます末子姫すゑこひめ

心こころの色いろも紅くれなゐの誠まこと一つの神司かむつかさ

珍うづの御國みくにに天降あもりまし神かみの教をしへを楯たてとなし

四方の民草安らかに 治め玉ひし功績は

皇大神の御心に 叶ひまつれるものぞかし

三五教の神司 言依別は自凝の

秀妻の國を後にして 心も清き宣傳使

國依別と諸共に 神の教を開かむと

波かき分けてテルの國 高砂島に名も高き

テル山峠を乗り越えて ウヅの都に來て見れば

五風十雨の序よく 五穀は稔り果物は

豊に熟する神の國 あゝ惟神々々

神の恵の幸はひて 末子の姫の御神力

月日と共に輝きぬ かかる折しも素盞鳴の

神尊ははるばると ウブスナ山の齋苑館

立出でここに來りまし 末子の姫に巡り會ひ

喜び勇み玉ふ折 言依別の伴ひし

國依別を見そなはし
末子の姫の夫となし

此神國を守れよと
宣らせ玉ひし尊さよ

言依別は畏みて
松若彦や捨子姫

其外數多の人々に
皇大神の言の葉を

宣べ傳ふれば悉く
喜び勇み此度の

慶事をあななひ玉ひけり。
あゝ惟神々々

結びの神の引合せ
魂と魂との睦び合ひ

魂の納まる肉宮に
尊卑高下はありとても

その源を尋ぬれば
同じ御神の分靈

時世時節につれられて
高くも生れ又低く

生るる事は神界の
幽玄微妙の御經綸

靈魂と靈魂の系統を分け
清く結びし此縁

千代も八千代も限りなく
高砂島のいつ迄も

榮え盡きせぬ松の世の
色も褪せざれ永久に

波も静かに二柱 鴛鴦の衾の暖かに
浮びて進む和田の原 深きは民の心かな
深きは神の御恵みぞ 月日は清く明かに
空澄み渡る今日の宵 心も勇み身も勇み
此慶びは此處よりは 外へはやらじと眞心を
神の御前に誓ひつつ 嬉しみ尊み祝ぎまつる
嬉しみ尊み祝ぎまつる

と歌ひ終り、元の座に着きぬ。松若彦は立上り、銀扇を開いて祝歌を歌ひ且つ自ら舞ひ踊りける。

豊葦原の瑞穂國 島の八十島八十の國
限なく巡り救ひます 神素盞鳴大神の
末の御子と生れませる 末子の姫のくはし女に

浮瀬に沈みて惱み居る 世人を普く救ひ行く

三五教の宣傳使 國依別の神司

汐の八百路を打渡り 奇しき功績を遠近に

現はし玉ひて今ここに ウヅの都に出で玉ひ

神素盞鳴大神の 御言畏みましまして

末子の姫と妹と背の 契を結ぶ今日の宵

天津御空に照りわたる 日影は明かく月清く

星の影さへキラキラと いつもに變る空の色

天祥地瑞の吉祥日 言依別の神司

齋主となりて神前に 結婚式を舉行し

いよいよ茲に妹と背の 道を結びて永久に

此神國を守ります 今日はじめとなりにけり

いよいよこれよりウヅ館 月日並びて皓々と

輝き玉ふ高砂の 常磐の御世となりぬべし

あゝ惟神々々かむながらかむながら 松若彦が眞心をまつわかひこ まじこころ

述べて芽出度き今日の日をの めでた けふ ひ 壽ぎまつり瑞御靈ことほ みづみたま

神素盞鳴大神の千代の齡を祈りつつかむすさのをのおほかみ ちよ よはひ いの

夫婦が幸を皇神の御前に祈り奉るめをと さち すめかみ みまへ いの たてまつ

朝日は照るとも曇るともあさひ てる て くも 月は盈つ共虧くる共つき み とも か とも

國依別や末子姫さかし女くはし夫相並びくによりわけ すゑこひめ さか しめ はし をあひなら

現はれぬます上からは高砂島は何時までもあら みく に たた うへ たかさこしま いつ

珍の御國と稱へられ常世の春の永久にうつつ みくに たた とこよ はる とこしへ

花咲き亂れ鳥歌ひ山川清く風清くはな さ みだ とりうた やまかはきよ かぜきよ

野は青々と茂り合ひ青人草は大空のの あをあを しげ あ あをひとぐさ おほぞら

星の如くに生み殖えて榮え久しき松の世のほし ごと う ぶ さか ひさ まつ よ

嬉しき姿を瑞御靈神の御前に言靈のうれ すがた みづみたま かみ みまへ ことたま

清き限りを捧げつつ畏み畏み願ぎまつるきよ かぎ ささ かしこ かしこ ね

畏み畏み願ぎまつるかしこ かしこ ね

と歌ひ了つて座に着いた。捨子の姫は立上り、銀扇を開いて自ら歌ひ自ら舞ひ、
今日の慶事を祝ぎ奉りける。其歌、

久方の高天原を出でまして 四方の國々巡りまし

八岐大蛇や醜神の 伊猛り狂ひ民草を

苦しめ悩ます曲津見を 仁慈無限の大神は

生言靈の神力に 言向け和し玉ひつつ

百の悩みを嘗め玉ひ 心も辛き潮沫の

凝りて成るてふ島々を 巡らせ玉ひ御恵の

露をば與へ玉ひつつ 草木も靡く御威勢に

高天原の空清く 大海原の底あかく

波に泛べる國土は 清くさややく茂り合ひ

三千世界の萬有は 君の威徳を畏みて

仕へまつれる尊さよ かかる目出度き大神の

珍うづの御子おんこと生あれませる
 八人乙女やたりをとめの末子すゑこひめ姫ひめ
 年端としはも行ゆかぬ中うちよりも
 神かみの誠まことの御惠みめぐみを
 草くさの片葉かきはに至いたるまで
 うるほはせむと思召おぼしめし
 顯恩郷けんおんきやうに現あれまして
 バラモン教けうの鬼雲彦おにくもひこが
 館やかたに入いらせ玉たまひつつ
 醜しこの魔人まびとの惟神かむながら
 誠まことの道みちに服従まつろふを
 待またせ玉たまへる折柄をりからに
 太玉神ふとたまがみの現あれまして
 鬼雲彦おにくもひこは逸早いちはやく
 雲くもを起おこして逃にげ去さりぬ
 末子すゑこの姫ひめは是非ぜひもなく
 姉あねの命みことと諸共もろともに
 流れも清きよきエデン川がは
 渡りわたて四方よもに神かみの道みち
 開ひらかせ玉たまふ折をりもあれ
 鬼雲彦おにくもひこが部ぶ下か共どもに
 嗅かぎつけられて妾わらはまで
 半朽なかばくちたる釣舟つりぶねに
 乗のせてすげなく和田わだの原はら
 つき放はなされし苦くるしさよ
 神かむ素す盞さん鳴なる大神おほかみの
 雄々ををしき清きよき靈みたまをば

受けさせ玉ふ末子姫

少しも驚き玉はずて

妾の心を勵ませつ

荒波猛る海原を

かいくぐりつつ漸くに

神の御稜威もテルの國

ハラの港に上陸し

テル山峠を乗り越えて

御靈の力を現はしつ

バラモン教の神司

石熊カールの兩人を

言向和せ急坂を

登りつ下りつ人々の

命を狙ふ曲神を

稜威の言靈宣り玉ひ

言向和してウヅの國

神の館に出でましぬ

妾も姫に従ひて

ここに現はれ來る身の

嬉しさ樂しさ如何許り

國の司となり玉ひ

世人を導き玉ふ折

三五教の神司

言依別の神人が

雲霧分けて降りまし

此處に止まり玉ひつつ

教を開き玉ひしが

神素盞鳴大神の

瑞の御靈は捨子姫
此現身にかからせて

アマゾン河に向ひたる
鷹依姫や高姫の

危難を救ひ言靈の
御稜威に百の曲神を

言向和せと宣り玉ふ
言依別の神人は

其神言を畏みて
時を移さず供人を

從へ都を立出でて
帽子ヶ嶽に向ひまし

アマゾン河を見下して
微笑み玉ふ折柄に

國依別の宣傳使
仕組の絲に引かされて

四人の供を從へつ
ここに登りて來ましける。

琉と球との寶玉の
御稜威に充てる兩人は

アマゾン河の南北に
展開したる森林の

醜の曲津を射てらせば
神の御稜威は目のあたり

鷹依姫や高姫も
光を慕ひて屏風山

帽子ヶ嶽に集まりぬ
かくも尊き神徳を

負はせ玉へる宣傳使

國依別の眞人が

ウヅの都に現れまして

末子の姫の夫となり

幾久しくも末永く

契を結ばせ玉ふこそ

實にも尊き限りなれ。

加之瑞御靈

神素盞鳴大神は

遠く波路を打わたり

これの慶事に臨みまし

親子夫婦の契をば

依さし玉へる有難さ

あゝ惟神々々

神の恵は目のあたり

永く仕へし捨子姫

やうやう心もおちつきて

雪積む山の冬の木の

花咲く春に會ふ心地

あゝ惟神々々

結ぶの神のいつ迄も

二人の仲は睦じく

變ることなくまして

神の御稜威も高砂の

尾の上の松の色深く

千年の鶴の末永く

龜の齡の萬世も

いと平けく安らけく

鎮まりみませ二柱しづ ぶたはしら
捨子の姫は今よりはすてこ ひめ いま
尚も心を勵ましてなほ こころを はげ
力の續く其限りちから つづ そのかぎ
誠一つを楯となしまことひとつを たて
神と君とに仕へなむかみ きみ つか
あゝ惟神々々かむながらかむながら
御靈幸はへましませよみたまさち

と歌ひ了り、悠々として吾座に着きける。

(大正一一・八・二六 舊七・四 松村眞澄録)

第六章 皮肉歌(九二一)

高姫は立上り、祝歌を歌ひ始めた。其歌、

天の岩戸の初めより 女ならでは夜が明けぬ

國くにと稱となへし神かみの國くに 女をんなにかけてはぬけ目めなき

國くに依よ別のわけ神かみ司つかさ 宗むね彦ひこお勝かつの昔むかしより

凄すこ腕うでをば持もつてゐた 此この世よの紊みだれた行やり方かたを

自じ由いう自じ在ざいに振りまはし 名なを轟かしとどろききたりけり

さなはなさなりならな三あ五なの 尊たふとき神かみの御み教をしへに

心こころの底そこより改かい心しんし 生うまれ赤あか兒こになりたれど

未いまだ安あん心しんする所ところへ 私わたしとしてはゆきませぬ

さなはなさなりならな瑞みづ御み靈たま 神かむ素す盞さ鳴の大おほ神かみの

清きよき尊たふとき思おぼ召しめし 末すゑ子この姫ひめの御み心こころに

叶かなへまつりし果くわ報はう者もの 國くに依よ別のわけ宣せん傳でん使し

玉たまかこつけに高たか姫ひめを 瑞みづの御み靈たまの現あれませる

竹ちく生ぶの島しま迄まではるばると 遣つかはし玉たまひし御ご神しん力りき

誠まことに感かんじ奉たてまつる あゝ惟かむ神な々ながら々む

神かみに任まかせて高たか姫ひめは 莫なう此この上うへは何なに事ごとも

此縁談このえんだんに關くわんしては 申まを上げぬと定きめました

コレコレ國くに依より別わけさまえ お前まへは元もとより氣樂きらく者もの

からかひ上手じやうずの生うまれつき これからチツトは村肝むらぎもの

心こころの駒こまを立直たてなほし 早はやく眞ま面目まじめになりなされ

アルゼンチンの神館かむやかた 神かみの柱はしらと國くにの君きみ

重荷おもにを負おうたお前まへさま どうぞ確しつかり乎りしておくれ

親おや子はこ一世いつせ夫婦ふうふ二世にせ 主從しゅじう三世さんぜといふ掟おきて

お前まへの夫ふう婦ふは二世にせ三世さんぜ 五ご世せや六ろく世せぢや御座ござるまい

天地てんちの規則きそくにてらしなば これ程ほど違あな反な人ひとはない

さはさり乍ながら惟かむ神ながら 瑞みづの御靈みたまの贖あがなひに

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

只何事ただなにごとも人ひとの罪つみ 直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし

宣のり直なほされて宗彦むねひこの 成なれの果はてなる宣傳せんでん使し

國くに依より別わけは不思議ふしぎにも 水晶すいしやう無垢むくの御靈みたまなる

末子の姫と結婚し

高き位に上りつめ

普く世人に臨むとは

どこで算用が違うたかと

私は合點が行きませぬ

國依別の神さまよ

憎いことをば高姫が

吐すと思うたら違ふぞえ

モウ是からは謹んで

末子の姫を尊んで

他の女に目をくれず

妻大明神と崇めたて

大事に大事に仕へませ

またも持病が再發し

手當たり次第に手を出して

姫の心を惱ますな

これこれ末子のお姫さま

國依別と云ふ人は

私が只今云うたよに

油斷のならぬ色男

朝な夕なの起伏しに

氣を付けなされ婢女を

側におくなら不器量な

おかめの様な女をば

きつと侍らせおきなされ

中々油斷がなりませぬ

これ高姫が老婆心

お道を思ひ國思ひ

お前まへを大事だいじと思おもふ故ゆゑ 日ひの出で神かみの生いき宮みやが

オツトドツコイコラ違ちがうた、 日ひの出での勢いきほひ大空おほぞらに

輝かがやき亘わたる増鏡ますかがみ 心こころに映うつつた誠まことをば

鏡かがみにかへて進しんぜませう あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

神かむすさのをのおほかみ素す盞さん鳴なり大神おほかみの 貴うづの御前おんまへ憚はばからず

申まをしあ上げたる高たか姫ひめの 苦にがき言ことば葉はを神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ 見直みなほしませよ大神おほかみよ

言ことよりわけ依よ別の教けうしゆ主しゆさま 捨すてこ子この姫ひめの侍女こしもとさま

松まつわかひこ若わか彦ひこの司つかささま 此このたかひめ高たか姫ひめが云いうたこと

キツト忘わすれちやなりませぬ 正しやうくわつことば月げつ言ことば葉はは誰たれも好すく

人ひとの嫌いやがる言ことたま霊たまを 竝ならべて云いふのも心こころより

皆みなを大だいじ事じと思おもふゆゑ 不ぶてうはぶ調てう法はふしてからゴテゴテと

意いけん見けんしたとて仕しやう様やうがない 前まへつ前まへつに氣きをつける

神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと惡あくとを立たてわ別わける

日の出神は明かに 鏡の如く善悪を

心の底より照りわたし おさばきなさる神様よ

一度に開く木の花の 今日の出たき宴席に

皆さまたちの喜ばぬ 苦しい言霊御馳走に

私は竝べておきました こんな粗末な品物と

只一口にけなさずに 能く味うてたべてたべ

苦しい言葉は胃の薬 霊の薬になりませ

クスリクスリと片隅に 笑うて御座る人がある

お前は何がそれ程に 可笑しう御座るか石熊さま

お前の名前は固けれど 心の中は反対に

國依別の亞流だらう 同氣同心相求め

同病互に憐れむは 天地の道理と聞くからは

今日は目出たい席ぢや故 餘り咎めはしませぬが

モウ是からは晴れの場で こんな不都合があつたなら

高姫承知をしませぬぞ

皆さま奇妙な顔付で

穴があく程わしの顔

眺めて御座るが気が知れぬ

あゝ豆鐵砲を鳩鳥が

くらつたやうなお顔付

何を心配なされます

目出たく式も濟みたれば

皆さま互に打とけて

心の底をさらけ出し

此高姫の云ふ通り

國依別の身の爲に

氣をつけなさるが誠ぞえ

あゝ惟神々々

餘り永らく言靈を

使ふと皆さま缺伸して

あゝ言ひなさる

ホんに醜いお顔付

アフンと致して御座るのか

折角あいた其口が

塞がらぬ様な顔をして

五百羅漢の陳列場

さながら眺むる如くなり

あゝ惟神々々

お氣にいらぬこと計り

ベンベンだらりと述べ立てて

お氣をもませて濟みませぬ

此高姫は今日限り

國依別の事につき 一切萬事申さない

國依別の神さまよ どうぞ安心なさいませ

是ぢやに依つて平常の 其行ひが肝腎ぢや

まさかの時に人々の 前で恥をば晒されて

赤い顔をばせにやならぬ 皆さまこれが好い鑑

三五教の御教を よつく守りて妹と背の

夫婦の道を違へじと 慎み守るが宜しいぞ

あゝ惟神々々 惟神ぢやと思やこそ

私も今度の縁談を 神素盞鳴大神の

言葉に免じて口つめる 天津神達八百萬

國津神達八百萬 國魂神の龍世姫

神命の御前に 高姫祈り奉る

高姫祈り奉る

と皮肉な歌を唄ひ、元の座にツーンとして、坐り込みける。

（大正一一・八・二六 舊七・四 松村眞澄録）

第七章 心の色（九二二）

鷹依姫は立上り、嬉しげに銀扇を開き、少し曲つた腰を伸ばせる様な心持にて、おとなしく歌ひ始めた。

☞ 常世の國の自在天 齋きまつりしバラモンの

神の教を諾ひて 此上なきものと思ひつめ

自凝島に打わたり アルプス教と銘打つて

高春山にたてこもり テ、カ、二人を司とし

教を傳ふる折柄に 思ひがけなき三五の

神かみの司つかさの方かた々がたが 言こと靈たま戰せんを 開ひらく べく

登のぼり來きませし其その時ときに 龍たつ國くに別にの 吾わが倅せがれ

巡めぐり會あうたる嬉うれしさよ 國くに依より別にの 神かみ様さまは

龍たつ國くに別にや 玉たま治はる別にの 教をし司つかさや 空もく助すけさま

お初はつの 姫ひめと 諸もろ共ともに いと 懇ねんろに 三あな五なひの

教をしを 諭さとし 玉たまひつ 錦にしきの 宮みやに 伴つれ 歸かへり

朝あさな 夕ゆふなに 神かみの 前まへ 使つかは せ 玉たまひし 嬉うれしさよ

黒くろ姫ひめ様さまが 預あづかりし 黄こが金ねの 玉たまは は しくも

いつの 間まに やら 紛ふん失しつし 黒くろ姫ひめさまが 驚おどろいて

ヤツ サモツ サと 修しゆ羅らも やし 吾われ等ら 親おや子こを 疑うたがひて

詰つめよ せ た ま ふ 恐おそろし さ 此この事こと 忽たちち 高たか姫ひめの

耳みみに 聞きえて 親おやと 子こは 黄こが金ねの 玉たまの 搜そう索さくを

言いひつ け ら れ て 是ぜ非ひも なく 高たか砂さ島じまに ふ み 迷まよひ

いろ いろ 雜ざつ多たと 憂うき苦く勞らう 嘗なめ たる 御おか げ に 神かみ様さまの

誠まことの道みちを心こころより 悟さとりて親おやこ子はテ、力ちからの
 二人ふたりと共にアマゾンの 速はや瀬せを渡わたりて空そらを蔽おほふ
 時雨しぐれの森もりに立たち向むかひ 獸けものの王わうとなりすまし
 神かみの御言みことを宣のべ傳つたふ 時ときしもあれや琉球りゅうきうの
 玉たまの力ちからを身みに受うけし 言こと依別よりわけの神司かむつかさ
 國依別くによりわけの神人しんじんが 吾等われら一同いちどうを救すくひ上あげ
 アルゼンチンの都みやこまで 伴ともなひ玉たまひ歸かへりける。
 吾等われら親おやこ子は勇いさみ立たち 來きたりて見みれば末子すゑこひめ姫ひめ
 神かむ素す盞さん鳴の大神おほかみの 此處ここに現あらはれましまして
 御稜みいづ威を照てらさせ玉たまひつづ 大恩たいおん受うけし國依別くによりわけの
 神かみの命みことに末子すゑこひめ姫ひめ 千代ちよの契ちぎりを今け日ふの宵よひ
 結むすばせ玉たまふと聞ききしより 心こころも勇いさみ氣きも勇いさみ
 有あり難がた涙なみだになくれました 國依別くによりわけの神かみ様さまよ
 末子すゑこの姫ひめを末すゑ永ながく いつくしみつつウヅの國くに

ウヅの館やかたに永久とこしへに 鎮しづまりゐまして世よの人ひとを

安やすきに導みちびき玉たまへかし あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

尊たふとき神かみの御み恵めぐみを 感かん謝しゃしまつり妹いもと背せの

身みも健すこやかに幸さきかれと 國く治にはる立たち大おほ御み神かみ

豊とよ國くに姫ひめ大おほ御み神かみ 其その外ほか百ももの神かみ達たちの

御み前まへに祈いのり奉たてまつる あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

御み靈たま幸さちはひましませよ[㊦]

と歌うたひ了をはつて、重おもき體からだをゆすり乍ながら、元もとの座ざに着ついた。龍たつ國くに別にわけは立たち上あがり、銀ぎん扇せんを
開ひらいて、自みづから歌うたひ自みづから舞まふ。

高たか姫ひめさまや黒くろ姫ひめの 鋭するどき眼まなこに睨にらまれて

思おもはぬ嫌けん疑ぎをうけ乍ながら 親おや子こは悲かなしき旅たびの空そら

自おの凝ころ島しまを後あとにして 荒あ波ら猛たける海うな原ばらを

いのち 命カラガラ渡り来て

たかさしま 高砂島に上陸し

かがみ 鏡の池に居を構へ

おやこふたり 親子二人が玉捜し

こころ 心の鬼に責められて

やいん 夜陰に紛れてアリナ山

スタスタ登り下りつつ

アルゼンチンの荒野原

ポプラの蔭にて皇神の

きよ 清き尊き御教

かかぶり茲に親と子は

はじめ 初めて迷ひの夢もさめ

くわうや 曠野を涉り海を越え

かんなんしんく 艱難辛苦の其果ては

アマゾン河の森林に

つさぎ 兔の王の神となり

ことよりわけ 言依別や國依別の

をしへつかさ 教司の神人が

ひかり 光に照され屏風山

ぼうしがだけ 帽子ヶ嶽に攀登り

ここ 茲に一行十八の

みたま 身魂と共にやうやうに

ウヅの都に来て見れば

おも 思ひがけなき末子姫

すてこ 捨子の姫と諸共に

くだ 降りゐますぞ有難き

われら 吾等親子は朝夕に

かみ 神の恵を嬉しみて

仕へまつれる折もあれ 救ひの神とたよりたる

神素盞鳴大神は 又もや此處に天降りまし

げに温かき言の葉を 下させ玉ふ尊さよ

自凝島をあちこちと 手を引き合うて巡りたる

いとも親しき道の友 國依別の神司

球の御玉の光もて ウツの御國の神柱

司となりて末子姫 妻に持たせつ永久に

鎮まり玉ふ妹と背の 今日の御式を親と子が

心の底より感激し 祝ひ奉るぞ嬉しけれ

國依別よ若草の 妻の命と末永く

鴛鴦の衾の夢さめず 身も健かに榮えませ

あゝ惟神々々 神の恵は目のあたり

現はれまらず尊けれ 現はれまらず尊けれ

と極めて簡單なる歌なれども、龍國別が國依別に對する友情の籠りあるに、何れも感歎せざる者はなかつた。石熊は立上り、銀扇を開いて、自ら歌ひ自ら舞ふ。

高照山の山麓に
バラモン教の神館

太しく廣く立て竝べ
朝な夕なに大國彦の

神の命の神靈を
齋きまつりて諸人を

教へ導きみたりしが
アンゼンチンのウツ都

三五教の勢ひは
旭の豊榮昇る如

四方に輝きわたりしを
心の中の曲者に

そそのかさされていろいろと
神の大道のさまたげを

致せしことの恥かしさ
乾の瀧にあらはれて

命危き所をば
末子の姫に助けられ

巽の池に向ひ立ち
足を痛めていろいろと

悩む折柄側近く
添ひて仕へしカールさまが

心配りの神徳に

足の病も癒やされて

心も勇み身も踊り

ウツの都に来て見れば

教の花は日に月に

梅花の如く薫りける

かかる所へ三五の

錦の宮の大教主

言依別の出でましに

再び喜悅の花は咲き

上下睦びて惟神

教を傳ふる折もあれ

神素盞鳴大神の

いと嚴かな神懸

アマゾン河に向ひたる

鷹依姫や高姫の

司を救ひて逸早く

珍の都に歸れよと

宣らせ玉ひし神言に

言依別の大教主

吾等四人を従へて

帽子ヶ嶽に向ひまし

めでたく凱旋なし玉ひ

歸りて見れば素盞鳴神の

瑞の尊は日月の

御空に輝く御姿

天降ります尊さよ

斯くも尊き神人の

集まり玉ふ珍館あつ たま づつやかた 國依別や末子姫くによりわけ すゑこひめ
 妹背の契を月清きいもせ ちぎり つききよ 今宵の空に結びますこよひ そら むす
 其嬉しさに石熊もそのうれ いしくま 皇大神の底知れぬすめおほかみ そこし
 深き仕組を拜察しふか しぐみ はいさつ 心の限り身の限りこころ かぎ み かぎ
 誠を捧げまつりつつまこと ささ 天地百の神達にあめつち もも かみたち
 誓ひて仕へ奉るちか つか たてまつ あゝ惟神々々かむながらかむながら
 神の御靈の幸はひてかみ みたま さち 心濁れる石熊をこころにこ いしくま
 千代に八千代に永久にちよ やちよ とこしへ 使はせ玉へ國依別のつか たま くによりわけ
 神の命や末子姫かみ みこと すゑこひめ 珍の御前に願ぎまつるうづ みまへ ね
 あゝ惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はひましませよみたま さち

(大正一一・八・二六 舊七・四 松村眞澄録)

第八章 春駒（九二三）

春彦も立上り、祝意を表し、歌ひ始めたり。

高姫さまのお伴して 【秋】津の島を【春】彦が

いと「なつ」かしき故里を 御靈の「ふゆ」をかかぶりて

教を四方に「しき」島の 大和男子の益良夫が

常彦さまと只二人 瀬戸の海をば船出して

艀櫂を漕ぎつつ渡り来る 浪高姫の御劍幕

荒き汐路を打ち渡り 船を暗礁に乗り上げて

高島丸の船長の タルチルさまに助けられ

波高砂の島の端 テルの港に安着し

金剛不壊の如意寶珠 其他の玉の所在をば

尋ねむものと言依別の 瑞の命の跡逐うて

鏡かがみの池いけに立向たちむかひ いろいろ雑多ざつたと身みをこがし
アマゾン河がはを初めはじとし 時雨しぐれの森もりのまん中なかで
モールバンドでつくはに出會でし 震ふるひ戦をのく折柄をりからに
言依別ことよりわけの神かみさまが 遣つかはし玉たまひし神司かむつかさ
四人よにんのお方かたと諸共もろともに 大森林だいしんりんをくぐりぬけ
鰐わにの架橋かけはし打ちわたり 兔うさぎの都みやこに立向たちむかひ
鷹依姫たかよりひめの一行いっかうと 帽子ぼうしヶ嶽がだけの靈光れいくわうを
合圖あひづに漸やつやく登りのぼりつめ 目出度めでたく此處ここにつきにけり
國依別くによりわけの神司かむつかさ 末子すゑこの姫ひめの夫つまとなり
偕老かいらう同穴どうけつ永久とこしへに 妹背いもせの道みちを結むすびます
其事そのこときまりて高姫たかひめは 身魂みたまが濁にごつた濁にごらぬと
自らみづか心こころを濁にごしつつ あちら此方こちらとかけ廻めぐり
遂ついには深ふかき川かはに落おち 命いのちを助たすけて貰もらひつつ
突き落つしたと逆理屈さかりくつ 呆あきれ果はてたる計ばかりなり

又もや館にかつがれて

歸つて息を吹返し

相も變らぬ毒々しい

憎まれ口を叩きつつ

カール春彦腹を立て

目を釣り合せてゐたりしが

私は腹がたちまちに

有合ふ火鉢を手にささげ

高姫目がけて投げつける

覺悟した時カールさま

待て待て暫し待て暫し

そんな亂暴はやめておけ

何ぢや彼ぢやと引止める

火鉢は忽ち墜落し

そこらあたりが灰まぶれ

高姫さまは知らぬ間に

灰猫婆さまとなりました

灰にまみれた三人が

ヤツサモツサの最中に

言依別の神さまが

表戸あけて入り來り

いろいろ雑多と言わけて

諭し玉へど高姫は

俄に唾の眞似をして

プリンプリンと身をまはす

芋葉に止つた芋蟲か

蠶の蛹の蟲のよに

頭をふつたり尻をふり

御機嫌悪いお顔付

忽ち捨子の姫さまの

館をさして驅出す

こりやたまらぬと春彦は

カールの司と諸共に

後追つかけて往て見れば

フルナの辨の高姫も

言依別や捨子姫

二人の御方の言靈に

何時の間にやら降伏し

いやいや乍ら承諾し

ホンに目出たいお目出たい

今宵は私も参りませう

何かお祝ませうと

立派に立派に言はしやつた

何をお祝なさるか

固唾を呑んで見て居れば

言はいでもよい事ばかり

國依別のアラ捜し

こんな目出たい宴席で

ケチをつけるも程がある

意地くね悪い婆さまぢやと

私は腹が立ちました

外の時なら此儘に

私は放かしちやおきませぬ

さは然り乍ら今日の日は

誠に芽出たいお日柄ぢや

喧嘩をしては濟まない

今迄いままできばつて居ゐたけれど

腹はらの蟲むし奴めが承しょう知ちせぬ

實じつに呆あきれたお婆ばアさま

皆みなさま定さだめて高たか姫ひめの

あの歌うた聞きいたら腹はらが立たたう

何なに程ほど腹はらが立たつとても

今宵こよひばかりは許ゆるしやんせ

朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假たとへ令だい地ちは沈しづむとも

あれ丈だけねぢれた魂たましひが

どうして元もとへ歸かへらうか

曲まがつた劍つるぎは如どう何うしても

元もとの鞘さやには納をさまらぬ

一いつぺんあつい火ひにかけ

きつい重おもたい向むかふ鎚づち

ドツサリ加くはへて打うち直なほし

焼やき刃ばを入いねねば仕しかた方たない

曲まがり切きつたる魂たましひが

如どう何うして元もとへ返かへるやら

何なに程ほど眞ま直な杖つゑでさへ

水みづにひたして眺ながむれば

必かならず曲まがつて見みえまする

瑞みづの御み靈たまの御おん前まへで

曲まがつた心こころの魂たましひを

浸ひたした所ところで如どう何うしてか

これが眞ま直なに見みえませうか

これ程ほど分わからぬ御おん方かたに

はるばる従ついて此處こまでも 來きた春彦はるひこと思おもはれちや

誠まことに誠まことに恥はづかしい こんこんな人ひととは知しらなんだ

呆あきれて物ものが言いへませぬ あゝ惟かむながらかむながら神々かみ

直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし 高姫たかひめさまは此頃このころは

神經過敏しんけいくわびんのヒステリに かかつて御座ござると宣のり直なほし

今迄いままで加くへた御無禮ごぶれいを 皆みなさま許ゆるして下くださんせ

お伴ともについてやつて來きた 此この春彦はるひこが高姫たかひめに

代かはつてお詫わびを致いたします あゝ惟かむながらかむながら神々かみ

こんな事ことをば此席このせきで 申上まをしあげるは濟すまないが

私わたしの體からだに憑うつつたる 副守護神ふくしゅごじんが承知しようちせぬ

止やむを得えずして惡口わるくちを ベラベラ喋しゃべつた此この私わたし

天津神あまつかみ達たち國津神くにたまがみ 國魂神くにたまがみさま春彦はるひこの

此過このあやまちを平たひらけく 見直みなほしまして今日けふだけは

どうぞお赦ゆるしなさりませ 國くに依別よりわけの神かみさまよ

末子の姫と睦まじう 生き存らへていつ迄も

神の御爲世の爲に どうぞ盡して下さんせ

春彦ここに眞心を こめて御願ひ致します

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

テーリスタンは立上り、歌ひ始めたり。其歌、

自轉倒島の中心地 高春山に現はれし

鷹依姫に從うて テーリスタンやカーリンス

左守右守の神となり 羽振りを利かしてゐる所

高姫黒姫兩人が 天の森までやつて來て

茲に二人が同志打 其機を伺ひいろいと

手段を以て兩人を 岩窟の中へ押込めて

金剛不壞の如意寶珠 喉から吐かそと思ふ間

國くに依より別わけのい一っ行かうが　　ここにに現あらははれましましまして

不ふ思し議ぎのえ縁んでわ吾われ々れは　　三あ五な教ひにけう入に信ふし

錦にしきのみや宮みのそば側ちか近かき　　黒くろ姫ひめ館やかたにみ身みをたく托たくし

仕つかへあ居あるをりわう黄ごん金こんの　　玉たまのふん紛しつ失じ事けん件より

高たか姫ひめさまにお追おひだ出だされ　　カカーーリリンンススとも諸も共もに

大おほ海うな原ばらをただ漂よひつ　　鷹たか依より姫ひめやた龍た國くに別わけの

神かみのつか司かさにめく巡めくりあ合あひひ　　四よ人にん揃そろうて高たか砂さこの

島しまにあやんうちやくうあ安あ着ちやくし　　いいろろいいろろ雑ざつ多たとき氣きをく配ばり

玉たまのあ所り在かをた尋つねつつ　　時し雨ぐれのもり森もりのしん森りん林に

兔うさぎのわ王わうのか神かみとなり　　月つき日ひをお送くるを折を柄からに

高たか姫ひめ一い行っ八はち人にんは　　のそのそ　　そこへやつて來きた

無ぶ事じでおまめでお達たつ者しやで　　目め出でたい事ことでご御ご座ざいます

ここんな挨あい拶さつそこそこに　　かはすま間まもなくい一い行っは

天あま津つ祝の詞りをの宣のり乍ら　　帽ぼう子しケが嶽だけにた立ち向むひ

今日けふの花形はながた役者やくしやなる 國くに依別よりわけの神かみさまに

ベツタリ出會であうて勇いさみ立ち 言こと依別よりわけの教けう主しゆ等らと

十八じふはち人の一行いつかうは ウヅの都みやこへ歸かへりけり

思おもひがけなき末子すゑこひめ姫ひめ 神かむ素す盞さん鳴なる尊みことまで

此處ここに現あらはれぬますとは 私わたしは夢ゆめにも知しらなんだ

あゝ惟かむ神ながら々々かむながら 神かみの御み稜いづ威あの現あらはれて

國くに依別よりわけの神かむつ司かさ 末子すゑこの姫ひめと合が衾ふきんの

目め出でたき式しきをあげ玉たまふ 此この宴えん席せきに侍はんりて

神み酒き神み饌け御み水みは云いふも更さら 海う河み山か野は種く々さの

珍物うましものをばあてがはれ 謠うたひつ舞まひつ勇いさましく

千歳ちとせ壽ことほぐ嬉うれしさよ あゝ惟かむ神ながら々々かむながら

御靈みたま幸さちはひましまして 放ほり出だされたる高たか姫ひめさまに

又またもや此處ここでいろいろの 妙めうなお歌うたを聞きかされて

私わたしは感かん心しん々々しんと 頭あたまをかたがて居をりました

感心かんしんしたと申まをすのは 意地いぢくね悪わるい高姫たかひめの

負けまず嫌きらひの魂たましひに 本當ほんたうに呆あきれた事ことですよ

あゝ惟かむながらかむながら神々々 こんな目め出でたい席上せきじやうで

高姫たかひめさまとの争いさかひを したくはなけれど後のちの爲ため

高姫たかひめさまの戒いましめに 一寸ちよつと意見いけんを述のべました

思おもへば畏かしこき神かみの前まへ 末子すゑこの姫ひめの御前おんまへも

憚はばかりませぬ無作法ぶさはふを 何卒なにとぞ許ゆるして下くださんせ

テーリスタンが眞心まごころを こめて御願おねがひ致いたします

言依別ことよりわけの神司かむつかさ 其他そのた一同いちどうの方々かたがたよ

互たがひに心こころをあはせつつ 打寛うちくつろいで酒肴さけさかな

ドツサリよばれて舞まひ踊をどり 千秋萬歳せんしうばんざいばんざい萬々ばんざい歳ざい

世よは高砂たかさこの何時いつまでも 榮さかえ榮さかえて後のちの世よの

礎固いしずかたくつきかため これの目め出でたい宴席えんせきを

仇あだに流ながさずいつ迄までも 心こころに刻きざみて喜よろこびませう

あゝ惟神々々かむながらかむながら 神の御前にかみ みまへ 壽ぎまつる

神の御前にかみ みまへ 祝ぎまつるほ」

(大正一一・八・二六 舊七・四 松村眞澄録)

第九章 言靈結ことたまむすび (九二四)

カールは立上りたちあが 歌ひ始めたりうた はじ。

吾等われらが信しんずる三五あななひの 神かみの司つかさとまします

神素盞鳴大神かむすさのをのおほかみの 珍うづの御子おんこと現あらはれし

姿すがた優やさしき末子すゑこ姫ひめ 古今ここん無む雙さうの神しん力りきを

靈みたまに備そなへまします 國くに依より別わけの神かみさまと

いよいよ婚禮こんれいの式しきを擧あげ　ここに目め出でたく千代ちよ八千代ちよ

萬代よろづよまでも變かはらじと　妹背いもせの道みちを契ちぎります

其その神業かむわざぞ尊たふとけれ　此この御慶事ごけいじを高たか姫ひめが

イントレランスな事ことを言いひ　四方しほう八方はつぱう驅かけ巡めぐり

いろいろ雜多ざつたと氣きをいらち　水晶すいしやう御靈ごたまの生粹きつすゐの

瑞みづの御靈みたまの姫ひめさまに　女殺をんなころしの御家倒ごけたふし

婆ば嬪ばかなやめの家いへつぶし　棒ぼうでも梃てこでもゆかぬ人ひと

國くに依別よりわけを夫つまとして　結けつ婚こんなんかをさしたなら

アルゼンチンの神國かみくには　地ち異い天變てんぺんの大騷動おほさうだう

此この世よが濁にごつて常暗とこやみの　泥どろの世界せかいとなるだらう

此この縁談えんだんは如何どうしても　水みづを注ささねばおかないと

松若彦まつわかひこの館やかたまで　目めをつり上あげて立向たちむかひ

一言二言熱ねつふけば　松若彦まつわかひこは逸いち早はやく

背戸口せとぐちあけてトントンと　かけ出し玉たまへば高たか姫ひめは

阿修羅あしうらの如ごとく荒あれ狂くるひ 髪かみふりみだし追おうて行ゆく

マラソン競きやうそう争はげの烈はげしさよ 松まつわかひこ若わか彦ひこは丸まる木き橋ばし

力ちからに任まかして打うちおとし ヤツと胸むねをば撫なで乍ながら

捨すて子の姫ひめの館やかた迄まで 息いきせき切きつて逃にげて行ゆく

勢いきほひ餘まつて高たか姫ひめは 高たかい土ど手てから墜つあらく落くし

大だいの字じ描えがく川かはの底そこ 後あと追おつかけし兩りやうにん人にんが

うち驚おどろいて高たか姫ひめを 息いきをふかせて助たすけやり

コレコレもうし高たか姫ひめさま 危あぶないことことで御ご座ざつたと

いと親しんせつ切せつにおとなへば 高たか姫ひめさまは喜よろこぶと

思おもひの外ほかの逆さかり理り屈くつ 小こんなお方かたにいつ迄までも

相あひて手てになつちや日ひが暮くれる さはさはり乍ながら此このままに

放ほかしておきもなるまいと カール、春はる彦ひこりやうにん兩人にんは

婆ばさまを擔かついでエーエーと 館やかたに送おくり届とどくれば

口くちを極きはめて又またしても 罵ののしり出いだす面つらにくさ

春彦腹にすゑかねて

忽ち火鉢を引つ掴み

ヤツサモツサの其結果

三人の男女は灰まぶれ

鎬を削る折もあれ

言依別の神さまが

お訪ねなすつた其爲に

喧譁は漸くをさまつた

高姫さまは腹を立て

物をも言はず一散に

捨子の姫のお館に

夜叉の如くに飛んで行く

春彦、カールの兩人は

御無禮の事をさせまいと

後からついて行て見れば

初めの勢ひどこへやら

龍頭蛇尾の高姫が

手持無沙汰の御顔付

時の勢ひやむを得ず

一度は我をば折りつれど

胸くそ悪さにたつた今

こんな目出たい席上で

けたいな事を言ひよつた

口がカールが知らね共

これが黙つて居られよか

後日の爲に言うておく

三五教の高姫よ

お前も五十の坂越して

ヤンチャ小僧の言ふ様な
バカな理屈はやめなされ

お前の御器量がさがるぞえ
金剛不壊の如意寶珠

其外麻邇の寶玉が
お前を嫌うて逃げ出して

隠れて了うたも無理はない
玉でなうても此私が

お前の顔を見る度に
隠れ度いやうになつてくる

心一つの持様で
多勢の人に愛せられ

又憎まれる世の中ぢや
高姫さまよ高姫よ

私は決してこんな事
多勢の中で言あげて

恥をかかそた思はない
お前の末が案じられ

心の底から嫌なこと
忍んで言うておきまする

心直して下さんせ
決してお前を憎いとは

一度も思うたことはない
憎いと思うたら言ひはせぬ

お前が可愛いばかりに
苦いことをばべらべらと

喋らにやならぬ身の因果
推量なすつて下さんせ

天地の神も御照覽

遊ばしまして此カールが

清き心の奥底を

高姫さまの眞心に

何卒映させ玉へかし

あゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて

今日の喜び永久に

變らであれや高砂の

松の千歳の色深く

茂り榮えてウツの國

神の大道も彌廣く

教の徳はどこ迄も

科戸の風の草や木を

靡かす如く開けかし

あゝ惟神々々

神の御前に願ぎまつる

神の御前に祝ぎまつる

常彦も立上り、歌ひ始めたり。

高姫さまの神司

言依別や國依の

眞人の後を追ひかけて

高砂島に渡らむと

常彦、春彦兩人を

伴ひまして出で玉ふ

琉球の島で泡をふき

大海原で船を割り

高島丸に救はれて

やうやう來るテルの國

吾等二人をふりすてて

邪魔者扱なされつつ

木蔭に隠れて獨言

聞いたる時の腹立たさ

高姫さまは水臭い

こんな所まで伴れて來て

二人をまかうとは餘りぢや

こんな御方と知つたなら

ついて來るのぢやなかつたに

後悔しても是非がない

再び途中に出會して

鏡の池に立向ひ

架橋御殿に擔がれて

又もや命を助けられ

憎まれ口を叩きつつ

愛想をつかさね館をば

驅出しアリナの山を越え

アルゼンチンの荒野原

ポプラの下で木の花の

神の化身に巡り會ひ

そこでスツカリ改心を

遊ばしまして河渡り

原野を越えて海の上

アマゾン河の北の森

鷹依姫を助けむと

果てしも知らぬ林をば

さまよひ巡りてモールバンド

大怪物に出會し

震ひ戦く最中に

帽子ヶ嶽より照り來る

琉と球との靈光に

漸く命を助けられ

南の森に打わたり

鷹依姫の一行と

帽子ヶ嶽の頂上で

言依別や國依別の

大神人に巡り會ひ

ウツの館に立向ひ

末子の姫と國依別の

神の命の結婚を

聞いて忽ち腹を立て

系統の身魂を鼻にかけ

言依別の教主をば

目下の如く言ひこなし

國依別や其外の

幹部の方をば訪問し

いろいろ雑多と邪魔したがとうとう結局にや我を折つて

此宴席に列せられ

歌を唄うて下さつた

さはさり乍ら皆の人 意地くね悪い高姫と

決して思うて下さるな 高姫さまの眞心は

大神様の道思ひ 此世を思ふばかりに

あんな事をば言うたのだ 私は永らくついて居て

高姫さまの腹の中 直澄の鏡にうつす如

よつく存じて居りまする こんな事をば申したら

お氣に入らぬか知らね共 此常彦は中立で

公平無私の言靈を 皆様方の御前に

おめず臆せず述べまする あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして 直日に見直し聞直し

高姫様は一心で 誠一つの塊で

あんな事をば言ふのだと 心も廣き大直日

宣り直しませ方々よ 常彦ここに高姫の

心の中を代表し 誓つて述べておきまする

決して間違ひないことを
 御靈幸はひましまして
 末子の姫と合衾の
 何卒々々末永う
 神の御稜威を輝かし
 守らせ玉へ惟神
 神の御前に祝ぎまつる

あゝ惟神々々
 國依別の神司
 目出たき式を擧げ玉ふ
 ウヅの都に止りて
 世人を安く平けく
 神の御前に願ぎまつる

(大正一一・八・二六 舊七・四 松村眞澄録)

第一〇章 神歌〔九二五〕

神素盞鳴大神が末子姫の婚姻を祝し玉ふ御歌。

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに

八重垣造る其八重垣を

神代の昔高天原にて

日の大御神伊邪諾尊

月の大御神伊邪册尊

自轉倒島におり立ちて

天教山の中腹に

撞の御柱つき固め

左右りと巡り會ひ

あなにやし好男

あなにやし好乙女よと

宣らせ玉ひて妹と背の

婚嫁の道を開き玉ひし

其古事に神倣ひ

あななひけう 三五教の神司 かむつかさ

こころ 心も清き國依別命 くによりわけのみこと

みづ 瑞の御靈の末の子と すゑこひめ

かみ 神の依さしの末子姫 すゑこひめ

けふ 今日の佳き日の吉き時に よきとき

いもせ 妹背の契永久に ちぎりとこしへ

むす 結び終へたる芽出たさよ めで

あさひ 朝日は照るとも曇るとも くも

つき 月は盈つとも虧くるとも か

たとへ 假令天地は變るとも かは

くによりわけ 國依別と末子姫 すゑこひめ

めをと 夫婦の契は永久に とこしへ

かは 變らざらまし高砂の たかさこ

まつ 松の緑の色深く みどりいろふか

鶴つるの齡よはひの千代ちよ八千代ちよ

龜かめの齡よはひの萬世よろづよも

變かはらであれや惟神かむながら

皇大神すめおほかみの御前おんまへに

瑞みづの御靈みたまの神柱かむはしら

神素盞鳴尊かむすさのをのみこと

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる

あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはひましまして

三五教あななひけうの神司かむつかさ

言依別命ことよりわけのみことを初はじめとし

松若彦まつわかひこや高姫たかひめや

鷹依姫たかよりひめや龍國別たつくにわけ

其外そのほか百ももの神司かむつかさ

信徒達に至るまで
今日の佳き日の吉き時を
喜びまつり集ひ來る
其眞心の麗しさ
心の色はまぢまぢに
高姫のごと變れども
神の大道と世の爲に
盡す心は皆一つ
一つ心に睦びあひ
神の心を推し量り
堅磐常磐に神の代の
柱となれよ礎と
なりて盡せよ惟神
神は汝と俱にあり

清き畏き眞心に

鎮まりゐます月と日の

神の恵は目のあたり

立ちさやぎたる荒波の

早なぎ渡る和田の原

深き恵の底知れず

高き恵は天の原

限り知られぬ青雲の

廣く高きは皇神の

大御心ぞ永遠に

變らず動かず眞心を

捧げて祈れよく祈れ

大國治立大御神

高皇産靈大御神

かむみむすびのおほみかみ
神皇産靈大御神

あまてら
天照します大御神

くにはるたちのおほみかみ
國治立大御神

とよくにぬしのおほみかみ
豊國主大御神

そのほかも
其他百の神たちの

ふかめぐみかしこ
深き恵を畏みて

ちよやちよ
千代も八千代も永久に

おほみまへ
大御前に能く仕へ

みろくみよ
五六七の御世の末迄も

きよこころ
清き心を濁らすな

かむみながらかむみながら
あゝ惟神々々

かみちか
神に誓ひて今日の日を

よこ
喜び敬ひ行先の

めをと
夫婦の幸を壽ぎつ

神かみの司つかさや信徒まめひとや

國くに人びと達たちに惟かむながら神かみ

神かみの心こころを誓ちかひおく

あゝ惟かむながら神かみ々々

御み靈たま幸さちはひましませよ
□

と歌うたひ終をはり、欣きんぜん然ぜんとして其その儘まま奥おく殿でんに神みず姿がたを隠かくし玉たまひけり。

（大正一一・八・二七 舊七・五 松村眞澄録）

第一章 波靜なみしづか（九二六）

高たか姫ひめは再ふたび立たつて、尊みことの御み歌うたに感かんじ、懺ざん悔げ的てきの歌うたを謠うたひ、
此この度たびは自みづから手てを拍うつ
て舞まひ狂くるひ、心こころの底そこより打うち解とけて見みせた。其その歌うた、

變性男子の腹をかり

生れ出でたる高姫は

知らず識らずに高ぶりて

八岐大蛇の曲靈に

何時の間にかは欺かれ

疑心暗鬼の雲蔽ひ

心の空は烏羽玉の

全く暗となりにけり

神素盞鳴大神の

清き尊き御心

少しも悟らずいろいと

力限りに妨害し

其神業を遅らせし

深き罪をも咎めずに

許させ玉ひし瑞御靈

深き仁慈を目のあたり

拜みまつりて高姫も

心の駒を立直し

初めて開く胸の暗

あゝ惟神々々

神の水火より生れたる

人は七轉八起てふ

坂を越ゆべきものなるに

神の大道にさやりたる

其罪科も悟らずに

いろいろ雑多と身をいらち

心を曇らせ玉の緒の

生命危き境遇に

出會ひし事も幾度か

七死八生の關を経て

漸くここに着きにけり

金剛不壞の如意寶珠

黄金の玉や紫の

玉を初めて麻邇寶珠

あらゆる寶を吾の手に

納めて功績を誇らむと

いらちし事の恥かしさ

そのみならず國依別の

教司の此度の

慶事を手もなく覆さむと

思ひ餘つて眞心の

梶取り外し曲津見の

醜の虜となり果てて

いろいろ雑多と動きたる

其行ひの恥かしさ

あゝ惟神々々

神の心に宣り直し

見直しまして高姫が

心の罪を赦せかし

言依別の神司

松若彦を初めとし

鷹依姫や龍國別の

珍の命や石熊の

教の司の御前に

謹み敬ひわびまつる

かくも悟りし高姫は

いよいよ今日より慎みて
我情我慢を放擲し
尊き神の御柱と
成りて仕へむ人々よ
心さかしき高姫と
さげすみまさず手を引いて
神の御爲世の爲に
功績を立てさせ玉へかし
あゝ惟神々々
神の御前に願ぎまつる

と歌ひ終り元の座に着く。
國依別は立つて歌ひ舞ふ。

☐ 仰げば高し久方の
神の恵をかかぶりて
松鷹彦の子と生れ
天の岩戸の閉されし
その騒ぎに親と子は
風に木の葉の散る如く
ちりちりパツと散りみだれ
暗にさまよふ幼兒の
吾兄弟も白雲の
遠き國路へさすらひの

悲しき身とはなりにけり
あゝ惟神々々

かかる情なき兄弟も
神の恵の幸はひて

戀しき父に巡り會ひ
兄妹の所在をば

初めて悟る胸の内
天の岩戸も一時に

開き初めたる如くなり
三五教の大道に

救ひ上げられ宗彦は
言依別の教主より

名さへ尊き宣傳使
國依別と任けられて

主一無適の信仰を
深く心に刻みつつ

東や西や北南
遠き近きの隔てなく

海と陸との分ちなく
神の御爲世の爲に

力の限り盡せしが
思ひがけなき今日の空

月日は清く照りわたり
星の光はキラキラと

輝きわたる尊さよ
神素盞鳴大神の

珍の御子と生れませる
末子の姫と今日よりは

千歳ちとせを契ちぎる妹いもと背せの 鴛鴦をしの衾ふすまの新枕にひまくら
 千代ちよも八千代やちよも變かはりなく 皇大神すめおほかみの御惠みめぐみと
 三あななひけつ五かむつかさ教かむつかさの神司かむつかさ 信徒まめひとたちは言いふも更さら
 高たかひめつかさ姫かみ司かみの御惠みめぐみに 今日けふは嬉うれしき此この宴會うたげ
 天津神あまつかみ達たち國津神くにつかみ 百神ももがみ達たちの御守みまもりに
 笑あはみ榮さかえ行ゆく高砂たかさごの 島根しまねに青あをき一ひとつ松まつ
 緑みどりの色いろもこまやかに 五み六ろ七くの御代みよの末子すゑこひめ姫ひめ
 幾いくちよ千代ちよまでも睦むつまじく 神かみの館やかたに止とどまりて
 教をしへを開ひらき國くに人びとを いと安やすらけく平たひらけく
 守まもらせ玉たまへ惟かむながら神かみ 畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる
 畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる』

末子すゑこひめ姫ひめは三み十そ一ひと文字もじを以もつて、言こと靈たまの歌うたをよみ、
 國くに依より別わけの歌うたに答こたへ、且かつ其その慶けい事じ
 を祝しゆくした。

末子姫すゑこひめ 【あ】ら尊たふと【い】く千代迄ちよまでも【う】ごきなく

【え】にし結むすびし【お】しの衾ふすまの

【か】けまくも【き】みの天降あもりし【く】になれば

【け】はしき人の【こ】ころだになし

【さ】しのぼる【し】ののめの空そら【す】み渡わたり

【せ】このかんばせ【そ】ふる月影つきかげ

【た】らちねの【ち】ち大神おほかみの【つ】きの魂たま

【て】らさせ玉たまふ【と】よの神國かみくに

【な】がかれと【に】しきの宮みやに【ぬ】かづきて

【ね】がふ心こころぞ【の】どかなりけり

【は】に安やすの【ひ】この教をしへの【ふ】かくして

【へ】いわの風かぜは【ほ】どほどにふく

【ま】す鏡かがみ【み】がきすまして【む】つまじく

【め】をとの道みちを【も】も年とせもがな

【や】くも立つ【い】づもの神の【ゆ】はせたる

【え】にしにあれば【よ】きもあしきも

【わ】かくさの【ゐ】もせの道の【う】るはしく

【ゑ】らぎゑらぎて【を】くるうまし世^よ

と四十五音の折込み歌を謠ひ、悠々として國依別と共に、父大神の後を追ひ奥殿に進み入る。これにていよいよ結婚祝賀の歌も濟み、一同歡を盡して、各自の館々へ立歸るのであつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

次に捨子姫は國依別、末子姫夫婦の媒酌に依り、これより一年の後松若彦の妻となり、國依別夫婦の部下に仕へて、偉功を立てたりにける。

(大正一一・八・二七 舊七・五 松村眞澄録)

神素盞鳴大神は言依別命、カールと共にウツの都を後にして、國依別夫婦を初
め其他一同に送られ、天の鳥船に乗りて、空中高く羽ばたき勇ましく、フサの國
齋苑の館を指して歸り玉ふこととなりましぬ。別れに臨み、大神は一同に左の歌
を賜はりける。

☐ 天と地との中空を

功績も高く身も高く

心も廣く歸り行く

齋苑の館へ欣々と

言依別の神司

カールを從へ三人連れ

ウツの都を今はしも

別れに臨みて末子姫

國依別や其外の

百ももの司つかさに宣のべておく

あゝ惟かむながらかむながら神々々

神かみの恵めぐみのいや深く

道みちの御み稜いづ威づのいや尊たかく

山川やまかは清きよく野のは青あをき

高砂たかさご島しまは神かみの國くに

尊たふとき神かみの殊ことさら更に

選えらみ玉たまひし眞ま秀ほ良ら場ばぞ

心こころを清きよめ身みを淨きよめ

神かみの教をしへを朝あさ夕ゆふに

固かたく守まもりて三五あななひの

道みちの光ひかりを輝かがやかし

青人あをひと草くさを悉ことごとく

恵めぐみの露つゆにうるほはせ

千代も八千代も穩かに

治め玉へよ惟神

神の司や信徒に

別れに臨み宣べておく

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ玉へば、國依別は直に立つて歌を歌ひ、大神に名残を惜しみまいらせけり。

四方の雲霧吹き拂ひ

百の神人助けむと

盡くさせ玉ふ瑞御靈

神言を畏みウツの國

末子の姫と諸共に

汚れを清め天地の

心を配り身を碎き

神素盞鳴大神の

神の司に選まれて

アルゼンチンを守りつつ

あななひけうの御教を ウヅの御國は云ふも更

三五教の御教を 常世の國の果て迄も

高砂島は尚愚 深き恵に酬いなむ

開き進めて大神の 尊き神の御裔なる

吾は卑しき身を以て 空しく月日を送る身の

末子の姫の夫となり 今より心を練直し

うら恥かしき神司 皇大神の御教

千代も八千代に永久に 五六七の神世と開きなむ

あななひまつりうまし世を 假令天地は變るとも

あゝ大神の御恵 心を平に安らかに

いかで忘れむ神心 ウヅの館に御心を

國依別や末子姫 天津御空をかけらして

配らせ玉はずすすくすくに あゝ惟神々々

御國に歸らせ玉へかし 名残は盡きじ雲の上

親子夫婦の生別れ

仰ぐも高し君の恩 謹み感謝し奉る

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

茲に素盞鳴尊は再び天の鳥船に乗つて、天空高く歸り玉ひぬ。末子の姫は空を
打仰ぎ、歌を詠む。其歌、

久方の天津御空を打仰ぎ

隠れし後も眺めつるかな。

垂乳根の父は雲井の空高く

かけりて波斯に歸りましけり。

今暫し待たせ玉へと願ふ間も

なくななく父は歸りましけり。

打ち仰ぎ眺めすかして大空の

清きは父の心なる哉。

國くに依より別わけ神かみの命みことと諸もろ共ともに

ウヅの館やかたに清きよく仕つかへむ。

言こと依より別わけ神かみの命みことの御み姿すがたを

仰あふけば清きよし瑞みづ御み靈たまかも。

言こと依より別わけ神かみの命みことはいかにして

珍うづの館やかたを去さりましにけむ。

木この花はなの神かみの命みことの分わけ靈みたま

カールの司つかさいとなつかしき哉かな。

大おほ空そらを昇のぼりつめたる鳥とり船ふねは

惠めぐみの露つゆをふらしてぞ行ゆく。

靈たま幸ちはふ神かみの惠めぐみを朝あさ夕ゆふに

忘わすれざらまし夫婦めをとふたり二人ふたりは。

天あま降くだり玉たまひし父ちちも今いまは早はや

雲くも井ゐの空そらに隠かくれましけり。

千早ちはやふる神かみの造つくりしウツの國くに

高砂たかさご島の國くにの眞ま秀ほ良ら場ば。

桃もも上がみ彦ひこ神かみの司つかさの鎮しづまりし

ウツの神かみ國くに殊ことにさやけき。

國くに彦ひこの神かみの御み裔すゑの松まつ若わか彦ひこが

盡つくす誠まことは神かみぞ知しるらむ。

高砂たかさごの尾をの上へに立たてる松まつ若わか彦ひこの

譽ほまれは千ち代よに輝かがきやせむ。

惟かむ神ながらの御み前まへに慥ひれ伏ふして

朝あさな夕ゆふなに國くにをまもらむ。

數すま萬ん年ねん歴れ史きの末すゑに夫つまと言いひ

妻つまといふ者もの生うまま來こしかな。

垂た乳ら根ちの親おやの惠めぐみみを身みに受うけて

ウツの都みやこに照てりわたるかな。

朝日さす夕日輝くウツの國

惠は殊に高砂の島。

國民のかまどの煙賑しく

龍世の姫の惠尊き。

アマゾンの河の魔神を言向けし

言依別や國依別の神。

國依別神の命の働きに

時雨の森は治まりにけり

末子姫は三十一文字の歌を以て、名残を惜み、或は述懐を述べなどして、茲に一同に會釋し、神殿指して進み入りにける。

龍國別は別れに臨み、三十一文字を詠む。其歌、

靈幸はふ神の國依別れ別れに

龍國別の心悲しき。

龍國を今龍國別の神司

母諸共に自凝島へ行かむ

高姫の歌、

高砂の千歳の松に今しばし

別れなむとす名残惜しさよ。

遙々と海山越えてウツの國

珍の身魂と吾はなりぬる。

惟神神の光に照らされて

高姫胸も晴れわたりける。

素盞鳴神尊のいます限り

世はおだやかに治まりて行く。

高砂たかさごの島しまに天降あもりし素盞すさのを鳴

神かみの尊みことぞ尊たふとかりけり。

國くに依より別わけ貴けつの命みことの神かむつかさ司か

千代ちよに八千代やちよに御國みくに守まもれよ。

大神おほかみの八人やたり乙女をとめの末子すゑこひめ姫ひめ

わけて清きよけき君きみの御姿みすがた。

松まつ若わか彦ひこ神かみの命みことの神かむつかさ司か

ウヅの館やかたに永遠とほに仕つかへよ。

惟かむながらかみの御國みくにを高たか姫ひめが

別わかれ惜をしみて神言かみことを宣のる

鷹たか依より姫ひめも亦また三み十そ一ひ文字ともを詠よむ。其歌そのうた、

自凝おのころの島しまより來きたる鷹たか依より姫ひめの

神かみの司つかさは今いま別わかれなむ。

これやこの行ゆくも歸かへるも別わかれても

神かみの惠めぐみに大本おほもとの道みち。

足あし曳びきの山やまを踏ふみ越こえ川かはわたり

海うみに浮うかびて神かみの道みち行ゆく。

國くに依より別わけ貴うづの命みことや末すゑ子こ姫ひめ

幸さち多おほかれと朝あさ夕ゆふ祈いのる。

鷹たか依より姫ひめ神かみの司つかさは珍うづの都みやこ

別わかれむとして涙なみだこぼるる。

惟かむ神ながらの御おん爲ため道みちの爲ため

世よ人びとの爲ために盡つくす眞ま心こころ。

アマゾンの河かはの流ながれはさかしくも

神かみとわたればさかしくもなし。

アマゾンの時しぐれ雨れの森もりに鷹たか依よりの

姫ひめの司つかさは心こころ残りぬ。

月つきの神かみ齋いつきまつりし兔うの都みやこ

今いまは戀こひしくなりにけるかな。

黄金わうこんの玉たまの所在ありかを探たづねむと

求まぎ來きたりける親おや子こ悲かなしも。

惟かむながら神かみの御み前まへにひれ伏ふして

ウヅの館やかたの幸さちを祈いのらむ。

見み渡わたせば山川やまかは清きよく野のは青あをし

天津あまつ御み空そらは眞ます澄みの鏡かがみ。

野のも山やまも清きよくさやけき神かみ國くにに

別わかれて歸かへる名な残こり惜をしさよ。

自おの凝ころの島しまを立た出いで早はや三み年とせ

四よ年とせ振ぶりにて錦にしきの宮みやへ。

四よ尾つをの山やまの麓ふもとにそそり立たつ

錦にしきの宮みやを遠とほく拜をがみつ。

素すさ盞の鳴を神か尊のみの御み姿すがたを

近ちかく拜をがみし事ことの嬉うれしさ。

言こと依より別わけ神かの命みことに巡めぐり會あひ

雄を々をしき姿すがた見みたる嬉うれしさ。

國くに依より別わけ神かの命みことよ今け日ふよりは

心こころを配くばれ重おも荷に負おふ身みは。

八や乙おと女めの末すえ子この姫ひめの御おん館やかた

今いま別わかれ行ゆく心こころ悲かなしき。

惟かむ神ながらの惠めぐみの幸さちはひて

又また會あふ春はるを待まちつつぞ經へむ

テーリスタンは覺おぼ束つかなげに歌うたを詠よむ。

鷹たか依より姫ひめ神かみの司つかさに從したがひて

玉たまを索もとめつ今いま此處ここにあり。

玉たま々と玉たまに心こころを奪うばはれて

今いまはたまらぬ悲かなしい別わかれ。

魂たましひはどこかの空そらに宿やど替がし

テーリスタスタンの魂たまな無し男をとこ。

われも亦また自おの凝こ島じまに立たち歸かへり

若草わかぐさの妻つま持もたむとぞ思おもふ。

若草わかぐさの妻つまの命みことと手てをひいて

ウヅの都みやこにいます芽めで出でたさ。

素すさ盞の鳴のみ神みこと尊おんすがたの御おん姿すがた

伏ふし拜をがむ時とき涙なみだこぼれつ。

言こと依より別わけ神かみの命みことは空そら高たかく

吾われを見み棄すてて去さりましにけり。

カールさま二人の後に従ひて

身もカールガールと御空行くかな。

高姫も漸く心和らぎて

久方振りに笑ひ顔見る。

いと涼し風吹く島の神の國

後に見棄てて歸る惜しさよ。

黒姫の生命救ひし其爲に

高砂島に退はれにけり。

烏羽玉の心も黒き黒姫は

今や何處の空に彷徨ふ。

いつ迄も腰折歌は盡きざれど

神のまにまにとどめおくなり』

カーリンスは、
又もや三十一文字を詠む。

㊦ カーリンス、テリスタンと諸共もろともに

涙なみだの海うみに漂ただよひにけり。

高砂たかさごの島しまにやうやう渡わたり來きて

玉たま捜さがしする時ときの苦くるしさ。

天祥てんしゃつの山やまの瀑布ばくふへ現あらはれて

モールバンドを言こと向むけ和やはしぬ。

言こと向むけしモールバンドの功い績せきは

カーリンスならで鷹たか依よりの姫ひめ。

龍たつ國くに別わけ神かみの命みことの鼻はな高たかき

帽ぼう子しヶ嶽がだけに登のぼり行ゆくかな。

素す盞さ鳴の神かみ尊のみことを伏ふし拜をがみ

身みの置おき所ところ知しらぬ嬉うれしさ。

嬉うれしやと思おもふ間まもなく大おほ神かみは

われを見みすてて歸かへりましけり。

高姫たかひめの司つかさと共に海原うなばらを

渡わたると思おもへば涙なみだ含くまるる。

高姫たかひめよ心こころの駒こまを立直たてなほし

波なみ太平洋たいへいやうを渡わたりませ。

カーリンスこれが一生いっしやうの御願おねがひぞ

波高姫なみたかひめよ心こころ鎮しづめよ。

村肝むらきもの心こころの海うみに荒波あらなみの

龍國たつくにわけ別しはよ暫しづし鎮しづまれ

と口くちから出放でほう題だいの歌うたを竝ならべ、高姫たかひめ、鷹依たかより姫ひめ、龍國たつくにわけ別しは、テ
ーリスタン、カーリンス、常彦つねひこの一行いっかうは、ウヅの都みやこに別わかれを告つげ、テル山やま峠たうげを踏ふみ越こえ、ハラの港みなとに出いで、
自凝おのころ島じまに向むかつて歸かへることとなりけり。

(大正一一・八・二八 舊七・六 松村眞澄録)

第三篇 時節到來

第一三章 歸途（九二八）

アルゼンチンの神の國 都を後に龍國別や

鷹依姫や高姫や テーリスタンやカーリンス

常彦一行六人は 國依別や末子姫

松若彦に送られて 互に前途を祝しつつ

焼きつく如き炎天を 何とはなしに自轉倒の

島根に歸る嬉しさに 心も勇み足竝も

いと輕さげに歸り行く あゝ惟神々々

神の恵を蒙りて 玉に對する執着を

弊履の如く打棄てて

心の色もテル山の

峠の麓にさしかかる

坂の麓の樟の森

此處に一夜の雨宿り

鳥の聲に起されて

細谷川に身を清め

携へ持てるパンを出し

朝餉をすまし膝栗毛

駒に鞭ち登り行く

岩石起伏の峻坂を

聞くも勇まし三五の

教の道の宣傳歌

歌ひ歌ひて登り行く

足の運びもいつしかに

風吹きすさぶテル山の

峠にやうやう辿りつき

ここに一行六人は

一先づ足を休めける。

龍國別『皆さま、此涼しい風を浴び乍ら、暫く休息を致し、ウツの國に別れを告

げませうか』

一同『宜しからう』

と異議なく賛意を表し、荒き息を吐き出しながら、頂上に枝振面白く立つてゐる
常磐木の蔭に腰を下し、息を休むる事となつた。

龍國別「この山は桃上彦命様がウツの都に五月姫と鎮まりまして、神業にお仕へ
遊ばした時、黄泉比良坂の戦ひに、大加牟津見命と現はれ玉へる松竹梅の姉妹が、
宣傳使の初陣の時、ここ迄登つて来て、ウツの都の空を打仰ぎ、訣別の歌をうた
はれた名高い所です。末子姫様も、捨子姫、カール、石熊の三人を従へ、ここに
暫く息を休め歌を歌つて、ウツの都へお越しになつた由緒の深き場所です。吾々
も一つ何とか各自に歌をうたつて、後世に伝えなくてはなりません。一つ高姫
さま、貴女が此一行中の棟梁株だから、何とか歌つて聞かして下さいませぬか」
高姫「仰せ迄もなく、何か歌を歌つて見ようと思つてゐた所です。どうせ俄作りの
の放題だから笑つちや可かせぬよ」
と前置きし、ウツの都を瞰下し乍ら歌ひ始めたり。

「向ふに見えるはウツの國」

アルゼンチンの神館

青野ヶ原にピカピカと
光り輝く白い壁

國依別の神司
末子の姫と諸共に

さぞ今頃は睦まじく
誰憚らず水入らず

互に顔を見合して
ニタリニタリと恵比須顔

さぞやさぞさぞお楽しみ
其有様がありありと

目に見る様に思はれる
あゝ惟神々々

神の仕組か知らねども
此炎天をはるばると

喘ぎ喘ぎて胸を突く
嶮しき坂を攀登り

汗や膏をしぼりつつ
世人の爲に盡す身に

比べて見れば雲泥の
實に相違があるものだ

上にある世の中に
下に下ある世の中だ

暑い涼しい言ひ乍ら
うちわは丸く末廣く

扇を開いてバタバタと
風を起しつ二人連れ

治まり返つて御座るだろ
それに吾等は何とした

因果いんぐわな生うまれつきだらう
 テル山やまたつげ峠たつげをエチエチと
 登のぼつて荒あらき息いきをつき
 僅わづかに吹ふき來くる山やま風かぜを
 浴あびて涼すずしい涼すずしいと
 云いうては居をれど國くに依より別わけの
 神かみの命みことに比くらぶれば
 月つきに鼈すっぽ雪ゆきに炭すみ
 涼すずしと云いつても涼すずしさが
 天てんと地ちと程ほど違ちがうてゐる
 あゝ惟かむながらかむながら
 御み靈たま幸さちはひましまして
 テル山やまたつげ峠たつげを下くだるまで
 雲くもを起おこして天あま津つ日ひの
 御み影かげをかくし ささやさやと
 涼すずしき風かぜの吹ふくように
 國くに魂たま神がみの龍たつ世よ姫ひめ
 どうぞ守まもつて下くださんせ
 龍たつ國くに別わけや鷹たか依より姫ひめの
 神かみの司つかさは云いふも更さら
 テーリスつねスタンひこやカーリンつねス
 常つね彦ひこまでが泡あわ吹ふいて
 一ひと目め見みるさへお氣きの毒どく
 仁じん慈じの心こころに照てらされて
 目めあけてこれが見みられうか
 皆みなさま本ほん當たうに暑あつからう
 暑あつうても御ご辛しん抱ぼうなされませ
 神かみの手て【あつ】き御み惠めぐみと

思へば暑さも涼しうなる
心の中に燃えしきる

火熱も瑞の御靈にて
恵の雨を注ぎなば

火も亦涼しうなるだらう
さはさり乍ら高姫は

どうしてこれ程暑いだる
國依別の若夫婦

涼しき北の窓あけて
水も曳らさぬささやきを

思ひまはせばウツの空
羨望の念にかられます

此高姫もモウ少し
年若ければどうかして

残りの花の返り咲き
立派な夫を迎へ取り

四尾の山の山麓に
たち並びたる八尋殿

朝な夕なに参上り
涼しき夫婦が宮仕へ

する身にならば何程か
心樂しき事だらう

只今までは如意寶珠
玉に心を奪はれて

夫の事など夢にだに
思ひそめたる事はない

玉に心を悩ませし
夢も醒めたる今日こそは

ひとつの望みが湧いて来た　あゝ惟神々々
結びの神の御恵に　老さらばひし高姫が
心の友となる人を　授け玉へよ天津神
國津御神の御前に　愼み敬ひ願ぎまつる
謹み敬ひ願ぎまつる

常彦「アハ、高姫さま、チツト暑さが酷いので、逆上してますねい。併し今の御述懐は本當かも知れませぬ。なる事ならば此處にも一羽「やもめ」鳥がおちてゐますが、併し乍らさうは甘く問屋が卸しませぬワイ」

鷹依姫「オツホ、」

高姫「ヘン、常彦、馬鹿にしなさんな。如何に高姫だとして、お前の様な氣の利かぬ男を、誰がハズバンドにする者がありますかい。自惚も良い加減にしておきなさいよ」

テールリスタン「アハ、常彦、やられやがつたな。末子姫さまのやうな若いナ

イスにやられるのなれば、まだしもだが、齒の半分落ちた冬の初めの木の如うな冷たい御方に、肱鐵をくはされては最早男として世の中に出す顔はあるまいぞ」
常彦「馬鹿言ふな。俺の事を言つたのぢやない。龍國別様をお世話しようと思つて、一寸口をむしつて見たのだ。それに高姫さまが氣をまはして、早取りをなさるものだから、こんな事に誤解されて了ふのだ。もし龍國別さま、思召しは御座いますかな」

龍國別「御親切は有難う御座いますが、私のやうな者は到底、高姫さまのお氣には入りませぬ。又私としてもお氣に入らぬのですからな、アハ、ハ、ハ、」

高姫「コレ龍國別さま、此暑いのに能い加減に馬鹿にしておきなさい。お氣に入らぬもの同志なら丁度よいぢやないか。要らぬ口を叩くものぢやありませんか。龍國別「これはこれは思ひがけなき御逆鱗、どうぞ神直日大直日に見直し聞直しして下さい」

高姫「お前さまが何か歌つたらどうだと、發起したのぢやありませんか。サア一つ歌つて御覽。何れもお前さまの事だから、御立派な歌が出るでせう」

龍國別は歌ひ出したり。

珍の館を立出でて

一行六人漸くに

テル山峠の頂上に

登りて見れば極樂の

餘り風かは知らねども

吾等の面を吹拂ふ

その涼しさよ心よさ

松竹梅の桃の實が

立たせ玉ひてウヅの國

都にいます父神に

名残を惜み玉ひたる

ほまれも高き此峠

遠く彼方を見わたせば

大西洋の波高く

目下に見ゆるはテルの國

山川清く野は青く

天津御空も海原も

眞澄の鏡の如くなり

ウヅの都に永久に

鎮まりいます神司

國依別や末子姫

その外百の司達

信徒達にテルの山の

峠に立ちて名残をば

再び^{ふたたび}惜む^{をし}六人^{むたりづ}連れ
朝日^{あさひ}は照るとも曇るとも

月は^{つき}盈つとも虧くるとも
假令^{たとへ}大地^{だいち}は沈むとも

高砂^{たかさご}島に^{しま}渡り^{わた}来て
いろいろ^{ざつた}雑多^{みち}と道^{みち}の爲^{ため}

身を^み盡したる^{つく}経歴^{けいれき}は
五六七^{みろく}の御世^{みよ}の末^{すゑ}までも

語り^{かた}傳へて^{つた}忘れ^{わす}まじ
あゝ^{かむながらかむながら}惟神^{みかみ}々々

神^{かみ}の御靈^{みたま}の幸^{さち}はひて
龍國^{たつくに}別^{わけ}が行末^{ゆくすゑ}を

厚^{あつ}く守^{まも}らせ玉^{たま}ひつつ
太^{ふと}しき功績^{いさを}を後^{のち}の世^よに

立^たてさせ玉^{たま}へ^{かむながら}惟神^{みかみ}
神^{かみ}の惠^{めぐみ}の彌^{いやふか}深^かき

ウヅの御國^{みくに}を去^さるにつけ
心^{こころ}の限^{かぎ}り身^みの限^{かぎ}り

誠^{まこと}心を^{こころ}捧^{ささ}げつつ
謹^{つつし}み敬^{あやま}ひ願^ねぎまつる

あゝ^{かむながらかむながら}惟神^{みかみ}々々
御靈^{みたま}幸^{さち}はひましませよ

と歌^{うた}ひ終^はり、再び^{ふたたび}腰^{こし}を芝生^{しばふ}の上^{うへ}に下^{おろ}す。これより鷹^{たか}依^{より}姫^{ひめ}、
歌^{うた}あれども、餘^{あま}りくどければ、省略^{しょうりゃく}する事^{こと}と致^{いた}します。
テ、カー、常彦^{つねひこ}等の

高姫一行は此峠を下り、石熊が大蛇に魅入られ、苦みぬたる際、末子姫に救はれたる乾の瀧に立寄り、各々此處に御襖を修し、天津祝詞を奏上し、數歌を歌ひ上げ、一日一夜此處に費やして、一行六人峻坂を下り、漸くハラノ港に進み、船を待ち合せ、又もや高島丸に乗つて歸國する事となりける。

(大正一一・八・二八 舊七・六 松村眞澄録)

第一四章 魂の洗濯(九二九)

テーリスタンは坂を降りつつカールもどきに歌を唄ひ、足拍子を取り乍ら下つて行く。一行五人は腹を抱へ、笑ひ乍ら、一歩々々趾の先に力を入れて、覺束なげに杖を力に下り行く。

テール山峠の頂上は

今を去ること一昔

昔と云つても三十年だ

正鹿山津見神さまが

五月の姫と諸共に

ウツの館にましまして

教を開き民を撫で

三五教の御御を

アルゼンチンの空高く

照し玉ひしウツ都

後に眺めて三人の

松竹梅の宣傳使

此頂上に登り詰め

名残を惜み蚊々虎の

神の化身と諸共に

歌ひ玉ひし舊跡地

高姫さまが言靈を

ウツの館に差向けて

法界悋氣の物凄さ

側に聞いているテーリスタン

實に情けなくなつた

雀百まで牡鳥を

忘れないとは能く言うた

高姫さまも是からは

心が和らぎ来たならば

物の憐れも知るである

固い計りが能でない

オットドツコイ危ないぞ

うっかりしてると石車

乗つて轉けては堪らない

玉ぢや玉ぢやと喧ましく 騒いでみたが此道に

澤山轉げた石玉を 持つて御歸り遊ばして

黒姫さまに見せたなら 喜び飛びつきしがみつき

固く喜びなさるだる ウントコドツコイ ドツコイシヨ

高姫さまよ如何なさる 石でもヤツパリ丸ければ

玉に能う似て居りまする 國依別が釣り上げた

お前は魚を頂いて 怒ったことがあるさうな

ウントコドツコイ コレワイシヨ グツグツしてると轉げるぞ

國依別や末子姫 二人のお方も今頃は

スツカリ轉んで御座るだる 同じ轉ぶにしたところが

ここで轉ぶはたまらない 是から少し下つたら

末子の姫が石熊を お助けなさつた瀧がある

皆さま寄つて行きませうか 高砂島を去るにつけ

汗をば流し垢を取り 身魂を淨めてスクスクと

大海原を打渡り よいよ目出たく自凝の

神のまします眞秀良場へ 歸ると思へば有難い

ドツコイシヨ、ドツコイシヨ 神が表に現はれて

善と惡とを立別ける 國依別の神さまは

善の酬いが廻り來て 珍の司とならしやつた

私は身魂が悪いので 高姫さまと同じよに

折角出て來た此島で 一つの玉をも能う取らず

やみやみ歸るか情けない 何の因果で此様に

拍子の悪い身魂だろ あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ ウントコドツコイ ドツコイシヨ

皆さま氣をつけ危ないぞ それ又そこに石ころだ

迂つて轉んで泡吹いて 高姫さまの御厄介

ならない様にしておくれ テーリスタンが心から

氣をつけますぞや皆の人 人は神の子神の宮

とは云ふものの今の人

何れも神の仇となり

悪魔の宮となつてゐる

乾の瀧に出で立ちて

心を清め身を浄め

ついた曲津を放り出して

誠の神の御子となり

神の宮居となりませう

あゝ惟神々々

神の御前に願ぎまつる」

高姫一行はテル山峠を西へ西へと下りつつ、瀑布の音凄じく聞えたるテル山峠

の中腹に下り着いた。これより高姫一行は乾の瀑布をさして、御襖を修すべく、

音を尋ねて探り寄つた。相當に幅の廣い高い瀑布である。此處はバラモン教の神

司石熊が水垢離を取つてゐる際、大蛇に魅せられて九死一生の破目に陥りたる折、

末子姫の一行に救はれた有名な瀑布である。近づき見れば大の男が只一人、一心

不亂に瀧にかかつてゐる。

高姫は委細構はず、薄衣を脱ぎすて、瀧壺目がけてザンブと許り飛び込みしが、

如何はしけむ、高姫の姿はそれ切り、何も見えなくなつて了つた。龍國別、テー、

カー、常彦の四人は慌ただしく、赤裸となつて、瀧壺に探り探り這入つて、高姫の肉體の若しや水底に沈み居らざるかと、一生懸命に搜索し始めた。されど如何しても所在が分らぬ。何れも途方に暮れて、一時も早く高姫の肉體の浮き上ることを祈願するのであつた。

一人の男は悠々として水垢離を終り、タオルにて體を拭き乍ら、鷹依姫の前に來り、

男「随分暑いことで御座いますな。貴方も一つ瀧におかかりになつては如何ですか。随分涼しい瀧で、身魂の垢がスツカリと除れた様な氣分が致しますよ」

鷹依姫「ハイ有難う御座います。併し乍ら只今私の同行者の一人なる高姫さまと云ふ方が、瀧壺へ飛込み、其儘お姿がなくなつて了ひましたので……アレあの通り、四人の男が赤裸になり、水底を探つて居ります。どうで御座いませうか、此瀧壺はそれ程深いので御座いませうか」

男「別に大した深い瀧壺では御座いませぬが、私が最前瀧にかかつて居ります際、高姫さまは衣類を脱ぎすて、神様にお願もせず、先頭に飛び込みました。併し

乍ら生命に別状はありますまい。神様から御楔の行をさせられて居られるのでせ

う

鷹依姫「それぢやと申して、モウ大分にタイムが経ちます。人間の肉體を以てさ

う永らく水中に生て居られる筈が御座いませぬ。如何したら助かりませうかなア

男「私は高島丸の船長をやつて居つた、タルチールと云ふ者で御座いますが、隨

分高姫と云ふ人は我慢の強い方ですから、此高砂島を離れるに際し、神様の修被

を受けて居るのでせう。マア御心配なされますな

と平氣な顔にて笑つてゐる。龍國別外三人は瀧壺を隈なく捜し、どうしても高姫

の姿の見えざるに絶望の聲を放ち乍ら、二人の前に赤裸の儘、集まり來り、

龍國別「お母アさま、如何しても駄目ですワ。假令肉體が現はれた所で、最早綻

切れて了つてゐるに違ひありません。困つたことが出来ましたなあ

と思案顔にうなだれる。

タルチール「あなたは三五教の宣傳使龍國別さまで御座いましたか

龍國別「ヤア貴方は何處のお方か存じませぬが、餘りあわてまして、此處にお居

でになるのも氣が着かず、失禮致しました。どうでせう、高姫さまはモウ駄目でせうかなあ」

タルチール「マア氣を落つけなさい。何事も惟神に任すより仕方がありません。高姫さまは随分我の強い人ですから、こんな事がなくては本當の身魂研きは出来ませぬからなア」

常彦「貴方は高島丸の船長タルチールさまでは御座いませぬか。私は常彦と申す者、久し振りでお目にかかります」

龍國別「常彦さま、此方を如何して知つてゐるのだ」

常彦「高姫さまと春彦と吾々三人が高砂島へ小舟に乗つて出て来る途中、助けて下さつた御方です」

龍國別「珍らしい所でお目にかかりました。何かの御縁で御座いませう。さうして又貴方は斯様な所へお越しになつたのは、何か深い譯があるので御座いませぬか」

タルチール「私は高島丸の船中に於て、言依別命、國依別様より三五教の教理を

聞かして頂き、直ちに入信致しまして、船長を倅のテルチルに譲り、私は言依別命様、國依別様に従ひ、ハラノ港へ上陸し、言依別様の命令に依つて、テルの國の宣傳を言ひ付けられ、此の乾の瀧に時々身魂研きに參つて居りました。今日は端なくも三五教の宣傳使様にお出會ひ申し、實に愉快な氣分に打たれました。龍國別「それは不思議の御縁で御座いますなア、併し乍ら高姫さまの身の上が案じられて、ゆつくり御話を承はる氣も致しませぬ。今一度搜索を行つて見ますから、後でゆるゆる御話を承はりますませう」

タルチール「決して御心配なさいますな。此瀧壺には横穴があつて、そこから水が或る地點へ流出して居ります。大方其穴へ吸ひ込まれたのでせう。キット今頃は無事でいらつしやいませう。貴方もお望みならば、瀧壺の横穴を潛り、私と一緒に高姫さまの所へ行かうぢやありませんか」

龍國別「合點の行かぬ事を仰せられます。うつかりして居ると、幽冥界へ往つて了ふのではありますまいかな」

タルチール「別状は御座いますまい」

と話して居る。傍の木の茂みより、高姫は赤裸の儘、二人の美はしい女に手を引かれ、一行の前に歸つて来た。

龍國別「ヤアこれは高姫さま、能うマア無事で歸つて来て下さいました。吾々四人は貴方のお姿が見えなくなつたので、瀧壺へ飛び込み捜してゐた所で御座います」

高姫「ハイ有難う、エライ心配をかけました。何とはなしに飛び込むや否や、眞赤いけの者がやつて来て、私の足を銜へたと思つたら、ドンドンドンと矢の如く深い水の中を流され、パツと明くなつたと思へば、大變な廣い底の浅い池へ流されました。其池の中に美しい岩島があり、其上に綺麗な小さい家が建つてゐました。其家の中から此お二人の方が現はれて、私の手を取り救ひあげ、ここ迄連れて来て下さつたのですよ。どうぞ御禮を申して下さいませ」

龍國別「これはどうも御二人様、偉い御世話になりました。龍國別、一同を代表して御禮を申し上げます。貴方は何と云ふ御方で御座いますか、お差支なくば、何卒お名をお名乗り下さいませ。私は三五教の宣傳使龍國別と申す者で御座います」

女をんなの一いち「貴方あなたが噂うはさに高たかき龍國たつくにわけ別様さまで御座ございましたか。黄金わうごんの玉たまの詮索せんさくに、はるばる高砂島たかさごじままで、親子おやこども共ともにお越こしになつたと云いふ事を、言依別命ことよりわけのみこと様さまより承うけたまはつて居をりました。其玉そのたまは此島このしまには御座ございますまいがなア」

龍國たつくにわけ別なん「何なんと詳くはしいことを御存ごぞんじですな、さうして言依別ことよりわけ様さまには何時いつ御會おあひになりましたか」

女をんなの一いち「ハイ、琉球りゅうきうの近海きんかいでお目めにかかり、高姫たかひめさまが後あとを追おうて御おいでになることやら、鷹依姫たかよりひめ様がそれそれに先さきんじて玉詮議たませんぎにお越こしになつたことを一伍一什承いちぶしじうけたまはりました」

龍國たつくにわけ別なん「さうして貴女あなたのお名なは何なんと申ましますか」

女をんなの一いち「ハイ、私は永ながらく比沼ひぬの眞名井まなゐの寶座ほうざに仕つかへて居ゐました清子きよこ姫ひめで御座ございます。一人ひとりは私わたくしの妹いもうとで照子てること申まします。言依別ことよりわけの神かみ様さまより、常世とこよの國くにの宣傳せんでんを仰あふせ付けられましたので、一巡常世いちじゆんとこよの國くにを渡わたり、神界しんかいの都合つがふに依よつて、一ヶ月程いつかげつほど以前いぜ前に此處ここに参まゐり、身魂みたまを清きよめ、貴方あなた方のここをお通とおり遊あそばすことを知しつて、お待まち受けして居をりました。高姫たかひめ様さまも結構けつこうな水みづくぐりの御修業ごしうげふが出来できましたから、最も早はや

これで大丈夫で御座います。妾姉妹も一度此經路を踏んだので御座います」

龍國別「何と不思議な修業場もあるものですか。吾々の様な身魂の汚れた者は到底無事に通過することは出来ずまい」

清子姫「これ位の水道が通過出来ない様な事では、到底肝腎の御神業は勤まりませぬよ。皆さま如何です。一度御修行遊ばしましたら……」

龍國別「イヤもう結構で御座います」

と氣味悪さうに慄うて居る。

清子姫「ホ、ホ、ホ、ホ」

(大正一一・八・二八 舊七・六 松村眞澄録)

第一五章 婆論議〔九三〇〕

高姫一行六人はタルチール、清子姫、照子姫の三人に袂を分ち、ハラみなとの港を指

して進み行く。

因ちなみに清子姫きよこひめは妹照子姫いもうとてるこひめと共に言依別命ことよりわけのみことの命めいに依より、三倉山みくらやまの谷川たにがはに進すすみ、國魂くにたま神がみの龍世姫命たつよひめのみことの宮みやに詣まうで、數多あまたの國人くにびとを教をしへ導みちびき、それよりヒル、カル、間はざまの國くにを經へて、常世とこよの國くにに渡わたり、ロツキー山さんに進すすみ、鬼城山きじやうさんに到いたり、鬼武彦おにたけひこ以下の白狐びやくこ神しんに守まもられ、三五あななひの道みちを宣傳せんでんし、清子姫きよこひめは日ひの出神でのがみの命めいに依よりて、ヒルの都みやこの楓かへで別命わけのみことの妻つまとなり、ヒルの館やかたを立出たちいで、妹照子姫いもうとてるこひめと共に此瀑布このばくふに立向たちむかひ、山中さんちうの玉たまの池いけの中心ちうしんに屹立きつりつせる岩石がんせきの上うへに小さき亭ちんを建たて、百日百夜ひやくにちひやくやの修行しうぎやうをせむとしてゐたのであつた。又照子姫またてるこひめは國依別命くによりわけのみことの媒酌ばいしやくに依よつて、バラモン教けうの教主けうしゆたりし石熊いしくまの妻つまとなり、高照山たかてるやまの館やかたに於おいて三五あななひ教けうを開ひらく事こととなつた。さうして石熊いしくまは國依別命くによりわけのみことより、光國別てるくにわけと云いふ神名しんめいを頂いただき、夫婦相和ふうふあひわして大蛇退治をろちたいぢの大蛇業だいしんげふに奉仕ほうしする事こととなつた。

アマゾン河がはの魔神まがみ及時雨およびしぐれの森もりの猛獸まうじうは鷹依姫等たかよりひめらの盡力じんりよくに依よりて、何れも神かみの道みちに救すくはれたれ共ども、未だヒルの國くにの一部いちぶ及およびカルの國くにの森林しんりんには、八岐やまたの大蛇をろちの系統けいとうの邪神じゃしん數多あまた棲息せいそくして暴威ばうゐを揮ふるひ、人民じんみんを苦くるしめ居あたれば、茲ここに光國別てるくにわけ、楓別命かへでわけのみことの

兩夫婦は神の力を得て、苦心慘愴の結果、漸く邪神を言向和すことが出来たのである。さうして高姫に従ひ來りし春彦は、タルチールと共に常世の國を乗り越え、遠く北方の雪國に進み、拔群の功名を立てたのである。此物語は後日更めて述ぶることに致しませう。

高姫一行はハラの港より又もや都合よく高島丸に乗り込み、自轉倒島に向つて歸る事となつた。海上波靜かにして、さしもに廣き大西洋も鏡の如く凪ぎわたつて居る。船中の無聊を慰むる爲、あちらの隅にも、こちらの隅にも雜談が始まつて居る。

高姫一行は靜かに諸人の雜談をゆかしげに聞いて居た。高姫の傍に座を占めた三人連れの男、チビリチビリと瓢の酒を呑み乍ら、雜談に耽りみたり。甲は先の年、龍宮の一つ島からテルの國へ歸つて來る途中、ヤツパリ此高島丸に乗つて歸つたが、其時に妙なことがあつたよ。小さい舟に婆が一人、屈強な男が二人乗つて來て暗礁に舟を當て、止むを得ず、大膽至極にも波の上を歩き出した所、俄の暴風で波は高くなり、困つて居る所へ、高島丸がそこを通り合せ、救ひ

上げた事がある。其時に何でも、高姫とか云ふ名だと記憶して居るが、舟の上から眞逆さまに海中へ墜落し、連れの男に助けられて、反對に理屈を言うた悪垂婆アが乗つてゐた。随分世の中には妙な婆アもあるものぢやないか」

乙「高姫に限らず、どこの婆アでも中々意地の悪いものだよ。それだから老婆心と云うて人が厭がるのだ。婆アに碌な奴ア一人もありやしない。俺んとも女房が來てから、今迄大切にしてくれた内の母者人も俄に心機一轉して、一人息子の俺に對してさへ、何とか彼とか云つて強く當るのだものなア。嫁と名がつきや吾子も憎いとか云つて婆アのつむじ曲りは、如何にも斯うにも仕方がないものだ。餘り内の婆アが嫁につらく當つて苛め散らすものだから、俺も見るに見かねて……

… 婆さま、まだ年の若い嫁だから、経験がないのは無理はない。これからボツボツと教へ込んで、家風に合ふ様に、婆アさまのお氣に入るやうにさすから、暫く女房のする事は、うるさくても目をつぶつてゐて下さい……と頼み込んだ所、婆アさまの怒るの怒らないのつて、忽ち目を縦にして下さい……お前は今迄私に随分孝行にして呉れたが、あのお龜が來てから、俄に了見が悪くなり、親不孝になり

よつた。これと云ふのも、決してお前が悪いのぢやない。あのお龜奴が此年老を邪魔者扱ひにして、早くあの婆アが死んでくれれば良いがと毎朝神様に祈願をこめて居やがる。私の血統にはそんな不孝な子は生れる氣遣ひはない、鶴公は性來がおとなしい孝行者だ。兔も角女房が悪いのだ……などと、勝手な理屈を云つて、俺も實は困つて居るのだ。婆アになるとなぜあの様に、奴根性が悪くなるのかな、ア

甲「其位な無理云ふ婆は別に珍しい事はないワ。村中九分通まで其式の婆ばかりだ。併し婆は家の寶だから先づ尊敬を拂はねばなるまい、が、俺の云ふ高姫婆と云ふ奴ア、又特別製の代物でそんなヘドロイ婆さまぢやないワ。八岐の大蛇か金毛丸尾か、モールバンドかと云ふ様なエグイ婆アだと云ふ事だよ。何でも金剛不壞の如意寶珠とか、其外いろいろの立派な玉を呑んだり吐いたりする、鵜の如うな婆アださうぢや。其奴が貴様、高砂島まではるばるやつて來よつて時雨の森のモールバンドに出會し、其奴と角力とつて、彼奴の尻の劍を持つて歸り、自轉倒島とかで威張り散らさうと云ふ途方途轍もない惡垂婆アの鬼婆だからなア」

鶴公「オイ松公、世の中は廣い様でも狭いものだぞ。そんなこと言ふとると、其御本人が若しや此船にでも乗つて居らうものなら、サツパリ始末に終へぬぞ。チト氣をつけぬかい」

松公「何れ此船には人間計りが乗つて居るのだから、婆だつて、一人や二人は居るだらう。高姫に能う似た面した奴も俺の近所に居る様な氣がするのだ。それだから高姫類似者の靈が俺に憑りよつて、高姫の事を思はせ、已むを得ず、話さなければならなくなつたのだ。言依別の神さまも、良い加減に意茶つかさずに、其玉を高姫に吞ましてやると、根性が直るのだけれどなア。虎でも狼でも腹がふくれて居れば、メツタに人間にかぶりつくものぢやない。人を見たら直にカブリついて、ワンワン吐す瘦犬でも腹さへふくらししてやれば、すぐに尾を振つておとなしくなる様なもので、高姫だつて、金剛不壞の如意寶珠を腹に詰め込んでおきさへすりや、おとなしうなつて、言依別さまとやらを、夜叉の様に、こんな所まで追ひかけて來やししようまいになア」

鶴公「まるで人間を四つ足に譬へとるぢやないか。高姫が聞いたたら、人を馬鹿に

すると云うて怒るだらうよ」

松公「ナ―二、高姫だつて、四つ足のサツクだ。宣傳使とか云ふ雅號を持つてるだけで、何か變つた奴の様に思へるだけだ。宣傳服を脱がし赤裸にして見よ。俺んとこのお竹よりも年が老つとるだけ値打がなくて、おまけに見つともない。尊敬の念はチツトも起りやしないよ。男でも女でも赤裸にして見なくちや、本當の價値は分るものぢやない。大將だとか頭だとか偉相に言つて、立派な風呂敷を被つて居るから、大將らしう見えたり、頭らしう見えるのだが、裸にすりや俺たちと別にどこも變つたところはありやアしない。どうぞ赤裸な人間ばかり住んで居る、誠一つの世の中が來て欲しいものだなア」

鶴公「鷹依姫とか云ふ婆アも、アリナの瀧で甘い事云つて、澤山の玉を集め、終局の果てにや、ヒルの國のテーナの里から納まつた黄金の玉をチヨ口まかし、夜裏の間に同類四人が、隨德寺をきめこみ、荒野ヶ原で神さまに散々に膏を絞られ、とうとう改心とか安心とかしよつて、アマゾン河の畔で兔の王になつたとか云ふ噂があるが、貴様聞いて居るか」

松公まつこう「ソラ聞いて居ゐる。何程なにほど大きおほうても、牛うしの尻尾しつぽになるよりも、鶏にはとりの頭あたまになる方はうが人間にんげんとしての理想りさうだから、鷹依たかよりひめ姫ひめは餘程よほど偉えらい奴やつだと、俺おれは何時いつも感心かんしんして居ゐるのだ。あの婆ばばアも、ヤツパリ自轉倒島おのころじまから高たか姫ひめの無理難題むりなんだいに依よつて逃にげて來きたと云いふ話はなしだ。本當ほんたうに高たか姫ひめと云いふ奴やつは、他人たにんが聞きいても、向むかつ腹ばらの立たつ惡垂婆あくたればばアだなアア」

鶴公つるこう「オイ餘あまり大おほきな聲こゑで言いふない。お前まへの後うしろに居ゐる二人ふたりの婆ばばアが、妙めうな顔かほして、ベソをかきかけて居ゐるぢやないか」

斯かかる所ところへ、テールリスタンはスタスタとやつて來きて、

「松公まつこう、鶴公つるこうとやら、随分ずぶん婆論ばろんがはづんで居をりますなア」

松公まつこう「オー、はづんで居ゐる。随分ずぶん威張ゐり散ちらす高たか姫ひめの噂うはさを摘發てきはつして罵詈ばりついて居ゐるのだ。そこに居ゐる婆ばアは、昨年さくねん此船このふねで見た高たか姫ひめにどつか似たやうな氣きがするが、併しかしあんな白しろい顔かほぢやなかつた。お前まへは一體いったい其高たか姫ひめに關係くわんけいのある代物しろものかなアア」

テールリスタン「關係くわんけいがあるでもなし、ないでもなし、お前まへ達たちが妙めうな話はなしを面おも白しろさう

にやつてるから、俺も一つ聞かして貰ひたいと思つて、チツト耳が遠いものだから、近う寄せて貰うたのだ」

鶴公「マア一杯やれ、酒もなしに此長の道中、勤まりつこはない」

と瓢をさし出す。

テリスタン「ソリヤ有難う。併し折角だが、私は下戸だから一滴もいかないのだ」

鶴公「ナ、何だ、ここは下戸共の来る所ぢやない。折角の興味が醒めて了ふワイ」

テリスタン「ナイスの話なれば、酒の味も甘からうが、婆ア話では根つから酒

も甘くはありますまいなア」

松公「甘くないのは承知だが、一遍高姫オツトドツコイ、そこらの婆アに、聞け

よがしに云うておかねばならぬ事があるからなア」

鶴公「そんな事、誰から頼まれたのだい」

松公「松若彦、オツトドツコイ、此松さまが若い時から、婆アが嫌ひでなア、そこへ婆アの海へおちたのを、去年此船で見たものだから、今日は又其時の光景が

記憶きおくに浮うかんで來きて、いつとはなしに婆ばあさま話はなしにバサンと深ふかみへ落おち込こんで了しまったのだ。モウ斯こんなババイ話はなしはこれ限かぎりやめにしようかい

テーリスタン「コレ松公まつこう、お前はレコの閒者まはしものぢやなア」

松公まつこう「バカ言いつて呉くれない。まはし者ものなんて、お前まへの方が氣きをまはし者ものだ。人ひとの禪まはしで相撲すまふとるよなズルイ事ことをする松公まつこうとは、チツト違ちがひますワイ……ナア鶴公つるこう、

お前まへ私わしの平常へいぜいを知しつとるぢやらう」

鶴公つるこう「貴様きさまは服ふくをつけて、ウヅの都みやこの宣傳使せんでんしだと威張みばつて居ゐやがるが、酒さけを喰くらふ

とサツパリ駄目だめだな。ヤツパリ元もとがウラル教けうだから、其癖そのくせが直なほらぬと見みえるワイ」

松公まつこう「コリヤ、人ひとの祕密ひみつをあばく奴やつがあるか、宣のり直なほせ」

鶴公つるこう「モシモシ高姫たかひめさまに能よう似にたお方かた、其他そのたの御一行ごいつかうさま様さま、此松公このまつこうは三五教あななひけうの宣せん

傳使でんしで御座ございますが、酒さけを喰くらふとサツパリ地金ぢがねが現あらはれ駄目だめだと云いふ意味いみの事ことを申まを上げましたが、松公まつこうの請求せいきうに依よつて、更あらためて宣のり直なほします、決けつして宣傳使せんでんしではないと思おもうて下ください。アハ、

アハ、ヤツパリ、デモ宣傳使せんでんしだな。一體いったいどこへ行ゆく積つりだ。何なん

と云つても最早かくすのは駄目だ、サア事實を言つて貰はう、私もウツの都から
此處迄やつて来た者でヤツパリ三五教の宣傳使の端くれだ」
松公「そんなら、白状しませう。實の所は松若彦さまに命令を受けて、お前さま
一行の後をつけて来たのだ。決して悪い考へを持つて来たのぢやない。神素盞鳴
大神様の御内命に依つて高姫さまや鷹依姫、龍國別様に、麻邇の寶珠の誠の御用
がさせたいから、同じ船に乗つて高姫の慢心をせない様、いろいろとそれとはな
しに、教訓をしてくれよとの事で、選まれて、多勢の中からやつて来たのだよ」
テリスタン「さうか、それは大いに御苦勞だ。併しそれ計りぢやあるまい。何
か外に折入つて大切な使命を帯びてゐるのだらう。否秘密の鍵を握つて居るのだ
らう。それを今ここでソツと俺に言つてくれる譯には行かぬか」
松公「秘密はどこ迄も秘密だ。自轉倒島に着く迄は、これ計りは言ふ事は出来な
い。併し今之を言ふと、お前達の手柄が出来ないから、後の樂みに除けておかう」
テリスタン「秘密とあれば、どこ迄も追求する譯にも行くまい。兔に角同じ神
さまの道を歩む宣傳使だから、互に氣をつけあうて、仲良くして行かうぢやない

か
松公「お前と俺とは仲良うしよう。また鷹依姫、龍國別の宣傳使が、若しや此船に居られたら、これは仲良うして貰ひたいものだ。併し乍ら高姫婆さまだけは、マア一寸暫らく御免蒙りたいなア」
テーリスタン「オイ、大きな聲で言ふな。そこに本當の高姫さまが目を塞いで居眠つたやうな顔して聞いて御座るぞ」
と耳に口あて、小聲にささやく。船は順風に帆を孕み、勢よく海上を迂り行く。

(大正一一・八・二八 舊七・六 松村眞澄録)

第一六章 暗夜の歌(九三一)

斯く話す中、日は西海の波に没し、暗の帳は刻々に邊りを包んで来た。船客は何れも誰彼の區別を知らず、各自に頬杖をつき眠りについた。暗の中より女の聲

として一種の歌が聞えて来た。其歌、

高姫たかひめ 思おもひまはせば去年こぞの夏なつ 金剛こんがう不壊ふゑの如意にょい寶珠ぼっしゆ

麻邇まにの寶たからに村肝むらきもの 心こころを曇くもらせ高姫たかひめは

言こと依より別わけの後あとを追おひ 瀬戸せとの海うみをば船出ふなでして

波なみに泛うかべる大小だいせうの 島根しまねを尋たづねて寶玉ほうぎよくの

所在ありかを探さぐり索もとめつつ 棚たな無し舟ぶねに身みを任まかせ

常彦つねひこ、春彦はるひこ諸共もろともに 高砂島たかさごじまの近ちかくまで

來きたる折をりしも過あやまちて 岩いはに御舟みふねを碎くだきつつ

進退しんたい谷きはまる時ときもあれ 高島丸たかしままるの船長せんちやうに

救すくひ上げられ漸やうやくに テルの國くにまで安着あんちやくし

言こと依より別わけや寶玉ほうぎよくの 所在ありかを搜さがし索もとめつつ

鏡かがみの池いけや荒野あらの原はら 時雨しぐれの森もりに立向たちむかひ

心こころを配くばり身みを碎くだき ウツの都みやこに立向たちむかひ

國依別や末子姫

妹背の縁を結び昆布

其宴席に列なりて

神素盞鳴大神の

尊き姿に拜謁し

茲に一行六人は

ウヅの都を後にして

テル山峠の峻坂を

漸く登り息休め

西へ西へと降り行く

音に名高き大瀑布

乾の瀧に立向ひ

御楔をなさむと飛込めば

底ひの水に流されて

波漂へる玉の池

いつの間にやら流れ行く

心の空もうとくなり

途方に暮るる折りもあれ

清子の姫や照子姫

ここに現はれましまして

吾をば救ひ玉ひつつ

乾の瀧の麓まで

送り玉ひし嬉しさよ

あゝ惟神々々

神の恵は目のあたり

鷹依姫の一行と

無事の對面し乍らも

心いそいそ峻坂を

くだりてハラみなとの港まで 到りて見れば折をりよくも

高島丸たかしままるは今いますでに 出帆しゅつぱんせむとする處ところ

神かみの恵めぐみと雀躍こをどりし 一行いっかうこれに乗込のりこめば

思おもひも寄よらぬ松まつさまが 國くに依別よりわけや松若まつわかの

彦ひこの司つかさの内命ないめいで 此高姫このたかひめが行動かうどうを

監視遊かんしあそばすけなげさよ 乾いぬゐの瀧たきに研みがきたる

此高姫このたかひめの神身魂かむみたま 月日つきひの如ごとく輝かがやきて

塵ちりも芥あくたも雲霧くもぎりも 拂拭ふつしきしたる今日けふの空そら

心こころを配くばらせ玉たまふまじ あゝ惟かむながらかむながら神々々

尊たふとき神かみの御光みひかりに 照てらされ歸かへるテルの國くに

ハラみなとの港みなとを後あとにして 汐しほの八百路やほぢを打渡うちわたり

自凝島おのころじまの中心地ちゅうしんち 錦にしきの宮みやを祀まつりたる

綾あやの聖地せいちへ歸かへり行く 吾身わがみの上うへぞ樂たのしけれ

吾身わがみの上うへぞ樂たのしけれ 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

三五教の神の道 清く悟りし高姫は

いかで心の變らむや 研きすました此身魂

金剛不壞の寶珠より 麻邇の玉よりいちじるく

閃きわたる今日の空 數多の星のピカピカと

照すはおのが心かな 神は吾等と俱にあり

吾は神の子神の宮 高天原に千木高く

大宮柱太しりて 仕へ玉ひし玉照彦の

貴の命や玉照姫や 其外數多の神司

教の御子を初めとし 心汚き高姫が

今まで作りし罪科を 神の御前や人の前

さらけ出して許々多久の 罪や汚れを拂ふべし

あゝ惟神々々 高島丸の船の上

遠く御空を伏拜み 深く海底拜みつつ

心こころの中なかの誠まことをば　　こここゝに現あらはし奉たてまつる

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々　　御みたま靈さち幸さちはひましませよ」

と改かいしん心の歌うたを歌うたつてゐる。此このうた歌うたを聞きいた松まつ彦ひこは又またもや暗やみの中なかより歌うたひ始はじめたり。

松まつ若わか彦かひこの家いへの子こと　　仕つかへまつれる松まつ彦ひこが

高たか姫ひめさまの歌うたを聞きき　　感かん謝しゃの餘あまり今いまこここゝに

委あさい細さいを白はく状じやう致いたします　　言こと依より別わけの神かみ様さまの

仰あふせられたるお言こと葉はに　　高たか姫ひめさまは何どうしても

玉たまに執し着ぢやく強つよくして　　到たう底てい、改かい心しんむつかしい

言こと依より別わけもそればかり　　日に夜ちやに心しん配ぱい致いたし居をる

高たか姫ひめさまが此この砌みぎり　　自おの凝ころ島しまへ歸かへりなば

麻ま邇にの寶ほつ珠しゆの所あり在かをば　　知しらせて手て柄がらをさせたいと

心こころは千ち々ぢに逸はやれども　　安あん心しんならぬ高たか姫ひめが

心こころを包つつみし八重やへ曇ぐもり 晴はらさむ由よしもなき儘ままに

神かむすさの素す盞の鳴おほ大神かみの 御み後あとに從したがひフサの國くに

齋イソ苑やかたの館すずに進ゆみ行ゆく 汝なんぢ松まつ彦ひこ慎つしみて

高たか姫ひめさまの乗のりませる 高たか島しま丸まるに身みを任まかせ

其その行かう動どうを監かん視しして いよいよ無む垢くの精せい神しんに

返かへられたりと見みた上うへは 由ゆ良らの港みなとに立たち向むかひ

秋あき山やま彦ひこに言こと依より別わけの 神かみの司つかさの言こと傳つてを

完つ全まらに詳つ細ばらに物もの語がたり 宣のらせ玉たまひし言ことの葉はを

諾うへなな 高たか島しま丸まるに打うち乗のりて

來きたりて見みれば高たか姫ひめが 心こころの底そこより改あらためて

罪つみをわびたる健けなげさよ あゝあゝ惟かむ神ながら々ながら

高たか姫ひめさまが眞ま心こころに 復かへり玉たまへば世よの中なかは

雲くも霧ぎり四よ方もに吹ふ散きちりて 五み六ろ七くの御み世よは明あからに

堅か磐きは常と磐きはに立たつならむ さはさり乍ながら言こと依より別わけの

神かみの司つかさの御教みをしへは 固かたく守まもりてどこ迄までも

自凝おのころじま島じまに至いたる迄まで 明あかしかねたる吾わが祕密ひみつ

テーリスなほスタンの神司かむつかさ 何程なにほど勧め玉たまふとも

ただ一厘いちりんの此この祕密ひみつ まだまだ明あかすこた出来できぬ

あゝ高たか姫ひめよ高たか姫ひめよ 今いまの心こころを永とこ久しへに

變かはらず動うごかず守まもりまし 松まつの神かみ世よの太柱ふとばしら

清きよきほまれを身みに負おひて 神かみの御おん爲ため世よの爲ために

身み魂たまを研みがかせ玉たまへかし 松まつ彦ひこ、鶴つる彦ひこ兩りやう人にんは

汝なが身みの後あとに付つき添そひて 高たか姫ひめさまの使しめい命めいをば

果はたさせ奉まつる吾わが覺かく悟ご 惡あしく思おもはせ玉たまふまじ

あゝ惟かむながら神かみ々々かむながら 高たか島しま丸まるの船ふねの上うへ

心こころの文たけを打うちあけて 神かみに誓ちかひて宣のり上あぐる

神かみに誓ちかひて宣のり傳つたふ あゝ惟かむながら神かみ々々かむながら

御靈みたま幸さちはひましませよ
』

又もや暗中より歌聞えて來たりぬ。

自凝島の聖地をば 龍國別の宣傳使

鷹依姫と諸共に 高姫さまに疑はれ

親子は疑團を晴らさむと 大海原を打わたり

難行苦行の末遂に 高砂島に漂着し

いろいろ雑多と氣をもみて 玉の所在を尋ねつつ

アマゾン河に打向ひ 神の恵をまつぶさに

禽獸蟲魚に注ぎつつ 又もや此處を立出でて

ウヅの都に立向ひ 神素盞鳴大神や

末子の姫に拜謁し 目出たき席に列ねられ

高姫さまと諸共に 山野を渡り河を越え

乾の瀧に立寄りて 互に魂を洗ひつつ

漸くハラノ港まで 一行六人辿りつき

高島丸に乗せられて
自凝島へ歸り行く

此船中にはしなくも
松彦さまが乗りあはし

鷹依姫や高姫の
噂をなさる不思議さに

耳をすまして聞き居れば
言依別の神司

深き思ひをめぐらして
遣はし玉ひし松彦の

神の司と聞きしより
心も勇み氣も勇み

名乗り上げむとする時に
夜の帳はおろされて

黑白も分かぬ眞の暗
忽ち聞ゆる高姫の

詐りのなき物語
歌に装ひて宣り玉ふ

あゝ惟神々々
神の御靈の幸はひて

高姫さまの眞心を
初めて聞きし心地して

其嬉しさは限りなく
御空を拜し地を拜し

感謝の涙せきあへず
ここに言靈宣りあぐる

あゝ高姫よ高姫よ
今の心を永久に

動うごかず違たがへず三五あななひの
誠まことの道みちにまつろひて
五み六ろ七くの御代みよの神柱かむばしら
廣ひろく太ふとしく立たてませよ
龍國たつくに別わけが眞心まごころを
こめてぞ祈いのり奉たてまつる
あゝ惟かむながらかむながら神々々々
御靈みたま幸さちはひましませよ

と歌うたひつつ船ふねは暗やみの海面かいめんを、帆ほを孕はらませ數多あまたの船客せんきやくの躰いびきを乗のせて西にしへ西にしへと迂すべり行く。

(大正一一・八・二八 舊七・六 松村眞澄録)

『本日大正日々新聞社長床次正廣氏湯ヶ島へ來訪即日歸坂す。
大本二代教主渡邊淳一氏を伴ひ歸綾す』

第一七章 感謝かんしゃの涙なみだ (九三二)

高島丸はテルの國、ハラの港より西へ西へと進んで、現今の日本國臺灣島へ歸つて來た。

今日の航路より見れば全然反對の道を取り、且つ非常に迂回して居るのは、三十萬年前の地球の傾斜の關係及潮流の關係に依つたものである。蒸氣の力を以て自由自在に航行する現代に比ぶれば、非常に不便なものであつた。併し乍ら其速力は今日の二十哩以上を、風なき時と雖も、航行する事が出来たのである。其故は例へば二百人乗りの船ならば、船の兩舷側に日本の船が二艘づいてゐて、二百人の乗客の乗客は、力限りに船を漕ぎ、稍疲勞したる時は、又百人これに代り、交る交る船を漕いだものである。船頭は只船の方向を定め、水先を調べ、舵をとるのみであつた。大きな船になると、二階造りになり、下からも、上からも船を漕ぐ仕掛になつて居た。恰度舷を見ると、蜈蚣の足の様に見ゆる船の造り方であつた。それ故非常な速力で、少々荒波位には少しも弱らなかつたのである。且又昔の人は總じて剛膽者が多く、臆病者は頭から乗船を許さなかつたのである。故に餘り役に立たぬ老人や、子供の船客は皆無と云つても良い位であつた。特別

の事情ある者でなければ、船に乗ることを互に戒めて許さなかつたものである。
高姫一行は漸くにして、月日を重ね自轉倒島の由良の港に安着した。秋山彦は錦の宮の玉照彦、玉照姫の命に依り、高姫一行が由良の港に歸り來ることを前知し、數多の里人を集め、埠頭に一行を迎ふべく、十曜の神旗を海風に翻し乍ら、今や遅しと待ちつつあつた。

此處へ竹島丸は波を蹴つて、高姫一行を乗せて歸り來るのであつた。高姫一行は、臺灣のキルの港より竹島丸に乗り替へたのである。高姫一行六人外に松彦、鶴公の二人を加へて八人は、秋山彦の迎への人數に送られて、勇ましげに秋山彦館に入り、息を休むる事となつた。其夜は何れも草臥果て、夕餉を喫したる儘、這ふが如くグタリとした體を、與へられた各自の寢間に運び、つぶれた様に寢て了つた。

言依別命より監視役を命ぜられて、従いて來た松彦は、其夜は一睡もせず、秋山彦夫婦と共に、高姫の身の上に関する事、及び麻邇寶珠の御用の件に就て、ひそかに協議を凝らし、夜の明くる頃漸くにして寢に就いた。秋山彦夫婦も亦昨夜

の疲勞を慰すべく、太陽の高く昇る頃まで白河夜船の夢を貪ることとなつた。

聖地よりは東助を初め、加米彦其他の面々が高姫一行を迎ふべく、由良川を下

つて此處にやつて來たのである。秋山彦館は俄の客にて、下僕共は上を下へと大

繁忙を極め、馳走の用意に差かかつて居る。

秋山彦は高姫、鷹依姫、龍國別の三人を一閒に招き、松彦が齎せる神素盞鳴大

神及び言依別命の密書の件に就て、三人に對し、意見を聞くこととなつた。

秋山彦「高姫さま、其他のお二方、永らくの間、御遠方の所、御苦勞で御座いま

した。大神様に於かせられても、さぞ御満足の事で御座いませう。就いては麻邇

の寶珠の件で御座いますが、龍宮島より迎へられた五個の中、其四つまで紛失致

しました事は、實に神界經綸上大變な不都合で御座います。これに就てあなた方

に今一度お世話になつて、四つの玉を發見して頂かねばならないので御座います

が、如何でせう、お世話になれるでせうか」

高姫「ハイ、私は金剛不壞の如意寶珠を初め、其他一切の玉に關し、最早何の執

着もなくになりましたから、此事計りは、最早斷念して居ります。此廣い世の中、

言依別命がどうかされたのでせうから、いくら捜しても駄目です。どうぞ玉の事
だけはモウ言はないのでおいて下さいませ」
秋山彦「如何なる神界の御用を致すのも、皆神様からの御命令、身魂相應の因縁
がなくては出来ないで御座います。就いては、鷹依姫様、龍國別様、モウ一人
の黒姫様、此四人の方が、麻邇寶珠の御用をして下さらねばならない因縁で御座
います、生憎龍宮島より五色の麻邇寶珠が現はれ玉ふ時機到來して、惟神的に
高姫様、黒姫様お二人を龍宮の一つ島へお導きになりましたなれど、あなた方は
此一つ島には最早玉はない、外を捜さうと云つて、お歸りになられました。それ
故止むを得ず、神界の思召に依つて、梅子姫様は紫の玉の御用、これは身魂の因
縁で當然錦の宮へお持歸りにならねばならぬ御役で御座いました。それから青色
の玉は高姫様、赤色の玉は黒姫様、白色の玉は鷹依姫様、黄金の玉は龍國別様が
御用遊ばす、昔からの因縁にきまつて居つたのです。併し乍ら、四人の方はいろ
いろと神界の時節を待たずお焦りになつて、何れも方角違ひの方へ往ていらつし
やつたものですから、神界のお計らひにて、黄龍姫、蜈蚣姫、友彦、テールス姫

の四柱が此自轉倒島まで臨時御用を遊ばしたので御座います。併し乍ら身魂の因縁だけの御用を、今度は勤めねばならないのですから、神素盞鳴大神様、言依別命様のお計らひにて、紫の玉を除く外四つの玉は言依別命様が責任を負ひ、或地點にお隠しになつてゐるので御座います。どうしても因縁だけの事を勤めねばならぬのであります。今度の御用を仕損つたら、モウ此先は未代取返しが出来ませぬから、そんな事があつては、あなた方にお氣の毒だと、大慈大悲の大御心より神素盞鳴大神様が吾子の言依別命様に責任を負はせ、罪を着せ、あゝ云ふ具合にお取扱ひになつたので御座いますよ。今此處にウツの國より、松彦の司に事依さし神素盞鳴大神様を初め、言依別命、國依別命より神書が届きました。どうぞ之を御披き下されば、玉の所在もスツカリお分りでせう。どうぞ御苦勞ですが、モウ一働き御用を願ひませう」

高姫は初めて大神の大慈悲心と、言依別命及び國依別命の眞心を悟り、感謝の涙に暮れて其場に泣き倒れた。鷹依姫、龍國別も聲を放つて、其神恩の深きに號泣して居る。

斯かる所へ筑紫の島より黒姫の所在を尋ね、玉治別、秋彦の兩人、黒姫を伴れて歸り來り、茲に四人の身魂は久しぶりに顔を見合す事となつた。

秋山彦は黒姫に重ねて前述の次第を物語り、神書を開いて讀み聞かせた。黒姫、玉治別等の筑紫島に於ける活動の様は後日に稿を改め、述ぶる事と致します。

秋山彦は神文を押戴き、靜かに開いて、四人の前に讀み上げた。其神文、

此度、國治立命、國武彦命と身を下し玉ひ、また豊國姫命は國大立命となり再

び變じて神素盞鳴尊となり、國武彦命は聖地四尾山に隠れ、素盞鳴尊はウブスナ

山の齋苑の館に隠れて、神政成就の錦の機を織りなす神界の大準備に着手すべき

身魂の因縁である。それに付いて、稚姫君命の御靈の裔なる初稚姫は金剛不壞の

如意寶珠を永遠に守護し、國直姫命の御靈の裔なる玉能姫は紫の玉の守護に當り、

言依別命は黄金の玉を永遠に守護し、梅子姫命は紫色の麻邇の寶珠の御用に仕へ、

高姫は青色の麻邇の寶玉、黒姫は赤色の麻邇の寶玉、鷹依姫は白色の麻邇の寶玉、

龍國別は黄色の麻邇の寶玉を守護すべき身魂の因縁なれば、これより四人は麻邇

の寶珠を取出し、綾の聖地向ふべし。控への身魂は何程にてもありとは云へど

も、成るべくは因縁の身魂に此御用を命じたく、萬劫末代の神業なれば、高姫以下
の改心の遅れたる爲、神業の遅滞せし罪を言依別命に負はせて、高姫以下に萬
劫末代の麻邇の神業を命ずるものなり。……神素盞鳴尊かむすさのをのみこと
と記してあつた。四人は感謝の涙にむせび乍ら、直ちに手を拍ち、神殿に感謝の
祝詞を奏上した。秋山彦は黄金の鍵を持ち出でて、高姫に渡し、
秋山彦あきやまひこ「いざ四人の方々、吾館の裏門よりひそかに由良の港に出で、沓島に渡り、
麻邇寶珠の四個の玉を、各自命ぜられたる如く取出し、祕に聖地へ歸り、尊き神
業に参加されたし。此事、聖地其他の神司、信徒の耳に入らば、却て四人の神徳
信用に關係する事大なれば、一切祕密を守り、大神の御意志を奉戴し、今迄の罪
を贖ひ、天晴れ麻邇寶珠の神司として聖地にあつて奉仕されむ事を希望致します。
サア早く早く……」
と急ぎ立てられ、四人は喜び勇んで、裏口より祕に脱け出で沓島に向つて進み行
く。

此事玉治別を初め、加米彦、テ、カー、常彦、其他の神司、聖地の紫姫、黄

龍姫、蜈蚣姫、友彦、テールス姫其他の神司も信徒も永遠に知る者がなかつたのである。

高姫外三人は素盞鳴尊の仁慈無限のお計らひにて、罪穢れを許され、身魂相應因縁の御用を完全に奉仕させられたのである。ア、惟神靈幸倍坐世。
(大正一一・八・二九 舊七・七 松村眞澄録)

第一八章 神風清 (九三三)

秋山彦は東助、玉治別其他一同の集まる廣間に現はれ、皆様、御苦勞で御座いました。高姫様初め黒姫、鷹依姫、龍國別の御一行は漸く惟神の御經綸に依り、私の館までお歸り下さいまして、實にこれ位喜ばしい事は御座いませぬ。就いては言依別命様が責任を負うて、聖地をお立退きになりました大事事件の根源たる麻邇の寶珠の所在が、高姫様以下御一同の熱誠に依つて、

判明致しましたに付いては、臆て近き内に麻邇の寶珠を持つてお歸りになること
で御座いませう。皆様はどうぞ、これより聖地に歸り、歡迎の御準備を願ひます。
國治立命様、豊國姫命様を初め、神々様の御仁慈は到底吾々の語り盡すべき所で
は御座いませぬ」
と嬉し涙に濕つた聲を張上げて挨拶をするのであつた。東助、玉治別其他の一同
は、秋山彦の案に相違の言葉に驚き且つ怪しみ乍ら、高姫以下の此場より何處と
もなく消えたるに拍子抜けしたる面色にて、急ぎ聖地を指して歸り行くのであつ
た。

聖地の錦の宮の八尋殿には、玉照彦、玉照姫、英子姫は、紫姫と共に數多の幹
部を従へ、一行の歸り來るを待ちつつあつた。東助は三人の神司の前に恭しく進
み寄り、頭を下げ兩手をつかへ、
東助「由良の港の秋山彦の館へ、高姫一行を迎への爲參りました所、竹島丸に乗
込み、高砂島より一行八人お歸りになりました。それより秋山彦館にお迎へ致し、
一夜を明かし、いろいろの款待に預り、無事の歸國を祝して居る際、黒姫もお歸

りになり高姫一行四人の方々は麻邇の寶珠の所在が分つたとかで、ソツトどこかへ御出でになりました。就いては近日其玉を得て聖地へお歸りになるから、早く歸つて歓迎の準備をせよとの事で御座いました。何が何だか、私には一向要領を得ませぬが、是非なく此處まで歸つて参りました。如何致せば宜しいので御座いませうか。紫姫様、どうぞあなたより三柱の神司へ宜しく言上を願ひます」と云つた。紫姫は「ハイ」と答へて高座にのぼり、三柱の前に額づき、東助の言葉を一々言上した。英子姫、玉照彦、玉照姫の三柱の神司はニコニコし乍ら、頭を縦に振つてゐられる。其の様子がどこやらに深き確信あるものの如く見られた。三柱の神司は神前に向ひ、恭しく祝詞を奏上し終つて、一同の神司及び信徒に目を禮を施し乍ら館の奥深く忍び入り給うた。

紫姫は東助に向ひ、

「只今三柱の大神司より承はりますれば、高姫様は明日四人連れにてお歸りのはずで御座いますから、どうぞ歓迎の準備を遊ばして下さいませ」

東助「ハイ委細承知しました」

と此場をさがり、歓迎の準備に全力を盡し、高姫の歸るを今や遅しと待ちつつあった。

明くれば九月八日、高姫、鷹依姫、黒姫、龍國別の四人は嬉々として、麻邇の寶珠を捧じ、錦の宮の八尋殿指して歸り來り、直に神殿の前に進み、各玉を捧持して、無言の儘控へて居る。紫姫は此體を見て、直に三柱の大神司に奉告した。

茲に玉照彦、玉照姫、英子姫、紫姫は禮装を調へ、四人の前に無言の儘現はれ、玉照彦は高姫の手より青色の麻邇の寶珠を受取り、玉照姫は黒姫の手より赤色の寶珠を受取り、英子姫は鷹依姫の手より白色の寶珠を受取り、紫姫は龍國別の手より黄色の麻邇の寶珠を受取り、頭上高く捧げ乍ら悠悠として錦の宮の神前に進み、案上に恭しく安置され、再び八尋殿に下り來り、高姫外三人の手を取り、殿内に導き感謝祈願の祝詞を共に奏上し、八人相伴ひて、教主殿の奥の間さして進み入り、互に歡を盡して、無事の歸國と其成功を祝し玉うたのである。

英子姫、皆様、随分御苦勞で御座いましたなア。神界の御經綸は到底、人間共の量り知る所で御座いませぬ。只何事も神様の御命令に従ふより外に途は御座いま

せぬ」

高姫「ハイ、有難う御座います。私も餘り神様の御道を大事に思ふ餘り、言依別命様の行方を見て、大神様の御經綸を妨害し、再び天の岩戸をとざす惡魔の所爲と思ひつめ、いろいろ雑多と誤解を致し妨害のみ致して参りました。今日となつて顧みれば實に恥かしう御座います。私の改心が遅れた計りで、皆様にいろいろの御苦勞をかけ騒がしました。言依別の教主様も、私の爲に大變な御艱難を遊ばし、實に申譯が御座いませぬ。大化者だとか、體主靈従の身魂だとか、世界惡の映像だとか、いろいろ雑多と云ひふらし、邪魔計り致して來ましたが、顧みれば私こそ惡神の虜となり、知らず識らずに體主靈従の行ひをなし、世界惡の根本を敢てしながら人の事計り喧しく申上げて來ました。私の迂愚迂闊、今更辨解の辭も御座いませぬ。大化者と云ふ事は、決して悪い意味では御座いませなんだ。餘り人物が大き過ぎて、吾々の身魂では測量することが出來なかつた爲に、譯の分らぬ教主だと思ひ、大化者だと云つて罵つたので御座いました。仁慈の深き、到底吾々凡夫の知る所ではないことを、深く深く身に沁み渡つて感じまして御座い

ます。何程あせつても、身魂の因縁だけの事より出来るものでは御座いませぬ。

どうぞ今迄の不都合をお許し下さいまして、身魂相應の御用を仰せ付け下さいま

すれば、有難う存じます」

英子姫「其お言葉を聞いて、妾も安心致しました。玉照彦様、玉照姫様、さぞお

喜びで御座いませう。第一、國治立大神様の御化身國武彦命様、神素盞鳴大神様

は貴女の御改心をお聞き遊ばして、さぞ御満足に思召すで御座いませう。貴女の

御改心が出来て、身魂の御因縁が御了解になれば、三五教は上下一致して御神業

に参加し、五六七神政の基礎が確實に築き上げられる事と喜びに堪へませぬ」

高姫「ハイ、何から何まで、御注意下さいまして有難う存じます」

黒姫「私は最早何にも申上げる事は御座いませぬ。只感謝より外に道は御座いま

せぬ。どうぞ萬事宜しく、今後とても不都合なき様、御注意を願ひます」

鷹依姫「私も高姫様に聖地を追ひ出され、いろいろと艱難苦勞を致しまして、一

時は高姫様をお恨み申したとさへ御座いましたが、今となつて考へて見ますれ

ば、何事も皆神様の御仕組で、曇つた魂を研いて、神界の御用に立ててやらうと

の御取りなしであつたことを、今更の如く感じました。實に申上げ様もなき有難き瑞の御靈の思召し、言依別命様のお心遣ひ、お禮は口では申上げられませぬ』と嬉し涙にかき暮れる。

龍國別「神恩の高き深き、感謝の外御座いませぬ。何卒萬事不束な者、宜しくお願ひ致します」

玉照彦、玉照姫は四人に向ひ鎮魂を施し、悠悠として我居間に歸り玉うた。高姫は初めて今迄の我がを拂拭し、青色の麻邇の寶珠の玉に對する神業に参加することを決意し、金剛不壞の如意寶珠の御用の吾身に添はざること深く悟ることを得たのである。

茲に金剛不壞の如意寶珠の御用を勤めたる初稚姫は初めて錦の宮の八尋殿の教主となり、紫色の寶玉の御用に仕へたる玉能姫は生田の森の神館に於て、若彦（後に國玉別と名を賜ふ）と夫婦相並びて、生田の森の神館に仕ふることとなつた。

又黄金の玉の神業に奉仕したる言依別命は少名彦名神の神靈と共に齋苑の館を立出で、アーメニヤに渡り、エルサレムに現はれ、立派なる宮殿を造り、黄金の玉の威徳と琉の玉の威徳とを以て、普く神人を教化し玉ふこととなつた。

又梅子姫は父大神のまします齋苑の館に歸り、紫の麻邇の玉の威徳に依つてフサの國の齋苑館に仕へて神業に参加し、高姫は八尋殿に大神司を初め紫姫の部下となつて神妙に奉仕し、黒姫、鷹依姫、龍國別もそれぞれの身魂だけの神務に奉仕し、神政成就の基礎的活動を勵む事となつたのである。

此等の神々の舍身的活動の結果、いよいよ四尾山麓に時節到來して、國常立尊と現はれ、現幽神三界の修理固成を開始し玉ふことを得るに至つたのである。これが即ち大本の教を國祖國常立尊が變性男子の身魂、出口教祖に歸懸し玉ひて神宮本宮の坪の内より現はれ玉うた原因である。又言依別命の舍身的活動に依つて黄金の玉の威靈より變性女子の身魂、高熊山の靈山を基點として現はれ、大本の教を補助し且つ開くこととなつたのである。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・二九 舊七・七 松村眞澄録)

第四篇 理智と愛情

第一九章 報告祭（九三四）

綾の聖地に於ける錦の宮の八尋殿には、七五三の太鼓の音が聞えて来た。今日は殊の外風清く、陰鬱なる霧も早朝より晴れ渡り、紺碧の空は愈高く、太陽は東の山の端より其雄姿を現はし、金色の光を地上に投げてゐる。今朝は太鼓の音も何となく冴え渡り、下界の邪氣を萬里の外に追ひ拂うた様な気分が漂うてゐる。東助、高姫を初め、秋彦、友彦、テールス姫、夏彦、佐田彦、お玉、高山彦其他の幹部は祭服厳めしく、報告祭を勤行するのであつた。高姫が久振りにて高砂島より歸り、又黒姫、玉治別が筑紫の島より遙々歸國し、鷹依姫、龍國別の宣傳使が無事に歸國して、麻邇寶珠の神業に無事奉仕せし歡びと、黒姫が三十五年振りに吾實子の發見せられし事の感謝を兼ねたる報告祭であつた。

一絃琴、二絃琴の嚙唳たる音樂の聲と共に祭典は無事終了した。教主の英子姫を初め、玉照彦、玉照姫の神司竝に紫姫も、神殿に深く進みて此祭典に列せられた。祭典終ると共に此四柱は教主の館を指して、悠々と四五人の信徒に送られ歸つて行く。

後には賑々しく直會の宴が開かれた。萬代未聞の大慶事といふので、錦の宮の八尋殿も日頃の窮屈に引替へ、今日一日は氣樂に直會の酒を飽く迄頂き、口々に歌ひ舞ひ、踊り狂ふ事を默許されて居た。酒の酔が廻るにつれて、そろそろ雑談が始まつて来る。

甲「オイ虎公、時節は待たねばならぬものだなア。高姫の大將や、黒姫婆アさまが、寢ても醒めても、玉々と云つて随分玉騒ぎで、言依別命様や、大勢の者を手古摺らしたものだ、到頭一心を貫いて、玉の御用を首尾克く勤め上げたぢやないか。おまけに筑紫の島から玉を一つ持つて歸りよつたのは黒姫だ。本當に甘い事しよつたネー」

虎公「オイ、小さい聲で言はぬか。あれ見よ、高姫さまや黒姫さまが正座に構へ

て御座るぞ」

甲「俺も一つ是から玉さがしに往つて來うかなア」

虎公「貴様捜しに往かなくても、宅に澤山あるぢやないか。よく考へて見よ。貴

様ん所の猫は「玉」といふだらう。そして毛の色が眞黒々助の黒姫だオツトドツ

コイ黒猫だ。おまけに貴様の嬢がお「すみ」と云つて名詮自稱の眞黒々助、中低

のお「玉」杓子のやうな顔をしてゐるだらう。そして小つぽけな肝「玉」を持つ

てゐるなり、團栗のやうな目「玉」も二つぶら下げてゐる。貴様の鞆「丸」は名

代の八疊敷狸が税金取りに來るやうな品「玉」だ。これ丈澤山に麻邇の寶珠や金

の「玉」を持つてゐる癖に、此上玉騒ぎをせられちや皆の者が「たま」らぬから、

モウ良い加減に諦めたがよからうぞ。のう狸の安公」

安公「コリヤ虎猫、何を吐すのだ。人の事を云ふよりも、自分の蜂から拂うてか

かれ。俺のは八疊敷ぢやない錦の信玄袋だ。奴狸野郎奴貴様は手力男神さまの様

に、おれは猫の年に生れた寅公だけれど、ヤツパリ人の家に養はれる家畜だから、

自稱良の金神よりも餘程偉いと吐してゐやがるが、猫寅の金神と云ふ者がどこに

あるか。よつ程よい馬鹿者だなア」

虎公「トラ何を吐す。丑と云ふ奴は庭のすみつこに置いて貰ひ、糞まぶれになつて草を喰つて暮して居る奴だ。猫と云ふ奴は、主人の膝へものり、同じ炬燵へも這入り、家庭の花となつて、優待される代物だぞ。それだから猫が一番偉いのだ。それだから猫虎の金神は丑寅の金神よりも位が上だと云ふのだ。」

猫が三筋の手管の絲で

鱈や鯰を引きこらす……

と云ふ事を知らぬか。何程鱈ひげを生やし、鯰ひげを生やしたる【ゼニトルメン】でも、自由自在に引きまはす、萬能力を持つてゐるのだから大したものだ。猫寅の金神さまに限るぞよ。……猫寅の金神が現はれて、三千世界の神、佛事、人民、鳥類、獸、蟲族に至るまで守護致さぬぞよ。……コラ安、イヤ狸安、どうだ、豪勢な者だらう。オツホ、〴、〵」

と笑ふ。安公は立あがり、そこらをキヨロキヨロ見まはし、自分の加勢に来て呉れる友達はないかと、酔眼朦朧とあたりを調べてゐる。そこへ目についたのは竹公と云ふ友達である。安公は、

「オイ竹公、一寸来てくれ、加勢だ加勢だ」

此聲に竹公は多勢の中をヒヨロリヒヨロリと千鳥足になり、徳利を蹴轉がし、杯をふみ碎き、人の頭の上に尻餅をついたり、肩を押へたりし乍ら、やつとの事で安公の前にやつて来た。少し目が悪いので信仰を始めた近在の百姓男である。

眞珠の上に雑水をかぶせた様な目玉を、底の方からピカピカ光らせ乍ら、竹公は、「オイ安公、何を「かせい」するのだ。かせいと云つたつて、此頃はサツパリ懐が冬枯れだ。木の葉一枚ドンドン乍ら、持つてゐないのだから、反對にこつちへチツト許り貸せないかなア。俺も今日は斯うして目出たい酒を頂いたのだが、今日働いて今日食ふと云ふ江戸つ兒氣質の哥兄さまだから、今日は稼ぎが出来ない。三界の首枷となる餓鬼が二三匹、家にや嬢と一緒に鍋を洗つて待つてゐるのだから、俺やモウそれを思ふと、折角呑んだ酒がさめて了ひさうだ。おれのやうな者

にカセカセ吐さずと、此猫寅に貸して貰つたら如何だい」

虎公「オイ竹公、猫虎とは餘りぢやないか」

竹公「丑寅の金神さまよりも偉い名ぢやないか。今お前がさう言つて自慢して居

ただらう。それだから此竹公が、力一杯尊敬して猫寅といふのだが、どこが悪い

のだ、そんな事はすにチツト俺に貸せ。今日は目出たい日だから、お前も人に

頼まれて滅多に首を横にふるやうな事はしさうな筈もなし、俺も亦借つて呉れと

頼まれて借つてやらぬと云つて、一口にはねるやうな拙劣な事はせないからなア」

安公「オイ竹公、こんな奴に金でも借らうものなら、それこそ大事だ。出會ふ度

に、貸してやつた貸してやつたと、人の前だらうが何處だらうが構はずに、いつ

迄も恥をかかしやがるから、措け措け、後の爲が悪いぞ」

竹公「ナ、二、構ふものか。こちらの方から反對に、人に出會ふ度に借つてやつ

た借つてやつたと云つたらいいぢやないか。貸してられる奴よりも借る奴の方が、

當世は力があるのだからなア。さうだから人間は借金をせなくては、男の幅が利

かぬといふのだ。貴様のやうに金持の所へ行つては三文一文の世話にもならぬ癖

に、追従タラダラ、旦那はん佛壇はん、ゼントルマンだとか吐しゃがつて、お髭の塵を拂ふよりも、俺達は自分の甲斐性でドツサリ金を借り、お髭の塵どころか、三文も拂うてやらぬのだ。さうすると、借られた奴めが、反對に俺の機嫌を取りやがつて、逆さまに振うても蝨一つおちぬ男を、道で出會ふと向ふの方からペコ頭を下げて、機嫌を取るのだから大したものだよ。もしも俺を怒らさうものなら、貸した金をふみつぶされちや堪らないと、執着心の欲にかられて弱くなるのだからなア、貴様の様に貸しもせねば、能う借りもせず、朝から晩まで碌な物も食はず、嬪アと睨みつこ計りして……あゝ今年もなんぼなんぼ食ひ込んだ、田が一町減つた。林が一つ飛んだ……と言つて、青息吐息で暮す代物とは、チツト種が違ふのだからなア」

虎公は酒にツブ六に酔うて居る竹公の話聞いて、何と思うたか、虎公「オイ竹公、貴様の言草は中々面白い。今まで随分借倒されたが、到底返してくる見込もあり相にない。一生貴様のいふ通り、俺は貴様の機嫌をとらねばならぬと思へば情なうなつて来た。どうぞおれに金を借つてやつたと云ふことを

忘れてくれ。俺も亦貸したなんどといふ事は夢にも思はぬからなア。ここに金百兩あるが、これも貴様に献上するから受取つてくれ。そして俺から貰うたといふ事もスツカリ忘れるのだぞ。俺も貴様にやつたといふ事を、今日限り忘れて了ふからなア」

竹公「ヨシ、特別を以て許してやらう。有難く頂戴いたせ……ぢやない、俺が頂戴いたす……オイ安公、どうだい、竹哥兄のお腕前を知つたか、アーン」

安公「チツト俺にも分配せぬかい。貴様一人、猫糞をきめるとは、餘り蟲がよすぎるぞ」

竹公「猫糞をきめこむのは當然だ。灰猫の猫寅から……オツトドッコイ、忘れるのだつた、貰つたか貰はぬか、曖昧模糊として、捕捉す可らざる活劇に依つて、捕捉したのだから、マア内の嬢アに御届けする迄は御免蒙らうかい。ウフ、ハ、ハ……時に黒姫さまの本當の子といふのは、あの……それ……何ぢやないか、本當に呆れたものだなア」

安公「玉治別さまが黒姫の若い時の倅だつたといふの。何と黒姫も今こそ神さまだ

とか、をしへ教だとか、えらさう偉相に云つてゐやがるが、わか若い時ときやよほど餘程のいたづらむすめ淫奔娘だつたと見え
るワイ□

竹公たけこう「さうだから、かみ神さまがこの此八尋殿へあつま集つて来る者は、とがにんばか罪人計りだとおつしや仰有るの
だ。いちだい一代でと取れぬつみ罪をかみ神のごよう御用をさ命して、いちだい一代でと取つてやらうとおつしや仰有るのだから
なア。この此聖地えらでえら偉さうにをやつて居るとうすけ東助そうむ總務でも、たかひめ高姫でも、げほうげほうさまでも、
わか若い時ときにどん如何なこと事をやつてき來やがつたか、し知れたものぢやないぞ。うへ上にた立つて居
るもの者ほど程みたま靈わるのどう悪い如何もか斯うもならぬならぬやつ奴がひきよ引寄せてあるぞよと、かみ神さまがおつしや仰有るの
だからなア□

虎公とらこう「オイりやうにん兩人、あんま餘りなこと事を言つちやい可いけないぞ。今日けふはめ目出たい日だから、はなし話
をするのはいい良いが、じんしん人身こうげき攻撃なるなるやうなこと事はつつし謹まねばならうならうまい。の悪言の暴語なな
く、みや善言び美詞のこと言たま靈をもつ以てあまね普くかみがみ神人をなご和め、あめつち天地のみこ御子とうま生れ出でたるその其本分をを
盡つくさせたま玉へ……とあさ朝ゆふな夕いのなにところ祈る所やひろどのの八尋殿ぢやないか。チツトばしよ場所をかんが考へて見
よ□

竹公たけこう「上うへにた立つとやつる奴は、どいつ何奴もこいつ此奴もすますましたかほ顔しやがつて、おれ俺はゼントルトルメ

ンだと吐ぬかしてゐるが、神かみさまを松魚節かつをぶしにして、人ひとの懐ふところから錢取ぜにとる奴めんだ。まるで體ていのよい泥棒どろぼうだよ。八尋殿やひろどのが聞きいて呆あきれら。ワツハ、ハ、ハ、ハ、

安公やすこう「錢取ぜにとる奴めんといふ事は貴様きさまの事ことだ。衆人環視しゅうじんくわんしの中で、猫寅ねことらの懐ふところから、現げんに錢ぜに取とる奴めんをやつたぢやないか。人ひとの事ことだと思おもうて居をつたら、皆吾事みなわがことであるぞよと神かみさまの御教みをしへにあるのを貴様きさま覺おほえて居をるか」

竹公たけこう「そんな所ところは俺おれが覺おほえる必要ひつえうがないのだ。各自めいめいに心相應しんそうおうに取とれる教をしへだから、俺おれはおれで取とる所ところがあるのだ。貴様きさまも貴様きさまで、氣きに入いつた筆先ふでさきの文句もんくがあるだら

う」

安公やすこう「さうだなア、俺おれだつて嫌きらひな所ところもあれば好きすきな所ところもある。……良うしとらの金神現こんじんあら

はれて……と云いふ聲こゑを聞きくと、俄にはかに頭あたまが痛いたくなりやがるなり……龍宮りゅうぐうの乙姫おとひめが日ひ

の出神でのかみと現あらはれるぞよ……といふ文句もんくになつて來くると、益々ますます氣分きぶんが悪わるくなつて逃にげて歸かへりたくなつて了しまふワ。さうだと思おもふと……世よにおちぶれた者ものを侮あなごる事ことはな

らぬぞよ、結構けつこうなお方かたが世よにおとしてあるぞよ、誠まことの人間にんげんほど苦勞くらうが永ながいぞよ、神かみは上下運否うへしたうんぶのなき様やうに致いたすぞよ……といふ點てんになると、中々なかなか氣きに入いるね。斯かう

いふ所を聞かされると、虎公なぞは頭の痛い口だらう。それだから其人々の心に取れる筆先だと神様が仰有るのだ」

虎公「俺は別にどこが好きだの嫌ひだのといふ事はない、神さまの教には無條件降服だ。何程人間が偉相に考へて見た所で神様のお詞が分るものぢやない。俺は變性男子に對しても變性女子に對しても絶対服従だ。無條件降服だ。それより取るべき途がないのだからなア」

安公「貴様も偉い迷信家だなア。筆先といふものは一々審神をせなくては、何もかも、貴様のやうに唐辛丸呑みの議論ではサツパリ駄目だ。辛いか甘いか苦いか、よくかみ分けるのが、吾々の務めだ」

竹公「もうゴテゴテいふな、今日は目出たい日だから、俺は兔も角筆先に有難いことがあるのだ。……難儀な者を助ける精神にならぬと、神の氣かんに叶はぬぞよ……といふ所がある。其筆先のおかげで、猫寅が今迄の執着心をスツパリ捨て了つて俺に現金で百兩も、澤山借金がある上に、くれる様な善の心に立返りなされたぞよ。龍宮の乙姫殿は、誠に欲の深い神でありたなれど、此度良の金神さ

まが表おもてに現あらはれ遊あそばして、三千世界さんぜんせかいをお構かまひ遊あそばすについて、乙姫おとひめさまも、これでは可いかぬと御合點おがつてんを遊あそばし、今いままで海うみの底そこにためておいた寶たからを、殘のこらず良うしろの金こん神様じんさまにお渡わたし申まをして、今こんど度の御用ごようの片腕かたうでにお成なりなされたぞよ。人民じんみんも其通そのとほり、欲よくにためて居をりて萬劫末代まんごふまつだい吾われの物ものだとこばりて居をりても、天地てんちの物ものは皆神みなかみの物ものであるから、神かみに返かへさねばならぬぞよ。上下運否うへしたうんぷのなき世よに致いたして、世界せかいの人民じんみんを安心あんしんさせるぞよ。早はやく改心かいしん致いたした者程結構ものほどけつこうになるぞよ……と云いふお筆先ふでさきは俺達おれたちに取とつては天來てんらいの大福音だいふくいんだ。猫寅ねことらでさへも龍宮りゅうぐうの乙姫おとひめさまになりかけたのだからア。ウツフ、、ボロイボロイこんなボロイ事ことが世よにあらうか。それだから信心しんじんの味あぢが分わからぬといふのだ」

斯かく得意とくいになつて、ベラベラ喋しゃべつてゐる所ところへ、伊助いすけといふ竹公たけこうの身内みうちの男をとこ、矢庭やにに走はしり來きたり、馬鹿ばかツと大聲たいせい一喝いつかつ、竹公たけこうの横面よこづらをなぐりつけた。

竹公たけこう「アイタ、、コリヤ伊助いすけ、貴様きさまは誰たれに斷ことわつて俺おれの面つらを擲なぐつたのだ。伊いけ助すけな

い餓鬼がきだ。今いまにドツサリ金かねを持もつてお禮れいに行くゆから、さう思おもへ」

伊助いすけ「早はやくお禮れいに來きてくれ、待まつて居ゐる」

と云ひ乍ら群集を押し分け表へ驅出した。東助は高座に立現はれ、大聲を張上げて、東助「皆様、御苦勞で御座いました。これで宴會を閉じますから、一先づ御退場を願ひます」

と宣示した。數千人の人々は東助の鶴の一聲に、神殿に向ひ拍手再拜し、各上機嫌で住家を指して歸り行く。

(大正一一・九・一九 舊七・二八 松村眞澄録)

第二〇章 昔語〔九三五〕

桶伏山の東麓に小雲川を眺めた風景よき黒姫の館には、主人側の黒姫を初めとし、高山彦、東助、高姫、秋彦、友彦、テールス姫、夏彦、佐田彦、お玉、鷹依姫、龍國別の面々が親子對面の祝宴に招かれ靜に酒汲み交はし、色々の話に耽つて居る。

高姫「黒姫様、長らく筑紫の島へ御苦勞で御座いました。第一の御目的は高山彦様の後を慕つてお出で遊ばしたのだが、何が經綸になるのか分りませぬなア。肝腎の目的物たる高山彦さまは、燈臺下は眞暗がり、足許の伊勢屋の奥座敷にかくれて居られましたのも御存じなく、御苦勞千萬にも逢々と波濤を越えてお出で遊ばし、氣の毒な事だと思ひましたが、不思議の縁にて、玉治別が貴方のお子様だと云ふ事が分つて参りましたのも、實に不思議の神様のお引合せ、何が御都合になるか分つたものぢや御座いませぬなア」

黒姫「ハイ、本當に嬉しい事で御座います。私の倅がこんな立派な宣傳使になつて居るとは夢にも知りませなんだ。ほんに因縁者の寄り合だと神様が仰有るのは争はれないお示しで御座います……改心致せば御魂だけの御用を指してやる、改心致さねば親子の對面も出来ぬやうになるぞよ……と、お筆に出て居りますが、私は餘り身魂の曇りが甚かつたために、今まで吾子に遇ひながら知らずに居りました。こんな嬉しい事は御座いませぬ。年が寄ると何を云うても子が力で御座いますからなア。親子は一世と云つて切つても切れぬ深い縁のあるもので御座いま

す。それにつけても夫婦二世とはよくいつたもの、親子の關係に比ぶれば夫婦の道は随分水臭いもの、少し氣にくはぬ事を云つたと仰有つて、高山さまのやうに姿をかくし、女房に甚い心配をさせる夫もありますからなア」

高山彦「モウ、その話は中止を願ひます。一家の政治上の治安妨害になりますから……」

黒姫「ホ、ホ、ホ、何とマア都合のよい事を仰有いますワイ。よい年をして居つて伊勢屋の下女と何とか彼とか……眞偽は知りませぬが、私の留守中噂を立てられなさつた好男子だから、本當に水臭いハズバンドだ。ア、併しもう云ひますまい。立派な倅の前だから恥かしくなつて來ます」

高山彦「お前は實の倅に遇つて嬉しうなつたと見えて俄に燥ぎだし、ハズバンドの私に對して非常に冷やかになつて來たぢやないか。私もかうなつて見ると子が欲しくなつて來た。併し乍らお前のやうな婆では到底子を生むと云ふ望みもなし、もう諦めるより仕方がない。玉治別さまはお前の子だ。そしてお前は私の女房だ。さうすれば私も萬更他人ではない。玉治別さまのお世話になるより仕方がないな

ア。併し乍ら、お前はいつの間に誰と夫婦になつて玉治別さまを生んだのだ。差支なければ皆さまの居られる中だけれど、一つ話して呉れないか」

黒姫は、

「これも私の罪滅し、恥を曝して罪を神様に取つて貰はねばなりませんから、懺悔のために申し上げます」
と云ひながら一絃琴を引き寄せて歌ひ出したり。

□ ペルシヤの國の柏井の里に名高き人子の司

烏羽玉彦や烏羽玉姫の長女と生れ育ちたる

アバズレ娘の黒姫が柏井川にかけ渡す

橋の袂を夕間暮れ一人トボトボ川風に

吹かれて空を打ち仰ぎ天の河原の西東

棚機姫が御姿を仰ぐ折しも向ふより

二八許りの優男粹な浴衣を身に纏ひ

水口酔機嫌みづぐちよきげんでヒヨロヒヨロと 鼻歌謠はなうたひ進すすみ來くる

聲こゑの音色ねいろは鈴蟲すずむしか 松蟲まつむし、蟋蟀こほろぎ、蝻斯きりぎりす

秋あきの夕ゆふべの肌寒はださむき 魔風まかぜ戀風こひかぜさつと吹ふき

顔かほと顔かほとは相生あいおひの 實げにも氣高けだかき男をとこよと

此方こちらに思おもへば其人そのひとも 摩す擦れつ纏もつれつからみあひ

松まつと梅うめとの色深いろふかく 露つゆの契ちぎりを人知ひとしれず

四邊あたりの木蔭こかげに忍しのび入いり 暗くらさは暗くらし烏羽玉うばたまの

星ほしの影かげさへ封ふうじたる 森もりの木蔭こかげの草くさの上うへ

白しろき腕ただむ淡雪あはゆきの 若わかやる胸むねを素抱そだたきて

たたきまながり眞玉手玉手またまたたまで さし捲まきも長ながに

寢いぬる折をりしも恥はづかしや 忽たちまち來きたる人ひとの足音あしおと

吾われは驚おどろき身みを藻掻もがき 戀こひしき男をとこと右左みぎひだり

あはれや男をとこは何人なにびとと 尋たづぬる間まさへ夏なつの末すゑ

果敢はかなき露つゆの契ちぎりにて 三十五年さんじふごねんの昔むかしより

夢ゆめや現うつつと日ひを送おくり
今いまに夫をつとの行方ゆくへさへ

知しらぬ妾わらはの身みのつらさ
その月つきよりも身みは重おもく

不ふ思議ぎや妾わらはは懐胎くわいたいし
嚴きびしき父ちちや母上ははうへに

何なんと應こたへもなきままに
暗やみに紛まぎれて柏井かしはあの

父ちちの館やかたを脱ぬけ出いだし
赤子あかごを抱かかへさまざまと

苦く勞らうも絶たえぬ黒姫くろひめが
心こころは忽たちまち鬼おにとなり

哀あはれや赤子あかごに富士ふじ咲さく
名なをつけ道みちの四辻よつ辻に

捨すてて木蔭こかげに立たち乍ながら
如何いかなる人ひとの御惠みめぐみに

吾わが子は拾ひろい上あげらるか
あはれみ給たまへ天津神あまつかみ

國津神くにつかみ達たち國魂くにたまの
神かみよ守まもらせ玉たまへかしと

心こころに祈いのる折柄をりからに
力ちからチリ力ちからチリと杖つゑの音おと

子この泣なき聲こゑを聞ききつけて
いづくの人ひとか知しらねども

かかるとしき幼をさな兒ごを
此處こゝに捨すてしは云いひ知しれぬ

深ふかき仔細しさいのあるならむ
何なには兔ともあれ拾ひろひあげ

救ひやらむと云ひ乍ら
 その旅人は富士咲を
 勞り抱き懐に
 かかへて橋を渡り行く
 妾は後より伏し拜み
 拾ひし人の幸福や
 捨てた吾子はスクスクと
 成人なして世の中の
 花と謳はれ暮せよと
 涙と共に立ち別れ
 四方を彷徨ふ折柄に
 又もや父に廻り合ひ
 再び吾家に立ち歸り
 厳しき父母の膝下で
 月日を送る十年振り
 捨てた吾子が苦になつて
 朝な夕なに氣を焦ち
 案じ過ぎせど手係りも
 泣きの涙で日を送り
 メソポタミヤの顯恩郷に
 鬼雲彦の現はれて
 バラモン教を開きますと
 聞くより妾は兩親の
 まなこ眼をぬすみ遙々と
 顯恩郷に參上り
 神の教を聞きながら
 吾子を思ひ戀人を
 慕ふ心の執着は

未だ晴れやらぬ苦しさに
高姫さまの立て給ふ

ウラナイ教に身を寄せて
朝な夕なに海山の

恩顧を受けて三五の
誠の道に入信し

黄金の玉の行方をば
尋ね彷徨ひ高山彦の

夫の後を尋ねつつ
火の國都に来て見れば

高國別の神司
高山彦と名乗らせて

住まはせ玉ひし尊さよ
神の恵の幸はひて

茲に吾子と名乗りを上げ
玉治別に導かれ

漸く海を乗り越えて
由良の港に来て見れば

思ひも寄らぬ高姫さまが
高砂島より歸りまし

互に無事を祝しつつ
思ひがけなき麻邇寶珠の

珍の神業につかはれて
聖地に歸り來りたる

此嬉しさは何時の世か
身魂の限り忘れまじ

玉治別の宣傳使
御魂の曇りし黒姫が

身を卑下すまずいつ迄も 親子の睦びいや深く
續かせ玉へ惟神 神の御前に平伏して
眞心盡して願ぎまつる あゝ惟神々々
御靈幸はへましませよ

玉治別は黒姫の後に續いて歌ひ初めたり。

思へば昔フサの國 高井ヶ嶽の山麓に
其名も高き人子の司 高依彦や高依姫の
夫婦が情に育まれ 十五の年の春までも
吾子の如く勞はりて 育て玉ひし有難さ
時しもあれや眞夜中頃 覆面頭巾の黒装束
五人の姿は表戸を 蹴やぶり座敷へ侵入し
有無を云はせず兩親を 高手や小手に縛めて

凱歌を奏して歸り往く

吾は子供の瘦力

山より高く海よりも

深き恵を蒙りし

育ての親の危難をば

眺めて居たる苦しさに

父の秘藏の守り刀

取るより早く荒男が

群に向つて斬り込めど

何條もつて耐るべき

あなたも強者隼の

爪磨澄まし小雀を

掴みし如く吾體

又もや高手に縛りつけ

山奥さして親子三人あへなくも

連れ往かれたる悲しさよ

吾は隙をば窺ひて

高井ヶ嶽の山寨を

後に見捨てて逃げ出し

父母二人を救はむと

心を千々に配る折

二人の義親は木の花の

姫の命に助けられ

此世に無事に居ますぞと

聞いたる時の嬉しさよ

高井の村に立ち歸り

高依彦や母君に

出會ひて無事を祝しつつ

暫く此處に居る中に

二人の仲に生れませる

玉をあざむく男の子

玉春別と命名し

いよいよ茲に育ての親は

誠の御子を生みしより

兩親様の許し得て

眞の父母を探らむと

フサの國より月の國

漸く越えて自凝の

島にいつしか漂ひつ

人の情に助けられ

宇都山村の春助が

子無きを幸ひ養子となり

土かい草切り稲麥を

作りて其日を暮らす中

天の眞浦や宗彦が

此處に現はれ來りまし

不思議の縁の廻り合ひ

妹のお勝を吾妻に

娶りて神の道に入り

玉治別と宣傳使

清けき御名を授けられ

三五教を遠近に

開き傳ふる折もあれ

三十五年の時津風

吹き廻り來て村肝の

心筑紫の火の國で

眞の母に廻り遇ひ 天にも昇る心地して

今日の生日を祝へども まだ氣にかかる垂乳根の

父の命は今いづこ 遇はま欲しやと朝夕に

祈る吾こそ悲しけれ あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして 一日も早く吾父に

遇はせ玉へよ天津神 國治立大御神

神素盞鳴大神の 御前に畏み願ぎまつる

あゝ惟神々々 御靈幸倍まませよ

と、母に遇うた嬉しさと、父に遇はれぬ苦しさと悲喜交々混はりたる一種異様の
聲調にて歌ひ了り、悄然として頂垂れ居たりける。

(大正一一・九・一九 舊七・二八 加藤明子録)

第二章 峰の雲（九三六）

高姫「今承はれば、實に黒姫さまも奇妙な運命を辿られたものですな。随分貴女も若い時は引手数多の花菖蒲、若い男に随分チヤホヤされたでせう。何處ともなしに床しい花の香が未だに備はつて居ますよ。オホ、、、然し乍らこんなお目出度い事は御座いませぬ。私も自分の子に會うた様に嬉しうなつて來ました。……高山彦さま、貴方も若い時に子でも生みつけて置きなされば、今頃はさぞ神様のお蔭で親子の對面が出來御愉快で御座いませうがな」

黒姫「ハイ、誠に恥かしい事で御座います。畏れ多い……神様から頂いた吾子を捨てたり、こんな罰當りの私でも神様はお許し下さいまして、斯んな嬉しい親子の對面をさして下さいました。随分彼方此方と氣儘の事をして廻り、兩親の事は左程にも思はず、夫の事や吾子の事ばかり尋ねて居りました。私の兩親も最早此世に居るか居らぬか知りませぬが、私が子に戀ひ焦れる様に私の兩親も嘸や嘸私の事を氣にかけて居られるでせう。本當に親の心と云ふものは何處まで慈愛の深

いものか分りませぬ。斯うなつて來ると兩親の身の上も案じられ、又倅の玉治別が折角母親に會うて喜んで居りますが、屹度父親の所在を知りたいと思つて居るに違ひ御座いませぬ。何事も皆私の不心得から、一人の倅までに切ない思ひをさせます。あゝ玉治別、何卒許して下さい。屹度私がお前のお父さまを草を分けても探し出し、お會はせしませうから……」

玉治別「勿體ない事を云つて下さいますな。此廣い世の中、何時まで探しても分りさうな事は御座いませぬ。神様が會はして下さらうと思召したら屹度會はして下さいますから……そんな事に心を悩まさず、一心に母子が揃うて神様の御用を勤めさして頂きませうか」

黒姫「左様で御座いますな。母子手を引き合つて神様の御用を致しませう」

東助は兩手を組み頭を頂垂れ、時々太い息を吐き、物をも言はず此光景を打看守つて居る。

高山彦は歌ひ出した。

☐ コーカス山に現はれし

おほげつひめ
大氣津姫の八王と

仕へまつりし千代彦や

よろづよひめ
萬代姫の其中に

生れし吾は珍の御子

すきま
隙間の風にも當てられず

蝶よ花よと育まれ

えいやうえいぐわ
榮耀榮華に育ちしが

松、竹、梅の宣傳使

いしこりどめ
石凝姥や高彦や

其他數多の神司

コーカス山に現はれて

言靈戦を開きてゆ

おい
老たる父母は大氣津姫の

神の命に従ひて

に
逃げ行く先はアーメニヤ

館の奥に隠れまし

かみ
ウラルの神の御教を

朝な夕なに守りつつ

よびと
世人を導き給ひけり

吾には三人の兄弟が

いと健やかに生ひ育ち

父の家をば嗣ぎまして

くら
暮し玉へど弟と

生れ出でたる吾こそは

じいうじざい
自由自在の身なりとて

夜な夜な館を抜け出し

わか
若き女と手を曳いて

都みやこを後あとにフサの國くに 逃にげ行ゆく折をりしも兩りやう人は

新井あらゐの峠たうげを越こゆる折をり 谷たにに架かけたる丸木橋まるきばし

危あやふく之これを踏ふみ外はづし 二ふたり人は千尋ちひろの谷底たにそこに

落おちて果敢あへなくなりけり かかるところへ杣人そまびとが

現あらはれ來きたりて吾身わがみをば 種々いろいろ雑多ざつたと介抱かいほうし

吾われは危あやふき生命せいめいを 助たすかりたれど吾戀わがこふる

女をんなのお里さとは影見かげみえず 深谷川ふかたにがはの激流げきりうに

流ながされたるは是非ぜひもなし 最も早はや此世このよに永ながらへて

一ひとり人暮くらすも詮せんなしと 柏井川かしはがはに架かけ渡わたす

橋はしの袂たもとに來きて見みれば 夜目よめには確しつと分わからねど

お里さとの顔かほによく似にたり 何いづれの人ひとの情なさけにて

危あやふき生命いのちを免のがれしか 不ふ思議しぎなとと擦すり寄よつて

よくよく姿すがたを眺ながむれば 女をんなはお里さとに非あらずして

色香いろか勝すぐれし眞娘まなむすめ 心こころの裡うちの曲者くせものに

取り挫がれて懊惱の

雲はいつしか晴れ渡り

再び陽氣に立ち歸り

擦れつ纏れつ顔と顔

眺めて忽ち戀の絲

搦まるままに傍の

林の中に立ち入りて

の折柄に

けたたましくも出で来る

人の足音耳につき

パツと驚き立ち別れ

雲を霞と逃げ去りぬ

吾はそれよりフサの國

彼方此方と逍遙ひつ

若やお里は現世に

生永らへて居はせぬか

飽まで探し求めむと

雲をば掴む頼りなき

詮議に月日を送りしが

今黒姫の物語

聞いて驚く胸の裡

柏井川の橋の上で

會うたる女は黒姫か

さすれば玉治別神

全く吾の珍の御子

あゝ惟神々々

神の恵は山よりも

勝れて高く海よりも

いやまし深く思はれて
感謝の涙は雨となり

降り注ぐなる今日の宵
玉治別よ黒姫よ

高山彦は汝が父ぞ
汝が昔の夫ぞや

親子の縁斯くの如
月日の如く明かに

なりたる上は今よりは
親子心を協せつつ

錦の宮の御前に
誠を捧げて朝夕に

力限りに盡くすべし
昔の罪が廻り来て

色々雑多と世の中の
憂目を忍び迷ひたる

夫婦の仲も皇神の
恵の鞭の戒めか

今は心も打ち解けて
天津御空は殊更に

彌明けく地の上は
彌清らけくなりけり

吹き來る風も今までの
悲哀の音は何處へやら

千代を祝する歡ぎ聲
小雲の流れもサヤサヤと

吾等親子の行末を
祝ふが如く聞ゆなり

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよみたまさち」

黒姫、玉治別は高山彦の物語に二度吃驚り、……あの時の青年は高山彦様であつたか……吾父であつたか……と雙方より取継り嬉し涙にかき暮れる様、實に割なく見えて居る。

高姫「黒姫さま、目出度い事が重なれば重なるものですな。お前さまも全く今迄の罪障がとれたと見えて、神様が親子の對面をさして下さつたのですよ。そして高山彦さまは露の契と云ひ乍ら、若い時の貴方のラバーしたお方、なんとまア夢に牡丹餅を喰つた様な甘い話で御座いますなア。それにつけても此高姫はまだ神様のお許しがないと見えまして、心の中に大變な悩みを持つて居ます。あゝ如何かして一時も早く、此悩みの雲が晴れ、青天白日、今日の空の様にサラリとなり度いものです。あゝ惟神靈幸倍坐世かむながらたまちはへませ」

と涙聲になつて兩手を合せ祈りゐる。

黒姫「貴女も何時かのお話の序に一寸承はりましたが、妾の様に捨兒をなされた

さうですが、貴方の様な氣丈なお方でも矢張り氣にかかりますか」

高姫 「親子の情といふものは誰しも同じ事です。年が寄れば寄る程子が戀ひしくなるものです。アア、黒姫様が元の親子夫婦の對面を遊ばしたに就いて、一入昔の事が思ひ出され、吾子に一度會ひ度なくなつて堪りませぬ。其時の夫は今は何處に如何して居られますやら……今日となつては其夫と出會つた處が、夫婦となる譯には行きませぬなれども、せめて……お前はあの時の妻であつたか、夫であつたか、子であつたか……と名乗り合つて見たう御座います」

と云ひ放つて泣き沈む。黒姫は確信あるものの如くニツコリと笑ひ乍ら、
「高姫さま、あまり迂闊して居つて貴女のお話を十分に記憶して居りませぬが、何でも貴女のお捨てになつたお子さまには、守刀に眞珠で十の字の印を入れ柄元に「東」と「高」との印をお入れになつたぢや御座いませぬでしたかな」

高姫 「ナニ、黒姫さま、そんな詳しい事を私は申上げた様な記憶はありませんが、左様の事を申上げた事が御座いますかな」

黒姫 「そのお子さまの名は金太郎とは申しませなんだか、丁度今年で私と同じ様

に三十五年になるのぢや御座いませぬか

東助の顔の色が之を聞くよりサツと變つた。高姫の顔も亦俄に變り、目は圓く

なり口先が尖つて來出した。

高姫「何とまあ、詳しい事を御存じで御座いますな。私はそこ迄お話した覺えは

御座いませぬが、如何してまあそんな詳しい事がお分りで御座いますか。これに

は何か御様子のある事だせう。何卒明らさまに仰有つて下さいませ

黒姫は歌を以てこれに答へける。

高山彦の後を追ひ 筑紫の島に立ち向ひ

建日の港を後にして 筑紫ヶ嶽の大峠

高山峠を登り行く 其頂上となりし時

傍に五人の荒男 玉公、虎公面々の

人の噂を聞きつれば 熊襲の國の神司

建日別の御息女 建能姫の夫として

譽も高き建國別の
神の命は何人の

捨てたる兒とも分らずに
三十五才の今年まで

父母兩親の所在をば
尋ね居ますと聞きしより

遙々館に立ち寄つて
夫婦の神に面會し

もしや吾子にあらぬかと
昔の來歴物語り

種々調べ見たりしに
建國別の宣らす様

吾は如何なる人の子か
未だに分らぬ悲しさに

朝な夕なに三五の
神に仕へて父母の

行方を尋ね求めつつ
其日を送る悲しさよ

汝の命は遠近と
神の教を傳へつつ

出でます身なれば父母に
もしもや會はせ給ひなば

一日も早く吾許に
知らさせ給へ幼名は

聞くも目出たき金太郎
吾身に添へたる綾錦

守袋に名を記し
守刀に眞珠にて

十字の印を描き出し 鏢元篤と眺むれば

「東」と「高」の印あり 人の情に嘔まれ

漸く成人なせしもの 誠の生みの父母が

此世に居ます事ならば 一目なりとも會ひたやと

嘆かせ給ふを聞くにつけ 此黒姫も胸迫り

名乗り上げむかと思へども いや待て暫し待て暫し

高姫様に面會し 詳しき事を更めて

承はらずは軽々に 名乗りもならずと口許へ

出かけた言葉を呑み込んで 素知らぬ顔を装ひつ

此處まで歸り來りけり まさかに汝の生みませし

御子にはあるまじさり乍ら 合點の往かぬは三年前

高姫様の物語 臃氣ながら思ひ出し

半信半疑に包まれて 名乗りも得ざりしもどかしさ

あゝ惟神々々 神の恵の幸はひて

高姫さまが愛し子に 目出度會はせ給ふべき

時こそ來れるなるべしと 何とはなしに勇ましく

心の空も晴れにけり 高姫さまよ黒姫が

此物語諾ひて お心當りのあるならば

人を遙々遣はして 今一度調め給へかし

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

玉治別 屹度建國別命は高姫様の御子息に間違ひありませんまい。如何も私はその

様な氣が致します。さうであつたならば、實に此上ない目出たい事で御座います

がな。私は久し振りで兩親に邂逅ひ、斯んな嬉しい事は御座いませぬ。高姫様も、

一度遠方なれども私が御案内致しますから、熊襲の國までお調べにお出でになつ

たら如何でせう

高姫 〇ハイ、御親切に有難う御座います

と言つたきり稍少時頭を垂れ吐息を洩らし居る。東助も亦顔色を變へ高姫の顔を

穴のあく程見詰め居たり。

(大正一一・九・一九 舊七・二八 北村隆光録)

第二章 高宮姫 (九三七)

高姫は、心の底より悔悟の色を現はし、一切の秘密を自ら暴露すべく、立つて歌を歌ひ始めたり。

三五教の宣傳使 嚴の御靈の系統で

日の出神の生宮と 今まで固執して來たが

思へば思へば恐ろしい 誠の素性を明すれば

コーカス山に現れませる ウラルの彦やウラル姫

二人の中に生れたる 吾は高宮姫命

かむすさのをのおほかみ
神素盞鳴大神の 使ひ玉へる宣傳使

まつたけうめ はじ
松竹梅を初めとし 石凝姥の東彦

たかひこ
高彦などが現はれて 言靈戦を開きてゆ

はは あ
母と現れます大氣津の 姫命は逸早く

せんすへ かへ
アーメニヤへと歸りまし 其時妾は小娘の

たかあまはら
詮術もなく暮す折 御伴の神を引つれて

さく ため
高天原のエルサレム 三五教の本城を

はな かんばせうるは
探らむ爲と往て見れば 眉目秀れし青年が

はな かんばせうるは
花の顔色麗しく 向ふの方より進み来る

ここ わらは なん
茲に妾は何となく 其青年を慕はしく

あと お
後を追はむとしたりしが 御伴の神が邪魔になり

つま これ
甘く之をばまかむとて 千思萬慮の其結果

こと かま
事を構へて追ひ散らし 木かげに見ゆる戀人を

した すす やま
慕ひて進む山の路 男は足もいと早く

いつの間にやら山蔭に

姿をかくし玉ひけり

かよわき女の足を以て

追つく術も泣き倒れ

助けてくれと呼ばはれば

戀しき人は驚いて

わが傍へスタスタと

歸り來ませる恥かしさ

これこれ旅の女中さま

只今助けを叫んだは

お前の聲ではなかつたか

訝かしさよと尋ねられ

答ふる由もないじやくり

「ハイハイ誠に有難う

あなたのお蔭で悪者は

雲を霞と逃げました」

「何卒用心なされませ

女の危い一人旅」

「あなたも若い身を以て

此山路を只一人

お行きなさるは如何しても

危険が體に迫りませう

なる事ならば妾を

何卒連れて此坂を

向ふへ越えて下さい」と

二つの睫毛に唾をつけ

泣き眞似すれば戀人は

稍同情の念に暮れ

「ホンに危ない山路よ

私も貴女も一人旅

願うてもなき道づれだ

そんなら一緒に行きませう」と

答へてくれた嬉しさよ

人も通らぬ山路を

若き血汐に燃え立つる

二人の男女が手を引いて

嬉しく楽しく話しつつ

貴の聖地へ行く途中

いつとはなしに四つの目が

ピタリと合うた戀鏡

燃ゆる思ひが如何にして

互の心に映らめや

忽ち妥協は成立し

水も洩らさぬ仲となり

黄金山下に身を忍び

庵を結びて暮す中

日に夜に吾身が重くなり

月を重ねて腹太り

生れおとした男の子

名も金太郎と與へつつ

二月三月暮す中

三五教の宣傳使

北照神が現はれて

信仰調べを始めかけ

戀しき人は筑紫國

都に居ます神人の

尊たふとき御み子こと見み破やぶられ
親おやの恥はぢをば曝さらすのは

辛つらいと云いつてあわて出だし
コリヤ高たか姫ひめよ高たか姫ひめよ

聞きけばお前まへはウラル教けう
大おほ氣げ津つ姫ひめの御み腹はらより

生うまれ出いでたる御み子こなれば
如どう何なして永ながく添そはれうぞ

神かみの咎とがめも恐おそろしい
二ふた人たりの縁えにしはこれ迄まで

諦あきらめここで別わかれよかと
藪やぶから棒ぼうの言ことの葉はに

妾わらはは心こころも轉てん倒たふし
泣ないつくどいつ頼たのめ共ども

袖そでふり切きつてスタスタと
暗やみに紛まぎれて逃にげましぬ

後あとに残のこつた一ひと振ふりの
守まもり刀がたなに「東ひがし」の字じ

「高たか」の印しるしを刻きざみたる
劍つるぎを記き念ねんと残のこしおき

雲くもを霞かすみと消きえ失うせし
男をとこの無む情じやうを歎かこちつつ

幼をさな兒ご抱かかへし女をんなの身み
いかに詮せん術すべなき儘ままに

守まもり刀がたなに綾あや錦にしき
守まもり袋ぶくろに金きん太たら郎らうと

名なをば書かき添そへ四よつ辻つじに
不ふ憫びん乍ながらも捨すて子ごして

なくなく此處を立別れ

メソポタミヤの顯恩郷

バラモン教を探らむと

尋ね詣でて暫くは

神の教を聞きつるが

夫の君の守りたる

三五教を守りなば

神の恵の幸はひて

戀しき夫に何時の日か

巡り合ふ世もあるならむ

三五教に若くなしと

系統の身魂と詐りて

フサの御國に居を構へ

教を開く折柄に

變性女子の行方が

心に合はぬ所より

ウラルの教と三五の

教を合はしてウライナイ教と

大看板を掲げつつ

北山村に立籠り

教を開き居たりける

それより進んで自凝の

神の島なる中心地

由良の港に程近き

魔窟ヶ原に黒姫を

遣はし教の司とし

バラモン教の大棟梁

鬼雲彦や三五の

教の道を根底より
改良せむといら立ちて

心を千々に碎きしが
神素盞鳴大神の

仁慈無限の御心が
身に浸みわたり三五の

誠の道に入信し
教司に任けられて

茲まで仕へ來りけり
思へば思へば罪深き

われは此世の曲津神
今まで積み來し塵芥

清むる由もないじやくり
心に恥づる折柄に

黒姫さまの物語
筑紫の島の熊襲國

建日の館の神司
建國別の身の上を

思ひ廻せば紛れなき
吾子に相違あらざらむ

あゝ惟神々々
神の恵の深くして

錦の宮の聖場で
いとしき吾子の所在をば

探り得たりし嬉しさよ
さはさり乍ら其時の

夫の命は今何處
此世に生きていますなら

定めて吾子の行先を 行く年波と諸共に

思ひ出して朝夕に 心を痛めますならむ

あゝ惟神々々 國治立大御神

神素盞鳴大御神 金勝要大御神

一日も早く親と子の 憂き瀬にさまよふ憐れさを

救はせ玉へ惟神 神の御前に高姫が

慎み敬ひ願ぎまつる あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と力なげに歌ひ、恥かしげに其場に俯く。

黒姫は少しく笑を含み、いそいそとして、

高姫さま、あなたの素性を承はりました。何とマア、時節といふものは恐ろし

いもので御座いますなア。私は今まで稚姫君尊様の孫さま位に信じて居りました

が、マア恐ろしいウラル彦、ウラル姫の腹から生れなさつた貴女とは、夢のやう

で御座いますワ。さうしてマア随分と私と同じ様に、若い時は勝手氣儘を遊ばしたと見えますなア。互に人が悪いと思へば皆吾が悪いのだと、神様が仰有います。が、ようマア屑人間ばかり是れだけ引よせて、大切な御用をさして下さつたものです。之を思へば本當に大慈大悲の神様の御心が有難くて堪りませぬ。神素盞鳴大神様、國武彦命様は申すに及ばず、言依別の教主様も確に御存じであつた筈、何時やら言依別神さまが私に向ひ、高姫さまは決して嚴の身魂の系統ではない、あれは大氣津姫の腹から生れた女だと仰有つた事が御座いました。その時に私はドハイカラの教主が譯も知らずに、何を言ふのだ、人の悪口を云ふにも程があると思ひ、腹が立ち、それから一層あなたを思ふやうになり、言依別命が癩に障つてなりませなんだ。誹る勿れと云ふ律法を守らねばならぬ、併も教主とあるものが、何といふ情ないことを仰有るのか、ヤツパリ惡の靈の守護に相違あるまいと、心の中に蔑んで居りましたが、今思へばホんに言依別命様も偉いお方だ。どんな惡の靈でも、魂を研いて改心させて結構な御用に使うてやらうとの思召、私は有難うて、今更の如く涙が止まりませぬワイナ、オンオンオン」

と聲を放つて泣き立てる。一同は黒姫の話聞いて、今更の如く大神を初め、言依別命の廣き心に感歎するのみであつた。

「そんな事が御座いましたか。私も此れでスツパリと改心を致します。生れ赤子になつて、今後は何事も英子姫様、東助様の指圖に従ひ、御用の端に使つて頂きませう。かやうな身魂の悪い素性の人間と知り乍ら、麻邇寶珠の御神業迄さして下さつた、其御高恩は何時になつても忘れませぬ。ホンに今まで言依別命の美はしき優しき御心を知らなんだか、エ、残念な、定めて高姫ははしたない女だと、心の奥で笑つてゐられたであらう。實に情ない事で御座います。斯様な母親があつたかと、倅が聞いたたら、どれだけ悔むでせう。又私の若い時の掛合の男が此世に居つて、私の脱線振りを聞いたなら、さぞやさぞ愛想をつかして、折角廻り會うても、逃げて了はれるでせう。ホンに私には矢張惡靈が守護してゐたに違ありません。あゝ神様、どうぞ赦して下さいませ。誠に今日迄は濟まぬ事を致しました。今度こそ本當に改心を致します。今までは改心々々と申して、掛値を申上げて居りました」

秋彦あきひこは思おもはず吹ふき出だし、

秋彦あきひこ「ウツフ、高姫たかひめさま、改心かいしんの掛値かけねといふのはどんな事ことですか、私わたしには分わかりませぬがなア」

高姫たかひめ「秋彦あきひこ、どうぞ堪忍かんにんして下さい。恥はづかしくて何なんにも言いへませぬから、戀こひしい吾子わがこにさへも會あふのが恥はづかしくなつて來きたのだから……」

秋彦あきひこ「さうすると、今日けふのあなたあなたの改心かいしんは生中きなかも掛値かけねのない、ネットプライスの正札しやうふだつき付つの改心かいしんですか、オツホ、」

東助とうすけ「コレ秋彦あきひこ、お黙だまりなさい。此この愁歎場しゅうたんばが俄にはかに晴はれやかになつては、薩張興さつぱりきやうがさめて了しまふぢやないか。サア是これからこの東助とうすけが罪亡つみほろぼしに、一ひとつ愁歎場しゅうたんばをお聞ききに達たつしようアツハ、」

(大正一・九・一九 舊七・二八 松村眞澄録)

出^だした。
東助は何^{なん}と思^{おも}うてか、ツト立^たち上^あり、音吐朗々^{おんとらうらう}として四邊^{あたり}を響^{ひび}かせながら歌^{うた}ひ

生^{しやうじやひつめつ}者^{しやぢやうり}必滅^{めつ}會^{かい}者^{しやぢやうり}定^{ぢやうり}離^り

廻^{めぐ}る浮世^{うきよ}と云^いひながら

怪^{あや}しき事^{こと}のあるものか

河^{かは}の流れ^{なが}と人^{ひと}の身^みの

行^{ゆく}末^{すゑ}こそは不思議^{ふしぎ}なれ

筑紫^{つくし}の島^{しま}の筑紫^{つくし}國^{くに}

白^{しら}日^ひの別^{わけ}の守^{まも}りたる

珍^{うづ}の館^{やかた}を預^{あづか}りて

數^{あまた}多^たの國^{くに}人^{ひと}惠^{めぐ}みつつ

治^{をさ}め玉^{たま}ひし高^{たか}照^{てる}彦^{ひこ}の

貴^{つづ}の命^{みこと}の神^{かむつかさ}司^{つかさ}

父^{ちち}は國^{くに}治^{はる}立^{たち}神^{のかみ}

遠^{とほ}き神^{かみ}代^よの昔^{むかし}より

豐^{とよ}葦^{あし}原^{はら}の瑞^{みづ}穗^ほ國^{くに}

完^{うま}美^らに委^{つばら}曲^らに造^{つく}りまし

治^{をさ}め玉^{たま}ひし皇^{すめ}神^{かみ}の

忘^{わす}れ片^が身^{たみ}の吾^{わが}父^{ちち}は

八^や十^{そく}熊^{くま}別^{わけ}と名^なを變^かへて

此^{この}世^よを忍^{しの}び玉^{たま}ひしが

日^ひの出^で神^{かみ}や祝^は姫^{ひめ}

神^{かみ}の司^{つかさ}の宣^{せん}傳^{でん}使^し

面^{つら}那^な藝^ぎ彦^{ひこ}と諸^{もろ}共^{とも}に

豊の御國に現れまして

高照彦の吾父を

見出し玉ひ筑紫國

國の司とまけ玉ふ

高照彦の珍の子と

生れ出でたる三人の

其一人となり出でし

吾は東野別神

父の御命を蒙りて

大海原を渡り越え

エデンの川を溯り

神の都のエルサレム

黄金山下に進まむと

來る折しも麗しき

孱弱き女の一人旅

見捨てて進む折柄に

俄に聞ゆる叫び聲

如何なる曲の現はれて

人を虐げ苦しむる

見遁しならじ助けむと

後へかへして叫び聲

頼りに尋ね寄り見れば

以前の娘は地に伏して

思はぬ惡魔に出會し

危き處を汝が君に

救はれたりと喜びて

若き男女は人通り

稀なる山路上り行く

山の色さへ青春の
血の湧き充てる
兩人は

何かはもつて耐るべき
結びの神の許しなく

思はぬ綱に耽溺し
子迄なしたる折柄に

北光彦の宣傳使
信仰調べを標榜し

吾身の素性を尋ねむと
吾庵をさして入り来る

父の使命を忘却し
罪を重ねし吾なれば

女は不憫と思へども
見捨てて庵を遁走し

それより進んでフサの國
月の國をば横斷し

西藏暹羅や唐土の
山河を渡り荒野越え

進み進みて自凝の
島へと渡りて來る折

風に船をば破られて
命危き折柄に

天の恵か地の恩か
翼の生えし神人が

吾身をムズと引き掴み
大空高く翔りつつ

命の瀬戸の海原に
浮かびて廣き淡路島

あかつきやま さんちやう
 曉山の山頂に 聳り立ちたる松の上に
 つゆ 不思議さよ 淡路の國の島人は
 連れ行かれたる 吾の姿を打仰ぎ
 まつ 松の梢に佇める 敬ひ迎へて村肝の
 てん 天より下りし神人と
 こころ 心の底より嬉しがり 淡路の島の酋長と
 まつり まつり上げられ此島に 淑女の譽彌高き
 おゆり 百合を選んで妻となし 名も東助と改めて
 つきひ 月日を送り來りしが 三五教の大神の
 めぐみ 恵の綱に曳かされて 今は聖地に出張し
 ひでこ 英子の姫に從ひて 教司となりましぬ
 いまたかひめ 今高姫が物語 黒姫さまが筑紫島
 みやげばなし 土産話に聞き見れば 建日の館の神司
 たけくにわけ 建國別は紛れなき 高宮姫との其中に
 うま 生まれ出でたる御子ならむ あゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて

吾子の行方は明かに

なりて來れど其時の

高宮姫の艶姿

變れば變るものだなア

今迄幾度高姫と

顔をば合はせし事あるも

三十五年の其昔

月日の關の高くして

寄る年浪に顔色も

太く變りてありければ

昔の夫婦と云ふ事は

今の今迄知らざりき

さはさり乍ら東助は

昔の妻に遇へばとて

お百合の方のある身なり

如何に縁は深くとも

もはや詮術なきものと

諦め玉へ高姫よ

若き心の血にもえて

思はず知らず罪作り

いとしき吾子をあちこちと

迷はせたるこそ悲しけれ

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして

高姫司はいふも更

建國別の吾倅

千代萬代も末長く

いのちなが 命長らへ皇神の
すめかみ 大道に盡させ玉へかし
むかし 昔の恥を神の前
かみまへ 包まずかくさず表白し
くわいご 悔悟の言靈宣りあげて
ことたまの この行先は東助の
ふか 深き罪をば許しまし
つみ 尊き神の御道に
すす 進ませ玉へ惟神
かみ 神の御前に願ぎまつる
かみ 神の御前に願ぎまつる
ね 神の御前に願ぎまつる

うた 歌ひ終り悠然として座に就きぬ。

たかひめ 高姫は初めて、東助の三十五年前の戀男たりし事を悟り、遠女の恥かし氣に顔を赤らめ、少しばし俯き居たりしが、思ひ切つたやうに東助に向ひ、
あなた 貴方は其時の優しい男、東野別神様で御座いましたか。存ぜぬ事とて色々
ごぶれい と御無禮を致しました。嘸や嘸私の自我心の強いには愛想が盡きたで御座います。淡路島の遭難の時と云ひ、家島での脱線振りと云ひ、嘸々はしたない女だ
あはぢしま せう。とお笑ひで御座います。迂闊とこんな昔話を申上げて、其時の女は此高姫であ
おも ったかかと、さげすまれるかと思へば、あゝ昔のままに分らずに居つた方が互によ

かつたで御座いませうに、是もやつぱり神様から昔の泥を吐かされたので御座いませう。何卒お見捨てなく元の通り可愛がつて下さいませ」

と東助の傍近く進みよつて手を握らむとするを、東助は儼然として突きのけはねのけ威儀を正し、言葉も莊重に高姫に向ひ、

「高姫さま、ちとお慎みなさいませ。昔は昔、今は今、折角忘れて居た百八煩惱を再びここに繰返すやうな事があつては、神様に對し申譯が立ちますまいぞ。貴方も立派な夫のある身の上、私も御存じの通り淡路の島の酋長でお百合と云ふ女房もある身の上、況して三五教の總務を勤むる以上は、怪我にも左様な事は出来ずまい。此後は他人よりも一層嚴重に、御交際を願ひませう。併し乍ら熊襲の國の神司、建國別は私と貴方の間に生れた倅である事だけは認めて置ませう。貴女も其倅に會ひ度くば御自由にお會ひになつても宜しからう。敢て私は其處迄は干渉致しませぬ。然し此東助としては何程戀しい吾子と雖も、會ふ譯には参りませぬ。先づ第一に英子姫様にお願ひ申し、玉照彦、玉照姫の神司に許しを受け上、現在の妻お百合の方に事情を打ち明け、お百合の許しを得た上、それも折

があつたらら面會するかも分りませぬ。どうぞ今日限り昔の夢は忘れて頂き、此東助は此後貴女に對し、一層嚴格の態度を取りますから、どうぞ悪く思つて下さいますな。皆様の前で私の態度を公言して置きます」

と矢でも鐵砲でもいつかな動かぬ其顔色に高姫は縮み上り、顔をも得あげず涙と共に泣き伏した。

高姫は力なげに詠ふ。

「相見ての今の心に比ぶれば

昔戀しくなりにけるかな」

東助「古を思ひ浮かべてくやむより

開く五六七の御代を樂しめ

親となり子と生るるも神の代の

深き縁ふかえにしと知るしや知らずや
三十みそあまり五いつつの年としを經廻へめぐりて
ここに吾子わがこの頼たよりを聞きくかな
』

高山彦たかやまひこ 『世よの中なかの因果いんぐわは廻めぐる小車をぐるまの

片輪車かたわぐるまぞあはれなりけり

さりながら吾われも昔むかしの罪つみの子こよ

救すくはせ玉たまへ三五あななひの神かみ』

黒姫くろひめ 『海山うみやまを越こえて夫をつとを尋たづねつつ

わがいとし子こに會あひし嬉うれしさ
』

玉治別たまはるわけ 吾われを生うみし父ちちと母ははとをし知らずして
あだに過すごせし身みの愚おろかさよ

秋彦あきひこ 三あな五なの神かみの惠めぐみのいふか深く
吾わが子この行ゆく方へ悟さとる今日けふかな

友彦ともひこ 親おやと子こは切きつても切きれぬ神かみ々がみの
縁えにしの網つなに結むすばれにけむ

テールス姫ひめ 桶をけ伏ふせの山やまの麓ふもとの神かみ屋やし敷しき
目め出で度たき事ことを聞きく今こ宵よひかな

夏彦なつひこ 居ゐながらに吾子わがこの行方ゆくへまつぶさに

知しり玉たまひたる君きみぞ尊たふとき

佐田彦さだひこ 古いにしへの夫をととを悟さとり妻つまを知しり

吾子わがこに遇あひし人ひとぞ目め出で度たし

紫姬むらさききみ 今日けふこそは神かみの惠めぐみの花はな開ひらき

心こころも薰かをる秋あきの大空おほぞら

お玉たま 玉たま治はる別わけ神かみの司つかさは父ちちは母ははに

遇あひて嬉うれしく思おぼ召しめすらむ

龍國別たつくにわけ「たらちねの親おやに遇あうたる嬉うれしさは
吾われも一度いちどは味あぢはひにけり」

鷹依姫たかよりひめ「黒姫くろひめや高姫たかひめつかさぞ
司つかさ無なやさぞ

嬉うれしがるらむ御子みこを悟さとりて

惟かむながら神かみの惠めぐみの幸さちはひて

今日けふは嬉うれしき夕ゆふなるかな」

常彦つねひこ、波留彦はるひこ、孫公まごこう、芳公よしこう、房公ふさこう其外そのほかの祝歌しゅくかは數限かずかぎりなく詠よまれたれども、あ
まりくどくどしければ、省略しょうりゃくする事こととなしぬ。高姫たかひめは此後このち如何いかなる活動くわつどうをなすで
あらうか。

(大正一一・九・一九 舊七・二八 加藤明子録)

第二四章 春秋（九三九）

錦の宮の偏邊り總務館の奥の間に、東助は佐田彦に茶を汲ませ乍ら脇息に凭たれ、深き思案に沈むものの如くであつた。此時表戸をガラリと引き開け出て來たのは秋彦である。

秋彦「モシモシ總務様、英子姫様が一寸お目にかかり度いと仰せになりますから何卒お越し下さいませ。紫姫様とお二人が待つて居られます」

東助「ヤアお前は秋彦、それは御苦勞だつたナア。それなら直に参りませう……佐田彦後を頼むぞ」

と云ひ捨て秋彦と共に教主館に禮服を整へ進み入る。英子姫、紫姫は東助の來るを今や遅しと待ちつつあつた。

東助「英子姫様、お使を下さいまして有難う御座います。東助只今参りまして御座います」

紫姫は欣々として出で迎へ、

紫姫「御苦勞様で御座いました。何卒奥へお通り下さいませ」

と慇懃に挨拶し乍ら奥へ連れて行く。

英子姫「總務さま、よく来て下さいました。只今玉照彦様、玉照姫様の御命令が

下りましたので、貴方にお傳へ致さねばならぬ事が出来ました。早速お越し下さ

いまして満足に思ひます」

東助はスポツコな口調で、

「教主様、何か急用でも起りましたか」

英子姫「はい、別に大した急用でも御座いませぬが二柱の神司のお言葉には、貴

方はこれより秋彦を従へ、フサの國の齋苑の館へ急行して頂かねばなりません。

御用の趣は今日の處では分りませぬが、何でも素盞鳴尊様が貴方に對し強つての

御用があるさうで御座いますから、何卒一日も早く御出立を願ひます。就いては

東助様、貴方の御子様の所在が分つたさうで御座いますナ、そして高………」

と云ひかけて俄に口を噤み、

「高砂島とやら筑紫島にお在で御座いますとの事を承はりましたが、實にお目

出度う御座います。然るに貴方は總務の役目を重んじ遊ばし三十五年前の吾子にも會はないとか仰せられたとかで、玉照彦、玉照姫様は大變に感心をして居られました。人は云ふも更なり、禽獸の端に至るまで吾子を戀しく思はないものは御座いますまい。お見上げ申したお心と云つて、二柱様が非常に褒めて居られましてたぞえ」

東助「いやもうお恥かしい事で御座います。合はず顔も御座いませぬ。今迄雪隠で饅頭を喰た様な顔して居りましたが、斯んな事がパツとしました以上、最早總務の席に留まつて居る譯には参りませぬ。何とかして總務を御辭退申し度いと今日も今日とて思案に暮れて居りました處へ、秋彦さまのお使、取るものも取敢ずお伺ひ致しました次第で御座います。就ては仰せに従ひ一時も早く聖地をさり、大神様のお指圖に従ひ、フサの國の齋苑館に急ぎませう」

英子姫「早速の御承知有難う御座います。二柱の神司様も嘸御満足に思召すで御座いませう。然らば道中お仕合せよく……遠方ですから何卒お氣をつけてお出で下さいませ……これ秋彦、お前も御氣の毒ですが總務さまのお伴をしてフサの國

へ行て来て下さいや」

秋彦「願うてもなき御命令、こんな嬉しい事は御座いませぬ。又もや大神様に親しく御面會が叶ふかと思へば、何とも云へぬ心持で御座います。能うマア澤山の幹部が御座いますのに、私如きを選んで下さいました。これと云ふも貴女様のお引立、厚く御禮を申し上げます」

英子姫「左様なれば機嫌よう行て来て下さいませ」

東助「然らば玉照彦様、玉照姫様にお暇を申上げて参りませう」

英子姫「今錦の宮の八尋殿へお越し下されば、お二柱は先に神前にてお待ち受けて

御座いますから私と直に八尋殿に参りませう」

東助「左様なればお供をさして頂きますせう」

と云ひ乍ら、紫姫、秋彦諸共英子姫の後に従ひ八尋殿に上り行く。

八尋殿正面の高座には玉照彦、玉照姫の二柱莞爾として四人の来るを待たせ給ひつつあつた。これより玉照彦、玉照姫の神司を初め英子姫、紫姫、東助、秋彦は神前近く進み入り、大神に祈願を凝らし長途の無事を祈りたる上、二柱の神司

は手づから東助、秋彦に神酒を賜ひ乍ら、

玉照彦「東助殿、何卒御無事で……」

玉照姫「御神業に御奉仕なさるやう……」

英子姫「神かけて祈ります」

紫姫「何卒早く御用を済ませ、御無事にお歸り遊ばす日をお待ち申して居ります」

東助は神前にて歌ふ。

「二柱神の司の御言もて

齋苑の館に行くぞ嬉しき

素盞鳴神尊の神館

指して行く身ぞ樂しかりけり

いざさらば錦の宮を立ち出でて

大海原を越えて進まむ

諸々の教司や信徒に

別わかれて吾われは遠とほく行ゆくなり
□

英ひでこひめ子ひめ姫ひめ □ 鳥とりが鳴なく東あづまの野わけ別わけの神かむつかさ司か

幸さちあれかすと吾われは祈いのらむ
□

東とうすけ助すけ □ 古いにしへの吾わが名なを如いか何かに知しらすらむ

實げに恥はづかしき罪つみの身みの上うへ
□

英ひでこひめ子ひめ姫ひめ □ 此この頃ごろのしるべ無なしとも大おほかみ神かみに

由ゆかり緒かりある人ひと雄を々をしかりけり
□

紫姫むらさきひめ 東別神命あづまわけかみのみことの草枕くさまくら

旅たびを思おもひて吾われは嬉うれしき

秋彦あきひこの神かみの司つかさよ何處どこまでも

心こころ注そそぎて御供みともに仕つかへよ

秋彦あきひこ 『いざさらば吾われは聖地せいちを立たち出いでて

東野別あづまのわけの供ともに仕つかへむ

玉照彦たまてるひこ 『千早ちはやぶ振ぶる神かみの惠めぐみの深ふかければ

大海原おほうなばらもつつむ事ことなし

玉照姫たまてるひめ 靈幸たまちはふ神かみの恵めぐみにやすやすと

大海原おほうなばらを渡り行け君きみ」

東助とうすけ 有難ありがたし神かみの御言みことを蒙かかぶりて

進すすみ行ゆかなむ神かみの御許みもとへ」

と互たがひに歌うたを取り交かはし乍ながら、喜よろこび勇いさんで旅装りよさうを整ととのへ、此度このたびは路みちを南みなみにとり、明石あかしの港みなとより淡路島あはぢしまの吾館わがやかたに立たちより、お百合ゆりの方に暫しばし暇いとまを告つげ、秋彦あきひこ外吾家ほかわがやの家の子こ二三にさんを伴ともなひ波なみの上うへを迂すべつて月日つきひを重かさね、フサの國くにのタルの港みなとに上陸じやうりくし、ウブスナ山やまの齋苑館いそやかたを指さして進すすみ行ゆく事こととなつた。

これは英子姫ひでこひめの慈悲心じひしんによつて東助とうすけの立場たちばを慮おもんばかり、フサの都みやこに急用きふようありとて差さし遣つかはしなば、神素盞かむすさの鳴大神のおほかみは喜よろこび給たまひて片腕かたうでとなし給たまひ、且かつ齋苑いその館やかたへ參詣まゐまうで來くる建日館たけひやかたの建國別たけくにわけ、建能姫たけのひめに期きせずして面會めんくわいせしめむとの計はからひであつた。

さうして東助の聖地をさりし後は龍國別總務となりて聖地を守る事となりける。

東助の聖地を去りし事を夢にも知らぬ高姫は、夏彦の使によつて教主英子姫の館に出頭した。

高姫「お早う御座います。今朝は夏彦さまを以てお招き下さいまして有難う御座います。何か變つた御用でも出来たので御座いますかな」

英子姫「それは能くこそ御入出下さいました。玉照彦、玉照姫様の御命令で御座います。貴女様は御苦勞乍ら、これから暫く生田の森へ行つて御守護を願はねばなりません。さうして東助様は今フサの國へお使ひにお出でになりましたから、淡路島の方面も守つて頂かねばなりません」

高姫「ハイ、畏まりました御座います。御命令とあれば何處へなりとも参ります。さうして總務様はフサの國へ何時お出になりましたか」

英子姫「ハイ、昨日の夕方此處を立たれました」

高姫はサツと顔の色を變へた。されど素知らぬ顔をよそほひ、

「ア、左様で御座いましたか。遠方へ御苦勞で御座いますな」

英子姫 「此世の中は何事も神様にお任せするより仕方はありません。何程人間が

あせつても成る様にほか成りませぬからな」

高姫 「生田の森には玉能姫、國玉別、駒彦が居られるぢやございませぬか」

英子姫 「ハイ、彼處には琉と球との寶玉が納まり、國玉別夫婦が守つて居ります

が、神界の都合に依つて球の玉を紀の國の離れ島へ納めに行かねばなりません。

就ては生田の森に琉の寶玉を祭り、御守護を致さねばならないので御座います。

此御守護は高姫様にお願ひ致さねばならないのですから、御苦勞乍ら佐田彦と共

に御出張を願ひます。貴女がお出になれば國玉別、玉能姫は待ち受けて居る事に

なつて居ますから……」

高姫 「願うてもなき有難き御命令、謹んでお受けを致します」

と俄に欣々とし袖を羽ばたきし乍ら立上り、

高姫 「サア、佐田彦、お前も結構だよ、早く準備なさいませ。愚圖々々して居る

と東助さまが……否々國玉別さまがお待ち兼ねですから……」

と慌あわてて立たち出いでむとする。

英子ひでこ姫ひめ「一寸ちよつとお待ち下くださいませ。御神前ごしんぜんにて道中だうちうの御無事ごぶじを祈いのりし上御神酒うへおみきを頂いたいて御出下おいでくださいませ。東助様とうすけさまも御神酒おみきを頂いたき秋彦あきひこを連つれて生田いくたの森もりをさして行ゆかれました」

高姫たかひめ「ハイ、有難ありがたう。何を云いうても内地ないちの事ことで御座ございますから、神界しんかいの御用ごよう一刻いつこくの猶豫いうよも出来できませぬ。何卒どうぞ貴女あなた代かはつて御祈願ごきぐわんして下ください……コレ佐田彦さだひこ、早はやく立た

ち上あがりなさらぬか」

と英子ひでこ姫ひめの言葉ことばも碌々ろくろく耳みみにも入いれず慌あわてふためき内心ないしんは……生田いくたの森もりに東助とうすけが泊とまつて居ゐるだらうから愚圖ぐづ々々ぐづしてはフサの國くにへ行ゆかれた後の祭まつり、今いま一言ひとこと云いつても見みたい、會あうても見み度たい……と云いふ心がムラムラと起おこりし爲ため、氣きが氣きでなく慌あわて出だして、時ときを移うつさず旅装りよさうを整ととのへ、須知山峠しゅちやまたうげを踏ふみ越こえ、足あしを早はやめて生田いくたの森もりへと急いそぎ行ゆく。

(大正一一・九・一九 舊七・二八 北村隆光録)

第二十五章 琉の玉〔九四〇〕

東助は秋彦と共に生田の森の若彦（今は國玉別）の館に翌日の夜明け頃、一寸立寄つて見た。昔は人は一夜の中に五十里や八十里は平氣で跋渉したものである。

東助「國玉別さまは居られますかなア」

と訪ふ聲に駒彦はあわてて飛び出し、

駒彦「コレハコレハ總務さまで御座いますか。……ヤアお前は秋彦、久振りだつ

たなあ」

秋彦「ウン」

東助「夫婦は居られるかなア」

と重ねて問へば駒彦は、

駒彦「ハイ、今朝のお禮を濟ませ、夫婦連れにて臆て東助様が見えるだらうから、

それ迄に布引の瀧へ水垢離を取りに往つて来るから、一寸待つてみて貰へとの命

令で御座いました。どうぞ暫く御休息下さいませ。やがてお歸りになるでせうか

ら………

東助「別に用もないのだから、夫婦が歸られたら、東助がフサの國の齋苑の館へ御神務を帯びて行く途中、一寸訪問したと傳へておいてくれ。神様の御用は一刻

も猶豫は出来ないから………

と云ひすて、早くも此場をスタスタと立去りにける。秋彦も兄の駒彦に折角會ひ乍ら、碌々に詞も交し得ざる本意なさに、後ふり返りふり返り名残を惜しみつつ、東助の後に従つて明石の港を指して進み行く。

後に駒彦は雙手を組み、

駒彦「あゝ何としたすげない人だらう。いつも朴訥な東助さまだと聞いて居つたが、コリヤ又餘り愛想がなさすぎる。國玉別夫婦も夫婦だ、何故こんな時に布引の瀧なんかへ行くのだらう。行きたけりやモ少し早く往つて、早く歸つて來れば良いのに、此頃は玉能姫が膨れたとか、ふくれぬとか、何とか彼とか云つて、小言ばかり仰有るものだから、女房に甘い國公も、夜分は碌々によう寝ないと見えて、朝寢をするのだ。それだから斯んなことが出來て來るのだ。エ、まあまあな

んでこれ程遅いのだろ。これから一走り駆け出せば、秋彦に會はれぬ事はないが、又不在にしておいては、おれの役がすまぬなり、困った事が出来て来た。これだから若夫婦の世話はするものぢやないと人が言ふのだ。東助さまも大方早く淡路島へ立寄つて女房のお百合に會ひ、一分間でもいぢやつかうと思つて、倉皇として駆け出したのだらう。ヤツパリ夫婦といふものは互に戀しいものと見えるワイ。おれも早く修行をして結構な女房を持ち、家庭を作つて、……コレ駒彦……イヤ女房……と意茶ついて見たいものだ。あゝ辛氣臭い、男同志の兄弟にさへ碌々話も出来ぬやうな詰らぬことがあるものか」

と呟いてゐる。そこへ歸つて来たのは國玉別、玉能姫の兩人であつた。

駒彦「コレ國さま、玉さま、何をグズグズしてゐるのだ。とうとう東助が愛想をつかして歸つて了ひました。秋彦までが……」

國玉別「東助が歸つたとは、誰の事だ」

駒彦「誰のこともあつたものか。國玉別さま、玉能姫さま、よい加減にしておきなさい。聖地の總務の東助さまがここへ一寸お寄りになり、お前さま等夫婦の不

在を見て、何とマア仲の良い夫婦ぢやなア……と思はれたか、思はれぬか、そりや知らぬが、どうぞ宜しうと云つて、トツトと歸つて行かれました。秋彦までが、折角兄弟に對面し乍ら、ロクに私に詞も交さず、明石の港まで行つて了つたのですよ。まだ半時許り前だから、私はこれから追つかけて、弟にモウ一目會うて來ます。どうぞお前さま等夫婦は此處に仲好うしてゐて下さい。何か傳言があるなら申上げますから……」

玉能姫「それはそれは誠に不都合な事で御座いましたなア……國玉別さま如何致しませうか」

國玉別「後追つかけてでも行かうものなら、東助様の氣性としてどんなに怒られるか知れたものぢやない。いつそ駒彦に往つて貰はう。……コレ駒彦、國玉別夫婦が誠にすまぬことで御座いましたとお詫をしてゐたと、是だけ言つてくれ。其外のことは何にも言はぬが宜しいぞ」

駒彦「ヨシ合點だ！」

といひ乍ら尻ひつからげ、生田の森の中に姿をかくした限り日の暮れ過まで歸つ

て來なかつた。

其日の暮頃、高姫は佐田彦と共に慌ただしくやつて來た。

高姫「モシモシ國玉別さま、私は高姫で御座います。神様の御命令に依つて、生田の森の守護職となり、はるばると出て來ました。お前さまは此事は疾づくに御存じでせうなア」

と門口から出しぬけに喚いてゐる。玉能姫は此聲を聞くよりあわただしく表に飛び出し、

玉能姫「これはこれは高姫様、能うこそいらせられました。サアお這入り下さいませ。貴女の此所へお越しになることは、二三日以前より、錦の宮から通知が御座いました、其用意の爲にいろいろ道具の取片付も致し、今日は名残に布引の瀧へ襖に行つて参りました。サア今日からは貴女は此館の主人、どうぞ御遠慮なく奥へお通り下さいませ」

高姫「ハイ有難う」

と云ひ乍ら、何となくそはそはしい様子で、そこらあたりをキヨロキヨロと見ま

はしつづ、言ひ憎さうに、モチモチし乍ら、

「あの……東助さまはここへ御立寄りにはなりませんんだかなア」

玉能姫「ハイ、今朝早々お尋ね下さった相で御座いますが、折あしく布引の瀧へ

夫婦の者が水行に参り、不在中だつたものですから、門の鬨も跨げずに、秋彦と

一緒にお歸りなつたといふことです。大方今頃は淡路島の吾館へでもお立寄りに

なつて、今晚はゆつくりお休み遊ばし、明日更めてお出でになるでせう」

高姫「ヤアそりや大變だ。如何しても斯うしても東助さまに一目お目にかかり、

一言恨みいはねばなりません。イヤ一言御禮をいはねばならないのです。コレ國

玉別さま、玉能姫さま、御苦勞だが、一ツ舟を急いで出して下さい。そして淡路

島まで送り届けて下さい。玉能姫様は舟を操るのが大變お上手だから……」

國玉別「又貴方は俄に東助様をお慕ひ遊ばすのですな。何か深い事情が御座いま

すか」

高姫「事情がなうて何としよう。私の戀しい戀しい昔の夫で御座んすワイナ。サ

ア早く舟を出して下さいなア。コレ玉能姫さま、一生の願ひぢや、早う出して下

さらぬと間に合ひませぬ」

玉能姫「モシ國玉別様、舟を出して送つて上げませうかなア」

國玉別「折角のお頼みだから、送つて上げたいが、昔の戀男だなんて聞く上は、

ウツカリ送る譯にも行くまい。東助さまの御心も分らず、ウツカリ送つて行かう

ものなら、それこそ何んなお目玉を頂戴するか分るまいぞや。いつもの東助様な

らば、ゆつくりと吾家に休んで行つて下さるのだけれど、鬨もまたげずに行かれ

たとこそを思へば、高姫さまが後からお出になるのを知つて、うるさがつて逃げら

れたのかも分らぬから、此奴ア一つ考へものだ」

高姫「エ、人情を知らぬ冷酷な動物だなア。そんなことで三五教の宣傳使が出來

ますか。チツト粹を利かしたら如何だなア」

かく話す折しもスタスタと歸つて來たのは駒彦であつた。

國玉別「ヤア駒彦か。東助さまに會つて來たか」

駒彦「ハイ都合よく明石の港で追つ着き、秋彦にも會ひ、それから舟で淡路島の

お宅まで送り届け、お百合さまと面會の上酒を汲みかはし、私達兄弟もドツサリ

と頂きましたいた」

高姫たかひめ「コレお前は駒彦こまひこだつたな。そして東助とうすけさまはまだ淡路島あはぢしまにみられますかな」

駒彦こまひこ「ヤア高姫たかひめ様か、お珍めづらしい所ところでお目めにかかりました。随分ずぶん貴女あなたも玉たまの事ことについて、生田いくたの森もりには面白おもしろい経歴けいれきが残のこつて居をりますなア。國くに依別よりわけさまの神憑かむがりで竹ちく生島ぶしまへお越こしになつたり、随分ずぶん御苦勞ごくろうをなさいましたですなア。未だいまに時々ときどき思おもひ出して、國玉くにたま別様わけさまと話はなしして居ゐるのですよ。随分ずぶん玉たまにかけては、貴女あなたも偉えらいものですなア」

高姫たかひめ「コレ駒彦こまひこ、玉たまの事ことは如何どうでも宜よろしい、暇ひまな時ときに聞きかして下さいください。東助とうすけさまは如何どうして居をられますかなア。サア早はやく云いつて下ください。早はやく早はやく、氣きがせけてなりませぬワイナ」

駒彦こまひこ「東助とうすけさまですか、明石海峡あかしかいけふで別わかれました。モウ今頃いまごろにやあの勢いきほひで行ゆかれたら、高砂たかさこの沖おきへでもかかつてゐられるでせう。私わたしは小舟こぶねでたつた一人ひとり、ここまで歸かへつて來きました。そして森もりの中なかでいろいろと道草みちくさをくつて居をりましたから、大分だいぶん時間じかんがたつて居をりますよ。高姫たかひめさまは東助とうすけさまに何か急用きふようがあるのでですか」

高姫「エ、もう宜しい。東助の事は思ひますまい」

國玉別「サア高姫様、何卒ここに洗足の湯が沸いて居りますから、之を使つてお上り下さいませ、事務の引繼ぎをせなくてはなりませんから、引繼いだ以上は最早此處は貴女のお館ですから、どうぞ御ゆつくりとくつろいで御話を承はりませ

う」

高姫「ハイ有難う」

と云ひ乍ら、佐田彦に足を洗つて貰ひ、塵を打拂ひ乍ら、笠をぬぎ蓑をすて、奥の間へ進み入る。

其夜は主客共に安く寝につき、翌日國玉別は琉の玉を高姫の前に差出し、

國玉別「これが言依別命様より預りました琉の寶玉で御座います。貴女は此玉を何處までも保護して長く此森にお止まり下さいませ。私は神命に依り、玉能姫、駒彦と共に球の玉を持つて、紀の國路へ参り、之を祀らねばなりませんから、どうぞ、宜しうお願申します」

玉能姫「高姫様、何卒宜しく」

高姫「ハイ、畏まりました。私のやうな者が、尊い琉の玉を保護さして頂くといふ事は、何とした冥加に餘つた事で御座いませう。キット大切にお守り致しますから、御安心下さいませ」

國玉別「早速御承知下さつた上は、一刻も猶豫がなりませぬ。サア是より球の玉を捧じ、紀の國へ参りますから、随分御機嫌よくお勤めなさいませ」

玉能姫「駒彦、サア参りませう……高姫様左様ならば暫くお別れ致します」

高姫「どうぞ御無事に御神業をお勤めあそばすやう祈つて居ります。そんならそこ迄私がお送り致しますから、コレ佐田彦、此寶玉の番をしてゐて下さい」

國玉別「イエイエそれには及びませぬ。此玉が館にある以上は、あなたは暫くの間は此家をお出ましになつてはいけませぬ」

高姫「左様ならば、是非が御座いませぬ。ここでお別れ致しますせう」

と門口に見送る。國玉別、玉能姫、駒彦は十數人の信徒に送られ、夜を日についで紀の國の若の浦を指して進み行く。

(大正一一・九・一九 舊七・二八 松村眞澄録)

第二十六章 若の浦〔九四一〕

秋も漸く高くして

四方の山邊に佐保姫の

錦織出し小男鹿の

妻戀ふ聲を聞き乍ら

心あうたる夫婦連れ

國玉別や玉能姫

駒彦さまと諸共に

數多の信者に送られて

球の玉をば捧持しつ

再度山の山麓に

たちたる館を後にして

少しは名残を惜しみつつ

生田の森をくぐりぬけ

夜を日についで紀の國の

若の浦へと着きにける。

若の浦は昔は豊見の浦といつた。國玉別命が球の玉を捧じ、樟樹鬱蒼として茂れる和田中の一つ島に稚姫君命の御靈を球の玉に取りかけ齋祀つてより、豊見の

浦はここに若の浦と改稱する事となつたのである。此の島を玉留島と名づけられた。

玉留といふ意義は玉を固く地中に埋め、其上に神社を建てて永久に守るといふ意味である。今は此玉留島は陸続きとなつて、玉津島と改稱されてゐる。

此邊りは非常に巨大なる杉の木や楠が大地一面に繁茂してゐた。太い楠になると、幹の周圍百丈餘りも廻つたのがあつた。杉も亦三十丈、五十丈の幹の周圍を有するものは數限りもなく生えてゐた。自轉倒島に於て最も巨大なる樹木の繁茂せし國なれば、神代より木の國と稱へられてゐたのである。

大屋比古の神などは此大木の股よりお生れになつたといふ事である。また木股の神といふ神代の神も大木の精より現れた神人である。

近代は餘り大木は少なくなつたが、太古は非常に巨大なる樹木が木の國のみならず、各地にも澤山に生えてゐたものである。植物の纖維が醗酵作用によつて蟲を生じ、其の蟲は孵化して甲蟲の如き甲蟲族を發生する如く、古は大木の纖維により風水火の醗酵作用によつて、人が生れ出た事も珍しくない。又猿などは随分澤

山に發生したものである。

天狗を木精といふのは木の魂といふ事であつて樹木の精魂より發生する一種の動物である。天狗は人體に似たのもあり、或は鳥族に似たのもある。近代に至つても巨大なる樹木は之を此天狗の止まり木と稱へられ地方によつては非常に恐れられてゐる所もある。現代に於ても大森林の大樹には天狗の種類が可なり澤山に發生しつゝあるのである。

斯の如き事を口述する時は、現代の理學者や植物學者は、癡人の夢物語と一笑に付して顧みないであらうが、併し天地の間はすべて不可思議なものである。到底今日の所謂文明人士の智囊では神の靈能力は分るものではない事を斷言してお

さて國玉別、玉能姫は此島に社を造りて、球の寶玉を捧按し、之を稚姫君の大

神と齋祀り、傍に廣殿を建て、ここにありて三五教の御教を木の國一圓はいふも

更なり伊勢、志摩、尾張、大和、和泉方面まで擴充したのである。

國玉別は宮殿を造り玉を納めて天津祝詞を奏上し、祝歌を歌ふ。其歌、

國玉別 朝日のたださす神の國 夕日のひてらす珍の國

自凝島のいや果てに 打寄せ來る荒波の

中に浮べる珍の島 下津磐根はいや深く

龍宮の底まで届くなり 千引の岩もて固めたる

此珍島は神國の 堅磐常磐の固めぞや

皇大神の御言もて 琉球島より現れし

球の御玉を今ここに 大宮柱太知りて

高天原に千木高く 仕へまつりて永久に

納むる今日の目出たさよ 此神國に此玉の

鎮まりぬます其限り 自凝島はいや固く

波も静かに治まりて 青人草は日に月に

天津御空の星の如 濱の眞砂も數ならず

榮えて行かむ神の國 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 大地は泥にひたるとも

球きうの御玉みたまをかくしたる

此この珍島うづしまは永久とこしへに

水みづに溺おほれず火ひにやけず

國くにの守まもりとなりなりて

國玉くにたま別わけや玉能たまのひめ姫

仕つかへまつりし功績いさをしを

千代ちよに八千代やちよに止とどむべし

あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたま幸まひましまして

皇大神すめおほがみの守まもります

三五あななひけう教あめは天あめの下した

四方よもの國々くにくに隈くまもなく

伊行いゆきわたらひ神人かみびとは

いと安やすらけく平たひらけく

五み六ろ七くの御代みよを樂たのしみて

鳥獸とけだものはいふもさら

草くさの片葉かきはに至いたるまで

各々おのおの其所そのしよを得えせしめよ

球きうの御玉みたまに取とりかけし

稚姫わかひめ君ぎみの生御靈いくみたま

木きの神國かみくにに鎮しづまりて

押おしよせ來きたる仇波あだなみを

伊吹いぶき拂はらひに吹ふき拂はらへ

自凝おのころ島じまは永久とこしへに

榮さかえ榮さかえて神人かみびとの

ゑらぎ樂たのしむ樂園らくゑん地

天國てんごく淨土じやうどの有様ありさまを

いや永久とこしへに保たもちつつ

千代ちよに榮さかえを松まつ緑みどり

世よはくれ竹たけの起おきふしに

心こころを清きよめ身みを淨きよめ

仕つかへまつらむ夫め婦をと連づれ

心こころの駒こま彦ひこ潔きよく

神かみの御みまへ前に服まつろひて

惠めぐみも開ひらく梅うめの花はな

一いちど度に薰かをる時とき津つ風かせ

松まつの神かみ代の礎いしづを

樟くすの木きの根ねのいいや固かたに

杉すぎの木こた立たちののすぐすぐと

守まもらせ給たまへかむ惟ながら神かみ

神かみの御みまへ前に願ねぎまつる

神かみの御みまへ前に願ねぎまつる』

と歌うたひ終をはり拍はく手しゆ再さい拜はいして、傍かたはらの樟くすの根ねに腰こし打うちかけた。

玉たま能の姫ひめは又また歌うたふ。

南みなみに廣ひろき海うみをうけ

東ひがしに朝あさ日ひを伏ふし拜をがみ

西にしに二ふつ日かの月つきを見みる

此この珍うづ島しまに畏かしこくも

稚わか姫ひめ君ぎみの御おん靈み魂たま

齋いつきまつりて三あな五なの

神かみの司つかさの宣せんでん傳し使

國くに玉たま別わけや玉たま能の姫ひめ

心の駒彦諸共に

大宮柱太しりて

朝な夕なに仕へゆく

其神業ぞ尊けれ

天教山に現れませし

神伊邪諾大御神

神伊邪册大御神

日の出神や木の花の

咲耶の姫の御言もて

天の下なる國々を

開き給ひし神の道

神素盞鳴大神の

瑞の御靈は畏くも

高天原を退はれて

大海原の國々を

巡り給ひて許々多久の

教司を配りつつ

數多の神や人々を

教へ導き鳥獸

蟲けら草木に至るまで

惠の露をたれ給ひ

コーカス山や齋苑館

綾の聖地に天降りまし

仁慈無限の神徳を

施し玉ふ有難さ

妾も同じ三五の

神の大道の宣傳使

大海原を打渡り

山川やまかは幾いくつふみ越こえて やうやく玉たま能のの姫ひめとなり

生田いくたの森もりに年とし永ながく 仕つかへまつりし折をりもあれ

夫つまの命みことの若彦わかひこは 言こと依より別わけの御言みこともて

琉球りゅうきゅうの島しまより寶玉ほうぎよくを 捧ほうじて目め出でたく再ふたたび度の

山やまの麓ふもとの神館かむやかた 生田いくたの森もりに歸かへりまし

ここに夫婦ふうふは同棲どうせいの 惠めぐみに浴よくし朝あさ夕ゆふに

琉と球きゅうとの神寶しんぼうを 固かたく守まもりて居ゐる間うちに

玉照彦たまてるひこや玉照姫たまてるひめの 貴うづの命みことの御言みこともて

生田いくたの森もりの館やかたをば 高たか姫ひめ司つかさに相渡あいわたし

琉りゅうの玉たまをば殘のこしおき 球きゅうの神寶しんぼうを捧持ほうぢして

木きの神國かみくにに打渡うちわたり 大海原おほうなばらに漂ただよへる

堅磐かきはときは常磐とこはの岩いはが根ねに 宮居みやゐを建たてて嚴おごそかに

稚姫君わかひめぎみの御靈みたまとし 仕つかへまつれと宣のたまり給たまふ

あゝ惟かむながら神かみ々々 神かみの御言みことはそむかれず

住すなれかけし館やかたをば
後あとに見みすててはるばると

此この島しま國くにに來きて見みれば
思おもひもよらぬ珍うづの國くに

木き々の色いろ艶つや美うるはしく
野の山やまは錦にしきの機はたを織おり

川かはの流ながれはさやさやと
自し然ぜんの音おん樂がく奏かなでつ

天てん國こく淨じやう土との如ごとくなり
殊ことに尊たふとき此この島しまに

珍うづの社やしろを建たて上あげて
いいや永とこ久しへに守まもる身みは

げにも嬉うれしき優う曇どん華げの
花はな咲さく春はるに會あふ心こ地ち

皇すめ大おほ神かみの御み惠めぐみの
深ふかきを今いま更さら思おもひ知しり

感かん謝んしゃの涙なみだしとしと
口くちには言いはれぬ嬉うれしさよ

稚わか姫ひめ君ぎみ大おほ御み神かみ
汝なれが命みことは此この島しまに

いいや永とこ久しへに鎮しづまりて
普あまねく世よ人びとの身み魂たまをば

守まもらせ給たまへ惟かむ神ながら
神かみの御み前まへに只ひた管すらに

玉たま能のの姫ひめが願ねぎまつる
あゝ惟かむ神ながら々ながら

御み靈たま幸さちはひましませよ
』

と歌ひ終り、永久に此島に鎮まり神業に奉仕する事とはなりける。

(大正一一・九・一九 舊七・二八 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・一〇 王仁校正)

付録 伊豆温泉旅行に就き訪問者人名詠込歌

沼津驛【杉】て【山】海ながめつつ

温泉を【當】てに【一】筋に行く

(杉山當一)

夏木立繁る【林】を右左

【やへ】九重の路を分けゆく

(林八重)

松【林】風なきままにむしあつく

あたり【しづ】かに羽車の音

(林しづ)

かた側は【林】片方は和田の原

【なみ】を眺めて進み行くかな (林なみ)

水にぐる【池川】深く【ウタ】がひの

雲晴れ映る不二の神山 (池川ウタ)

【相】ともに【磯】しみ神に仕へつつ

大和御魂の【たね子】培ふ (相磯たね子)

夏の風【福井】の隧道に【精】魂は

いと【平】かに湯ヶ島に行く (福井精平)

見渡せば【小田】の稲葉もそよぐなり

野【武士】の水火もさわやかにして (小田武士)

小田【牧野】いと永々と【龜】の子の

よはひを保ち【吉】美に仕へむ (牧野龜吉)

松の代と早【成岡】の神の山

【銀】光【一】路 (郎) 頂上に輝く (成岡銀一郎)

【石田】たみ敷竝べたる都路に

【卓】越したり深山の路【次】
(石田卓次)

【石田】たみ敷つめたりし天王の

山【よう】ように登りけるかな
(石田よう)

【遠】き空に雲を被りし【藤】の山

眺めも【弘雄】見え渡るかな
(遠藤弘雄)

初より【相】も【川】らず大本の

金【ぎん】の教守る信徒
(相川ぎん)

小田【牧野】の絲永々と【大】本の

神の【吉】言や物語すも
(牧野大吉)

小田【牧野】いと永き日を神【軍】の

あとを尋ねて夢物語せむ
(牧野軍吉)

【遠】州の濱松よりも【藤】の峰の

神の御【伊喜】の【知】られけるかな
(遠藤伊喜知)

【伊】すくはし加【賀】美に等しうし【とら】の

神の御教を諭す此書 (伊賀とら)

狩野川【谷口】【清】く温かき

泉の水は湧き【満】ちにけり (谷口清満)

小松原【杉原】清く立並び

梅の花【佐久】松の神代かな (杉原佐久)

【百】と【瀬】も千年【豊】に稔れかし

大みたからの【作】る田の面は (百瀬豊作)

汚れたる世はいつしかに【杉原】や

百の【喜】び【重】ね重ねて (杉原喜重)

神【杉】の神さび立てる清の【原】は

【たか】天原の心地こそすれ (杉原たか)

【杉】去りしなやみ苦み【原】ひつつ

【いよ】いよ進む神の大前に (杉原いよ)

老おいの坂さか安やすく樂たのしく【杉すぎ原はら】の

神かみの御み【德とく】ぞこの【右う衛ゑ門もん】なし
(杉原徳右衛門)

【鈴木すずき】野のを分わけて神しん【政せい】布しく時ときは

世よは太たい【平へい】の夢ゆめに醉よふらむ
(鈴木政平)

神かむながら【鈴すず】し【木き】いづの言こと靈たまは

【八や】島しまの國くにを清せい【郎らう】にする
(鈴木八郎)

【水みづ】御み魂たま【口くち】より出いづる言ことの葉はの

【聰さう夫と】あつむる物もの語がたりかな
(水口聰夫)

惟かむ神な清らき御み魂たまを【與よ五ご澤さ】じと

神かみの【光ひかり男をとこ】尋たづね詣まうでつ
(與五澤光男)

暗くらがりの世よも【杉すぎ原はら】の神かみの代よは

五み六ろく七しちの【光ひかり】【次つぎ】々つぎに照てる
(杉原光次)

神しん徳とく【野の】【極きよく】まりもなき大本おほもとは

他たに【勝かち】れたる教をしへなりけり
(野極勝)

釜谷のふもと流るる「大川」に

お「りん」とすれば温泉の瀧

(大川りん)

神々の天降ります坪の「内」は

「田」庭の國に「ふさ」はしき御名

(内田ふさ)

「浅」かすみ「田」な引く空に「正」しくも

「英」でて立てる不二の神山

(浅田正英)

「安」々「藤」「唯夫」もしろく進むかな

神の教の船に棹して

(安藤唯夫)

野も山も「青木」のみどり榮え行く

日本の「久」二「三」尊かりけり

(青木久三)

「谷」波なる出「口」の神の御教は

「忠」と考と「夫」さとす大道

(谷口忠夫)

神の教を大「せつ」に

(谷口せつ)

守りて身魂「皓男」子

(同皓男)

天あまの岩いはと戸とを押し開ひらく

五いつ【と鞆も】の【を男を】と現あらはれて (同鞆男)

千ち入のりの【ゆ偏き男を】負おはせつつ (偏男)

寄よせ來くる魔ま軍ぐんを打うち拂はらへ

世よは【やす安く】國に【と藤と】進すすみ行ゆく

天あめ地つち【かね】のおほみかみ (安藤かね)

【かきん】勝かつ金かねのおほかみの (同きん)

開ひらき給たまひし神かみ言ことの

御み【ふ文み夫を】力ちからに信まめ徒ひとが (同文夫)

三さん千ぜん世せ界かいの寶たから【とし】 (同とし)

國くにの御み【い出づ夫を】中うち外そとに (同出夫)

かかがやき渡わたせ秋あき津つ人びと

いと深ふかき神かみの惠めぐみに【あ相い川か】の

思おもひも【は春る】の心こ地ち【よ吉は】きかな (相川春吉)

【宇城】より【信】夫の花は咲きにけり

日【五郎】盡せし誠生れて
(宇城信五郎)

【中】々に心【野】【武】の伸々と

故【郷】忘るる温泉の宿
(中野武郷)

【谷】川を眺めて涼しき物語

【廣】き【賢】き大神の教
(谷廣賢)

國【中】にさやる【村】雲吹き拂ふ

科戸の風は【純】わたる【也】
(中村純也)

八百【米】を杵築の宮の高御【倉】

神【嘉】ぎ祭り【兵】もの【衛】る
(米倉嘉兵衛)

【平】けく治まる【松】の神の世は

【福】風【三】えも【朗】く涼しき
(平松福三郎)

あき【米倉】さまして救ひ助くべし

實地の【範】を【治】め示しつ
(米倉範治)

【星田】にも見えわかぬまで曇る代を

照して【悦】ぶ神の御【子】たち
(星田悦子)

眞【清水】に清き姿をうつそみの

心の【秋】の【月】ぞ尊き
(清水秋月)

久方の雲【井】の【上】に照る月を

【頼】りに進め【次】第次第に
(井上頼次)

いと【清】き【水】の御魂の神言を

【菊藏】うれしき今日の旅かな
(清水菊藏)

かく【戸田】に思はざりけり天地も

【澄】きりませる神の【國】とは
(戸田澄國)

大神の誠の道を【佐藤】りつつ

御【六合雄】まもる人ぞ尊き
(佐藤六合雄)

大神の道【柴田】どる【健】氣さの

幸いち【次郎】く見えにける哉
(柴田健次郎)

漸やうやくに平和へいわの風かぜも【福島ふくしま】の

【久ひさ】方かたぶりに笑顔えがほ見る哉みかな

(福島久子)

神館かむやかた立ちて【出口でぐち】の汽車きしやの旅たび

伊豆いづの【澄すみ】湯ゆに尋たづね來きしかな

(出口澄子)

高天たかまより伊豆いづの靈地れいちへ【渡邊わたなべ】の

至清しせい至し【淳ゆん】の【一ひと】道みち男子をとこかな

(渡邊淳一)

大正十一年八月廿五日 於伊豆湯ヶ島

付録 湯ヶ島所感

千早ちはや振ふる神代かみよの儘ままの狩野川かりのがは

清きよき流ながれに魂たまを洗あらひつ

谷川の水瀬の音も涼々と

清く響きぬ旅寝の枕に

蒸し暑き晩夏の空を狩野川の

涼しき森に身魂ひやしつ

新しく作り了へたる珍の家に

隔てなき友の寄りつ語りつ

蝉蜻蛉熊蜂蝶と川の邊に

遊びて神代の心地養ふ

狩野川の中に浮べる湯ヶ島の

阿屋涼し水音清し

川深み彼方の岸に渡さむと

心の竹の橋をかけたる

川と川に挟まれ涼しき林中に

林姉妹静岡より来る

速川の岩にせかれて波白し

鮎を漁る人の背黒し

吾憩ふ細谷川に尾を垂れて

岩とび渡る鵲鴿一羽

水眼鏡かけて片手に棹にぎり

河童息子の魚漁るなり

釣りあげた鮎や「ヤマメ」を嬉しげに

「めをと」二人が眺め居るなり

大正十一年八月廿五日 於伊豆湯ヶ島

くくくくくくくくくくくく

靈界物語 第三三卷 海洋萬里 申の巻

終り